【著者】

細音啓
さざね・けい

プロジェクト・アンコール、開始!
小説5巻、ドラマCD、そしてコミカライズ連載と、
この10月はイベント盛り沢山で楽しみです!

【イラストレーター】

ふゆの春秋
ふゆの・はるあき

イラストレーター。ライトノベルをはじめ、多数の作品の挿絵を手がける。近作に『知らない映画のサントラを聴く』（新潮文庫nex）など。

カバーイラスト／ふゆの春秋　装丁／阿閉高尚

世界の終わりの世界録 5

アンコール

降魔の大皇

Rh/Nel Ar, KyelS ele kiss I-Corn.

Veruśalem, The Demon King of Blades

細音啓
Kei Sazane

Illustration
ふゆの春秋
Haruaki Fuyuno

MF文庫 J

世界の終わりの世界録5：降魔の大皇
細音啓

MEDIA FACTORY

580

ISBN978-4-04-067942-6
C0193 ¥580E

定価：本体580円（税別）
発行：株式会社KADOKAWA
KADOKAWA
メディアファクトリー

世界の終わりの世界録5：降魔の大皇

伝説の英勇エルラインが遺した至宝「世界録」。その在り処を世界中の国や旅団が探し求める時代――覇都エルメキアを舞台とした三大姫の大暴れで「再来の騎士」の名声が高まる一方、レンは騎士王ゼルブライトとの激闘の末、新たな「英勇」としての可能性を顕示。そして一行は最後の封印を解くために冥界へと歩みを進める。危険すぎる道中の先に待ち構えるのは、エリーゼの弟である現魔王ヴェルサレム、五大災、正体不明の沈黙機関。過去と因縁に囚われし者たちが鎮魂曲を奏でる中、現在と未来を切り拓く偽英勇の熱き叫びがこだまする。「太古を誇るだけの獣が、現在を生きる人間を舐めるんじゃねえ！」――いま、最も王道を行くファンタジー、怒涛の第5弾！

MF文庫 J

細音啓の本

- 世界の終わりの世界録 1：再来の騎士
  [イラスト：ふゆの春秋]
- 世界の終わりの世界録 2：極光の竜帝
  [イラスト：ふゆの春秋]
- 世界の終わりの世界録 3：熾天の女神
  [イラスト：ふゆの春秋]
- 世界の終わりの世界録 4：異端の覇王
  [イラスト：ふゆの春秋]
- 世界の終わりの世界録 5：降魔の大皇
  [イラスト：ふゆの春秋]

キミを元気にするコミック誌
comic alive 月刊コミックアライブ
毎月27日発売!!
★連載作品がちょっと立ち読みできちゃう!
URL http://bc.mediafactory.jp/comic-alive/
公式Twitter @comic_alive
MF文庫J原作のコミカライズも多数連載中!

Project Encore Evolve!
プロジェクト・アンコール
――魔王戦、正体不明の沈黙機関とは
各巻ランキング 1位 (BOOK☆WALKER)
詳しくは裏面で!
いま、最も「王道」を行くファンタジー激震の第5弾!
MF文庫J 大展開中!
MF文庫J

世界の終わりの世界録(アンコール)
プロジェクト・アンコール大展開中!
Rh/ Nel Ar. KyelS ele kiss I-Corn.

コミック版
2015年10月27日発売号より
月刊コミックアライブで
連載開始!(作:雨水龍先生)

イメージCD
メタル・プロジェクト
Dragon Guardian
とコラボ!
ゲストボーカル:
原田ひとみ、青葉りんご、野宮あゆみ
『少年騎士と3人の少女の英雄詩』
好評発売中!

ドラマCD
細音啓先生
の書き下ろし
脚本!
発売元:
シーサイド・コミュニケーションズ
『青の妖精と銀世界の騎士』
好評発売中!

MF文庫J MF文庫J編集部公式アカウント
@MF_bunkoJ
Twitterやってます!
フォローする
待受画像プレゼント中!
アンケートに答えて無料待受をGET!!
▸▸この本の巻末にある二次元コードまたはURLに携帯でアクセスしてアンケートページへ飛びます。
▸▸最後まで回答してくださった方には、ステキな待受画像をプレゼント。より良い本作りのため、ご協力をお願いいたします。
さらにメールマガジンに登録すると、最新刊情報やメルマガ会員限定情報をメールでGETできます。あなたも是非、メールマガジンにご登録ください!
※実際の画像とは異なる場合がありますし、※一部加工していない端末もございます。
151031 世界の終わりの世界録5

世界の終わりの世界録（アンコール）

5:降魔の大皇

細音啓

MF文庫 J

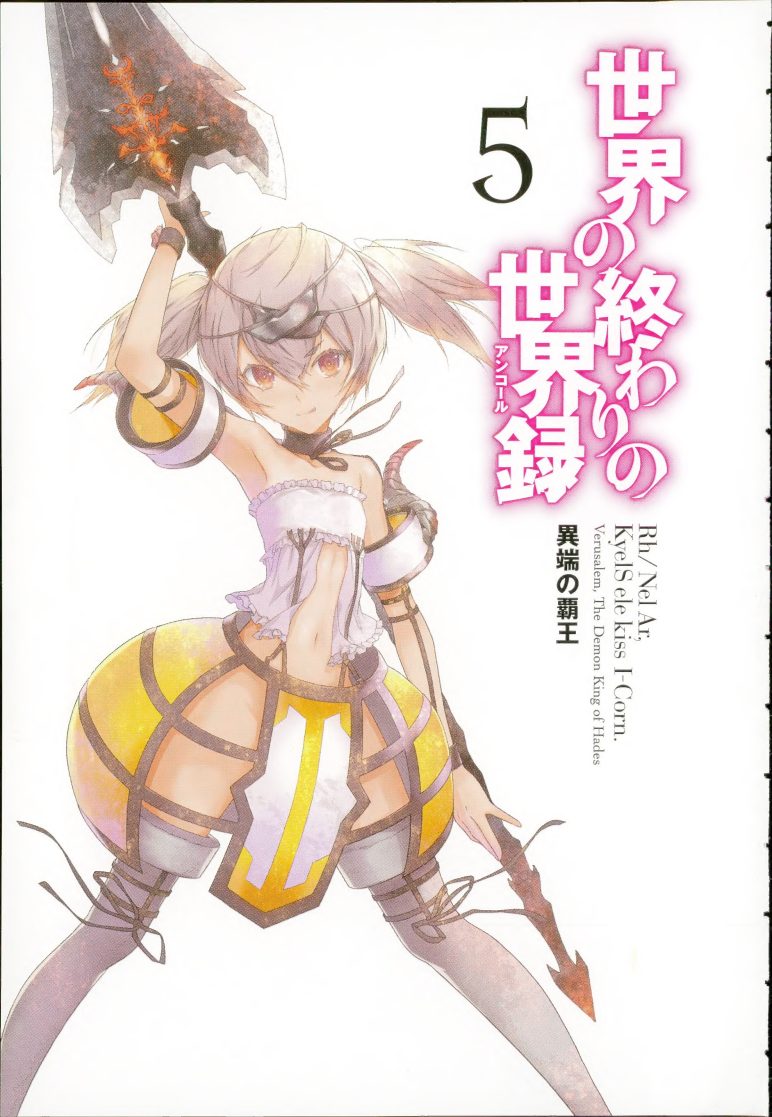
世界の終わりの世界録（アンコール）

5：降魔の大皇

細音啓

MEDIA FACTORY

MF文庫 J



世界の終わりの世界録（アンコール）

5

Rh/ Nel Ar.
Kyrel S ele kiss I-Corn.
Verusalem. The Demon King of Hades

異端の覇王

「レン様が負けたら、
レン様はエリーゼ様の
旦那様になるそうです」
先代魔王エリーゼ
かつての冥界の支配者。
今は転生して10歳。
久々に帰省。
氷の将魔ルル
五大災の一員にして、
魔王城の家政婦長を
務めている。

竜姫キリシェ
竜を総べる伝説の
三大姫の一人。
甘いお菓子が好き。
大天使フィア
女神を超える天界の
真の実力者。
見かけによらず武闘派
かつ酒豪。

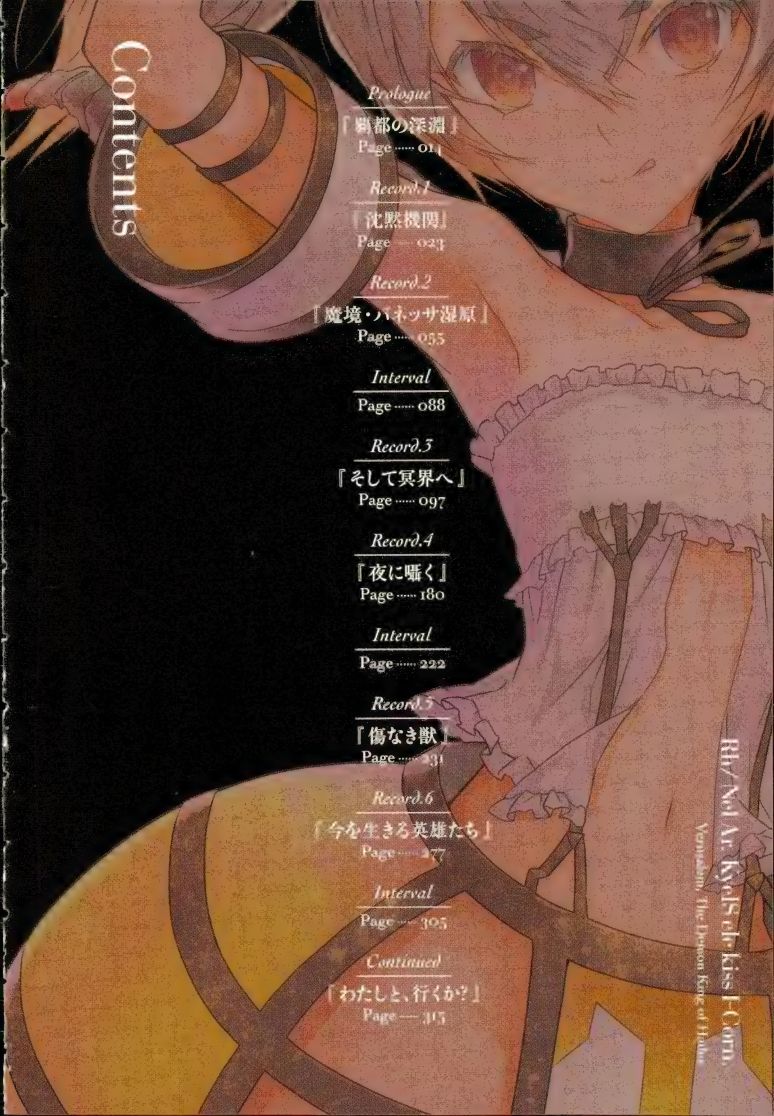
「……シオン、あなたが言いたいのはまさか……」
口にした声が、擦れていた。
エリエスもまた気づいてしまった。
剣聖の言葉が何を意味するのか。
聖エリエス
カナン巡礼聖教船を束ねる聖女。
レンと並ぶ古代召喚術の使い手。

剣聖シオン
現代最高峰の剣士。
精霊の怯えの正体を追い
世界各地を巡る。

「さあレン、アタシから
とっておきの贈り物（プレゼント）だよ」

偽英勇レン

伝説の英勇エルラインに
見た目だけそっくりな少年。
悪魔法印の獲得に挑む。



Contents

Prologue
『覇都の深淵』
Page …… 011

Record.1
『沈黙機関』
Page …… 023

Record.2
『魔境・ハネッサ湿原』
Page …… 055

Interval
Page …… 088

Record.3
『そして冥界へ』
Page …… 097

Record.4
『夜に囁く』
Page …… 180

Interval
Page …… 222

Record.5
『傷なき獣』
Page …… 231

Record.6
『今を生きる英雄たち』
Page …… 277

Interval
Page …… 305

Continued
『わたしと、行くか？』
Page …… 315

世界の終わりの世界録（アンコール）
5：降魔の大皇

細音啓

MF文庫J

CHARACTER
キャラクター

旅団：「再来の騎士」構成メンバー

◉レン Ren

「偽英雄」と呼ばれる少年。キリシェに誘われ「世界録」を探しに旅立つ。

◉キリシェ Kyrie

3000年ぶりに封印から目覚めた伝説の竜姫。エルライン たちと共に世界を救った。

◉フィア Fear

天界最強と謳われる大天使で、伝説の三大姫の一人。

◉エリーゼ Elise

冥界の支配者だった先代魔王その人。今は転生によって10歳児相当の姿に。

STORY
ストーリー

英勇エルラインが遺した至宝『世界録』の在り処を世界中の国や旅団が探し求める時代――「偽英勇」と揶揄される少年レンは、伝説の三大姫（竜姫キリシェ、大天使フィア、先代魔王エリーゼ）と共に旅団「再来の騎士」を結成し、世界録を求めて旅立つ。炎の将魔を倒し、一躍世界中に知れ渡ったレンたちは、『終焉の地』の封印を解除するために竜の秘境、さらには天界を訪れる。聖地カナンでの聖女エリエスとの邂逅を経て、生涯の誓いを立てたレン、不穏な動きを見せる世界最大の旅団「王立十二特務騎士団」の本拠地・副都エルメキアにカナン巡礼聖教船と共に乗り込み、三大姫たちと大騒動を巻き起こすことに。世界最強の男・騎士王ゼルブライトとの一騎打ちを果たしたレンは、彼自身の『英勇の資格』を顕在し、かの地に大きな衝撃を刻む。

KEYWORD
用語

【英勇】

かつて歴史上で剣帝エルラインのみに与えられた世界を救った者の称号。世界録を見つけだした者にその2代目の栄誉を与えられると国家間で決められている。

【世界録】

伝説の英勇エルラインが遺した至宝。世界の終焉と再来の秘密が記された手記。手にした者が世界の覇権を握ると言われ、世界中の国家や旅団がその在処を求めている。

【旅団】

この世のどこかにある世界録を探すことを主目的に結成された、武装した旅行者の一団。その役割は財宝の探索や害獣の討伐、都市の警備など多岐にわたり、『王立七十二階位特務騎士団』など国家公認となっている集団も存在する。

【剣帝エルライン】

かつて竜姫と大天使と魔王を引きつれて世界を救った伝説の剣士。世界滅亡の危機である「終焉戦争」を鎮め、歴史上ただ一人「英勇」の称号を持つ。26歳で没するまでに世界中を旅し、最後に「世界録」を世に託した。

【旅団の構成技能】

[騎士]剣や斧といった武装を使用。常に近接戦闘を求められるがゆえに危険高く、卓越した技能と冷静な判断が求められ、チームの『主力』とされる。

[法術士]悪魔の用いる呪術・攻撃用法術を、複雑な儀式により人間の身で再現する。

[精霊使い]精霊の力を宿した精霊具を利用して法術を使用する。

[武闘者]防御法術と肉体活性を併用したうえで、自らの肉体と闘技のみで敵を討つ近接特化戦闘員。武器や鎧の強度に依存しない、という強みをもつ反面、非常に多くの素養と修練を必要とすることから『全能』と称される。

[結界士]隠蔽、封印、遮断、加護など天使の得意とする法術を使役する。

[療法士]肉体活性や蘇生法術のほか、薬学、医学の知識も求められる技能。

[狩人]害獣に関する様々な知識を活かして狩猟する知識系戦闘員。遠距離からの射撃特化で旅団の戦闘を後方から支援する。

[探索士]旅団の頭脳担当で、分野としては考古学者に近い。過去の古代遺跡の調査情報をもとに、そこに仕掛けられた罠や隠し通路を探知する技術が求められる。

"——世界録を発見した者に、歴史上二人目となる『英勇』の称号を授与する"
世界連合協議会　議事録より

WORLD

世界概要

口絵・本文イラスト：ふゆの春秋

覇都エルメキア
聖地・秘境を含む
人類未踏破・調査難関エリア

Prologue 覇都の深淵

風のない夜。
乾いた空気に埃と粉塵とが混ざりあうなかで――
「ふむ。見事に地下部分が破壊されておる。これでは城が崩れ落ちるのも仕方あるまい」
覇都エルメキア・イスタルシル支城。
その隠しフロアにいたる地下階段を見下ろして、小柄な老人が喉を鳴らした。
目の前にはうずたかく積もった瓦礫と土砂の山。遡ること五日、旅団「再来の騎士」が残した侵入の爪痕だ。
「散歩気分での視察のつもりが、瓦礫の坂道を下るハメになるとはの。足の悪い老人には酷ではないか？」
「よく言う」
吐き捨てるように告げたのは片手半剣を携えた壮年の騎士だった。
短く切りそろえた赤銅色の髪に、冷たい灰色の双眸。戦闘衣から露出する肌は幾年もの修練のなかで灼熱の陽に焼かれ、黒の甲冑と同化するほど日焼けしている。

――『外法騎士』カサディン。

覇都王家より謹慎処分を受けている王立七十二階位特務騎士団の、その最高幹部に名を連ねる剣士として知られている。

「さっさと下りてこい。旅団を追放された身分のお前が、この城の跡地で彷徨っていると知られるのも面倒だ」

「なに。誰もいやせんよ。この場にいるのは儂ら三人じゃ」

金属製の杖をついた老人が、瓦礫の散乱する陥没孔をまるで猫のような身軽さで跳び下りていく。

元・序列四位『狂刃』ナーフレス。

虚構精霊の製造と聖地カナンの襲撃、その双方の責任を問われ、旅団を除籍されたはずの研究者だ。

「しかし崩壊の決定打が竜の息吹とは滑稽だ。虚構精霊を棲まわせた秘奥領域は、お前の自信作だったはずだなナーフレス。最硬の密閉空間ではなかったのか？」

「何事にも例外は存在する。驚くべきことではあるまい」

陥没孔の最深部。

ほとんど原形を留めていない地下へと到達する老人と騎士。王立七十二階位特務騎士団の幹部二人が立っているのは、支城と共に崩壊した虚構精霊の研究施設だった。

「竜姫キリシェの息吹。……いや素晴らしい。幻と言われる天銀竜の純血個体。その姿を観察できなかったことは残念じゃが、ますます研究意欲が湧くというもの」
「悔し紛れの言葉だな」
「滅相もない。しかし姿を見られなかったといえば、お主、あの剣聖と手合わせしたそうではないか。それを見逃したのも残念じゃった」
「語るほどのものはない。互いに牽制で終わった」
低い声でそう返すカサディン。
地下フロアの残骸の奥へと歩を進めながら。
「惜しいな。あれだけ用意した実験槽がすべて瓦礫の下敷きとは」
地面に散乱したガラスの破片。
暗い足下を凝視すれば、割れた実験槽の内側を満たしていた溶液が水たまりを作っているのも見て取れる。
「さて待たせたの？」
「いいえ。僕はここで寝ていただけなので。もっと遅くてもよかったです」
地下の奥深くから響いてくる返事。
割れた実験槽の液体が溜まって小さな湖を形成したフロアの奥で、じっとうずくまっていた青年が奇妙な笑みとともに顔を上げた。

白の長髪を後ろで一つに束ねた青年。
年齢は、ようやく二十になった頃だろうか。整った白皙の相貌は美しいと表現しても過言ではないが、彼を見た者の多くは別の感想を抱くに違いない。
すなわち気味が悪い、と。
空っぽの微笑。感情という感情が抜け落ちた瞳の下に、人形劇に出てくる人形のような無機質な笑みを浮かべた青年だった。
――序列二位・王蛾。
世界に名を轟かす王立七十二階位特務騎士団にありながら、外部に公表されているのは序列と名前のみという剣士だ。
「ところでご用件は？」
「例の話し合い、ようやく覇都王家から承認が下りた。その報告じゃよ」
「我が旅団の再編についてだ」
ナーフレスの言葉を継いだのは、カサディンだ。
旅団「再来の騎士」の覇都侵入によって虚構精霊の製造が暴かれ、そこに居合わせたカナン巡礼聖教船により、この一件はすでに世界中に広がっている。
これを危ぶんだエルメキア王家は、責任を王立七十二階位特務騎士団に押しつけた。
その結果が序列一位の騎士王ゼルブライトと序列四位ナーフレスの除籍。さらには旅団

の謹慎処分だ。
「新体制という名目になるのじゃろうな」
カツッ、と地面を杖で突く老人。
「まず序列一位であったゼルブライトの除籍の分、各々の序列が一つ繰り上がる。カサディインが二位で、王蛾、お主が一位じゃ」
「ナーフレスさんは？」
「儂？　儂は除籍じゃよ。この老いぼれに幹部の責務など背負わせたら重すぎて背中が曲がるわ」
楽しげに声を弾ませる老研究者。
「旅団の幹部としてはもちろん、覇都の開発部局からも解任された身じゃからの。今後はただの施設見学者として顔を出させてもらうとする」
「……」
そこまでを聞いて。
「あれ？」
白髪の青年がふしぎそうに首をかしげた。
「まるで何も変わってないように思えます」
「そうだ。何一つ変わっていない。むしろ加速すると言っていい」

力強い言葉で応じる外法騎士。
――制御が外れた。
圧倒的な偉力によって旅団を統制し、碑文の三賢者たちの野望を牽制し、虚構精霊という失われた技術を抑止していた騎士王が去った。
虚構の力に魅せられた者たちの独断を阻むものが何一つなくなったのだ。
「まずは施設の再建。それと並行して虚構精霊の試験体を量産する」
鋭利な眼光で、目の前の虚構精霊を見下ろすカサディン。
「聖地カナンの監視者がまだ覇都に紛れこんでいる。しばらくは慎重に事を進めていくことになるだろうな」
「はい」
うずくまったまま、白髪の青年。
自分によりそう虚構精霊・試験体をわずかに顧みて。
「完成体はまだですか？」
「なに、焦らずとも順を追ってじゃよ。アレは一体作ろうとするだけで途方もない手間を要するからの。とにかくお主は何もしなくていい。必要があればカサディンが指揮を執る。今はお主のソレと仲良くしておれ」
「……」

試験溶液の水たまりに座っている王蛾。
その背後に音もなく佇んでいるのは一体の光り輝く巨人――虚構精霊という名で知られるモノの試験体だった。
青年の傍から離れようとしない。
まるで生まれたての飼い犬が、主人である人間へと寄りそうように。
「後ろの個体、よくお主に懐いているな」
「どうせすぐに壊れてしまいます。試験体ですから」
無感情な声音で答える王蛾。
そう。これが白髪の青年に備わった奇怪な力だ。
精霊に懐かれる剣聖や偽英勇のように――虚構精霊に懐かれる。
精霊の声を聞く聖女のように――自在に虚構精霊に指示できる。
だが決定的に違う点があるとすれば。
邪剣士・王蛾は、自分に懐く虚構精霊に一切の感情を抱かない。
「ところで、この前の件はどうなりました？」
「はて珍しいの。お主が自分から話題を振るとは」

王蛾の問いかけに首をかしげるナーフレス。
「珍しすぎて何の話か想像がつかんわい」
「天界の審門が破壊されたことです」
地下に閉じこもっていながら、誰から報告をうけたというのか。
「覇都のすぐ近くにあったやつ。剣聖シオンが覇都に来る時に利用したはずの審門です。そうでしたよね？」
「……説明の手間が省けたな。虚構精霊から情報収集とは器用な真似をする」
淡々とした口ぶりで肯定したのはカサディンだ。
「よもやシオンの仕業とも思えん。碑文の三賢者に解析を急がせているが、まあ十中八九、沈黙機関だろうと予測はついている。狙いは……地上と天界、地上と冥界をつなぐ経路をことごとく遮断する気だろうな」
「左様。儂らの意識が覇都の防衛に向いていた隙を突かれたの」
溜息めいた息をつくのはナーフレス。
「ゼルブライトの存在が沈黙機関をも押さえていたのじゃろうな。研究対象だった審門を破壊されたのは痛手じゃが、これで奴らも覇都の監視は終えたはず。奴らが次に向かう先はおそらく『再来の騎士』。奴ら一行と沈黙機関とが世界録を奪いあい、うまい具合に潰しあえば僥倖。そうでなければ……」

「終焉の島にて私たちが両者を制圧し、世界録を手に入れる。それだけだ」
不敵な微笑で応える王立七十二階位特務騎士団の最高幹部。
――世界最大の軍事都市から、世界最悪の傀儡都市へ。
騎士王ゼルブライトという最大の制御機能を失った覇都が、止まることもできずに深淵へと墜ちていく。
虚構の力に魅せられた者たち、その暴走が始まった。

Record.1 ― 沈黙機関

1

小雨上がりの午後。
聖地カナンの一角は、かつてない悪臭と禍々しい黒煙に包まれていた。
「と、とても斬新な味です……わ……がふっ！」
「倒れた――っ!?」
口から黒いビスケットの欠片を吐きだして倒れる老齢の女性を抱き起こし、レンはその肩を大きく揺さぶった。
「大丈夫ですか!?　しっかり、意識を強くもって！」
「……はい、素敵なお花畑が見えます。あぁ、亡き夫が向こうで手招きを……」
「ソッチにいっちゃダメですってば!?　キリシェ、水だ水！」
安らかな微笑を浮かべる老婆に無理やり水を飲ませる。
「――はっ!?　わ、私はいったい？」

「ふう。危なかった……」
我に返った女性を横目で見て、レンはやれやれと息を吐きだした。
「間一髪だよ。なあキリシェ」
「む。何か危ないことでもあったのか？」
不思議そうに首をかしげる少女。
キリシェ――煌めく銀髪に、深い緑玉色の瞳、そして儚げな印象の面立ちが特徴の少女だ。青を基調とした旅装束に、色素の薄い華奢な肢体がよく映える。
童話にそのまま登場できそうな可憐な容姿の少女だが、本来のキリシェは竜種の頂点に君臨する竜姫だ。
そんなキリシェがエプロンを着けた姿で、満足げに腕組みして。
「どうだ。料理教室の教師さえも一撃で倒すわたしの料理」
「料理で相手を倒してどうするんだよ!?」
オーブンから濛々と立ちのぼる黒煙を指さして、レンは声を張りあげた。
旅団『カナン巡礼聖教船』の拠点である本霊宮の調理室、百人をこえる旅団メンバーの食事を一手にまかなう厨房だ。
……まあ何が問題かって。
……キリシェが料理教室に参加したいって言うのを止めなかった俺が悪いのか？

料理教室の参加者は十数人いたが、講師である老女とレン、キリシェを除く全員が既に調理室から避難済み。

それもこれも、すべてキリシェによる煙と異臭騒ぎによるものだ。

「オーブンの火力を上げすぎてオーブンごと黒こげ。それに……さっきから何だこれ、このとんでもない激臭？」

「ビスケットに混ぜたラブラの実の匂いだ」

エプロンのポケットから、皮袋に入れた赤い実を取りだすキリシェ。

「竜の渓谷に生えるラブラの樹になる実で、この清涼感ある匂いがわたしのお気に入りだ。ビスケットの隠し味にと思って混ぜてみたが、人間が口にすると――」

「口にすると？」

「刺激が強すぎて意識を失うことが判明した。今後の教訓にしよう」

「料理教室の先生で人体実験しちゃダメだろっ!?」

「ふっ。竜種の繊細な味覚は、まだ人間が理解するには難しいか」

「どうしてそんな自信に満ちてるのかわからないけど、とにかく勝手にビスケットに変な物を加えるのはダメだからな？」

調理台の上に乗った暗黒のビスケットを恐る恐る手でつまむ。

「でもこれだけ強烈な臭いなら、エリーゼに食べさせたら目が覚めたりして……」

覇都エルメキアへの侵入、そして王立七十二階位特務騎士団との激突。
それから六日――
カナン巡礼聖教船とともに覇都を脱出したレンたちが、世界録探しの旅を再開することなくカナンに留まっているのには理由がある。それがエリーゼの容態だ。
「もう一週間近く目を覚まさないけど、本当に平気？」
「心配いらない。単に法力を放出しすぎて仮死状態になっているだけだ。禁術を使ってまで魔王に戻った反動だろうな」
「仮死ってすごい重体に聞こえるけど……」
「その点は心配ない。むしろエリーゼにそうさせる程の相手だったという方が重要だ」
「……虚構精霊の完成体、か」
〝虚構精霊。私たち三賢者が、「光り輝く者たち」に対抗するために作り上げた切り札よ。世界を救うため。そして神性都市シィエラミリスのためにね〟
碑文の三賢者との邂逅。
そして彼らの研究成果だという虚構精霊の完成体を、レンはこの目で確かに見た。
……あの完成体を見たときの、土の始原精霊と火の始原精霊の怯え。

……今までにないくらい異様な怯え方だった。
そんな強敵と戦ったのがキリシェ、そして大天使と先代魔王だ。
戦闘にはかろうじて勝利したものの、エリーゼは一時的に法力を使いきってもう六日間眠り続けている。
「フィア先輩が様子を見てくれてるし、心配はしてないんだけど」
「ええ。つい先ほどエリーゼも目を覚ましましたわ」
レンの呟きに答えたのは、調理室に姿を見せたフィアだった。
「これ……香樹ラブラの実の匂い？　キリシェったら、この樹の実は稀少ですから竜の渓谷でも持ち出し禁止のはずでは？」
「竜帝にバレなければ平気だ」
「そうは言いますが、この実、本当に臭うんですよ。竜の嗅覚は困ったものです」
苦笑を滲ませて、どこからともなく取りだした扇子で黒煙を仰ぐフィア。
――天界の大天使。
深い青の瞳に、白銀がかった黄金色の髪が印象的な少女だ。
見目麗しい容姿に加え、その落ちつきはらった物腰とやわらかな微笑は、仲間の中で誰より大人びた雰囲気を感じさせる。
「フィア先輩、エリーゼが目を覚ましたっていうのは？」

「たった今です。まだ眠いと言っていましたが、レンが話しかければちゃんと返事もできるはずですよ」
「そっか。でもまだ眠いならしばらく一人にさせた方がいいかな」
エリーゼの意識が戻ったことに胸をなで下ろす。
と、ちょうど時同じくして。
「何これ。すごい刺激臭……百年放置した生ゴミを下水に混ぜてもこんなキツい臭いにならないわよ」
黒煙をかきわけて現れたのは、金色の法衣を羽織ったエリエスだった。
知的な輝きの宿った濃緑色の双眸に、輝く瑠璃色の髪をした少女。精霊信仰の地カナンにて、世界最後の古代詠唱士として崇められる聖女である。
「や、エリエス。礼拝は終わったんだ？」
「終わって休憩しようかと思ったところを部下に呼び止められたの。この煙、本霊宮の庭園からあふれて近所で異臭騒ぎになってるわよ。あまりの臭さに子供が泣きだしちゃってるんだから」
「……むぅ。やはりこの香りを理解しろというのは人間にはまだ難しいか」
はぁ、と大げさに溜息をつくエプロン姿のキリシェ。
「この苦みがいいのに……」

「その自信がどこから来るのかわからないけど、とにかくこの真っ黒いビスケットは袋の中に入れておくからな」

布袋を三重にして、煙が漏れないようにしっかりと口を閉じる。

「悪い、お騒がせして」

「煙の原因がわかったから問題ないわ。それに、ちょうどレンに渡すものがあったから」

一通の封筒を取りだすエリエス。黄金と黒の二色刷で装飾が印字され、軽々しく使うのを躊躇われるくらい高級感のあるデザインだ。

「あら、この封筒は……」

「フィア先輩知ってるの？」

「見覚えがありますわ。黄金と黒の装飾……レン、それ裏返してみてくださいな」

両隣のキリシェとエリエスにも見守られながら封筒を裏返して。

「聖フィオラ旅学園？」

印字されていたのは、自分がずっと通っていた旅団養成機関の名前だった。

「でもどうしてエリエスがこの封筒を？」

「ウチの旅団宛てに届いたのよ。覇都で私たちが一緒に行動していたことを情報紙で知ったんでしょうね。あの報せは世界中に広まってるはずだから」

腕組みしながら答えるエリエス。

「王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク・エイドス）が虚構精霊という危険な兵器を開発していた……というのを暴（あば）いたのは、世間的にはカナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）の功績（こうせき）になってるわ。でも、そこにあなたたちが関わっていたのも覇都中の人間が目撃してる。帰りの船の中で言ったでしょ？　いま、あなたたちがちょっとした義賊みたいな噂（うわさ）になってるって」

「この封筒がそれに何か関係あるのか……？」

封筒の端（はし）を指でちぎって、中の手紙を取りだした。

「……何だろ。一行だけ『奨学金・承認通知書』って書いてあるけど」

「レン、見せてもらっていいですか。ああ、これはこれは」

何かを察したように声を上げたのはフィアだった。

「特待生制度ですわ。成績優秀である生徒には、学園在籍中の授業料が免除される制度が用意されているんです。私も一年生の時に話がありましたので」

「あぁ。そういや俺、入学の時に無理を承知で申しこんで落ちた覚えが」

「再審査で承認されたのでしょうね」

「再審査って……？」

「エリエスが先に言ったとおりですよ。私たちの噂が広まって、とうとう海を越えた先の聖フィオラ旅学園にまで届いたと。つまり――」

くすっと声を弾ませて大天使は言葉を続けた。

「レンが学園を退学しないよう特待生という枠を用意した。口の悪い言い方をしてしまうとそういうことでしょうね。アシェンディアの時とは違って、今回は覇都で私たちの姿が目撃されてますから。旅団『再来の騎士』の活躍が大陸を越えて伝わって、そこにあなたの目撃談があったものだから学園側も驚いたのだと思います」

「俺のことを？」

「ええ。レンは休学届けしか出していないから、名義上は学園に在籍しているわけです。現役の生徒がこうして活躍しているとなれば学園にとっても大きな宣伝になりますから、レンを引き留めておきたいと。そんな意味をこめての奨学金というわけですわ」

三つ折りの手紙を丁寧に封筒へとしまうフィア。

「今までの授業料も返金されるかもしれませんね」

「それ凄いじゃん!?　だって二年分の授業料って安くないし、それが戻ってくるなら……あれ。でも手続きって、もしかして学園に戻ってこいってこと？」

「ええ。それが向こうの目的ですから。たぶん戻った時には面倒なことになりますよ。今までの旅の経緯なんかも根掘り葉掘り聞かれるでしょうし」

唇に指をあてて苦笑を浮かべるフィア。

「どうしますか」

「……いや。世界録を探す途中なのに、海の向こうに戻ってる余裕はさすがに無いよ。家

族に手続きしてもらえないか頼んでみる」
溜息を一つついて、レンは肩をすくめてみせた。
「ご両親ですか？」
「妹だよ。授業料は戻ってくるし面倒なことは聞かれないで済むし、それが一番だろ」
「妹……」
レンのその言葉に真っ先に反応したのはキリシェだ。
「つまりカルラみたいなものか？」
「どういう意味で言ってるのかわからないけど、俺の妹は何にも変身したりとかしないし、襲ってきたりしないごく普通の妹だって」
封筒を折りたたんでポケットにしまいこむ。
「俺と違って普通の学校に通ってるから、暇な時に申請もできるかなって」
「じゃあこの話は解決ね」
一部始終を眺めていたエリエスが、待ちくたびれた様子で手を打ち鳴らした。
「今からみんなで調理室の掃除よ。天井も窓もさっきの煙で煤だらけなんだから」
「……だってさキリシェ」
「……私たちも手伝いますが、あなたが一番頑張ってくださいね」
「むぅ？」

その場の全員から睨まれて、居心地悪そうな表情でキリシェが腕組み。
「人間の料理は難しい……」
「ほらキリシェ。俺は窓を雑巾がけするから、キリシェはモップで床磨きな」
「床磨き……竜の姫たるわたしが床磨きとは……」
モップを弱々しく握りしめ、竜の少女はがっくりと肩を落としたのだった。

夜の帳が降りた聖地。
茹だるほどの熱気に包まれた昼間から一転、誰もが静まりかえるこの時間、窓から吹きこむ風は肌が粟立つ冷気を帯びている。
アルカナ大陸の特徴でもある夜の寒風を首筋に感じながら――
「ええと『お久しぶりです』は家族向けには堅苦しいよな。じゃあ『久しぶり！』……っていうのも無理やり気分上げてる感じがして不自然だし、ええと」
「ねねレン？　こんな夜ふけに何やってるの？」
「手紙だよ。昼間に言っただろ。奨学金の手続きを妹に頼むから、その手紙を――」
「アタシ聞いてない。だって寝てたもん」
「……寝てた？」

夢中で進めていた手紙の下書きの手を止めて、レンはさっと後ろにふり向いた。
「や！」
「エリーゼ!?」
椅子に座る自分の後ろに、いつのまにか褐色の幼女が立っていた。
先代魔王エリーゼ。光の加減で黒にも茶にも映る長髪のツインテールに、好奇心にあふれた赤褐色の瞳。外見年齢は、ようやく十歳になったかどうかだろう。
三百年前の終焉戦争で重傷を負ったことで転生を余儀なくされたが、その正体はかつて冥界を支配していた魔王その人だ。
「もう起きて平気なんだ？」
「お待たせ！　いやはや、お恥ずかしいところみせちゃったねぇ」
ぺろっと舌を出してエリーゼが照れ笑い。
と思いきや、机の上にある万年筆と手元の紙をめざとく見つけて。
「なるほどね。それで手紙を書いてたわけだ？」
「うん。俺、通ってた学校も休学しちゃったしさ。心配ないっていう連絡も兼ねて、奨学金の申請も頼んじゃおうかなって……で、手紙になんて書こうか悩んでるところ」
聖フィオラ旅学園にいた時は休みのたびに実家に帰るようにしていた。だからこそ手紙というものが不慣れで妙に気恥ずかしい。

「レンは優しいね。アタシだったら、弟に伝えることがあれば『言いたいことがあるからお前が来い』って言っちゃうけど」
「それ厳しくないか……だってエリーゼの弟って」
「うん。冥界で魔王やってるよ」
机によりかかりながら楽しげに頷くエリーゼ。
広大な地下世界・冥界――その支配者についてはレンもエリーゼから聞いている。彼女の弟にあたる悪魔が魔王の座に就いているのだと。
「だってさ、アタシの弟にしては情けないくらい弱いんだもん。しかもバカで気が弱くて、あんなんだから炎の将魔が愛想をつかしちゃうんだよ」
「……今の魔王より五大災の方が強いんだっけ？」
「そそ。もともと弟が魔王になったのはアタシの代わりだもん。そりゃあ五大災も不満が溜まるでしょ。反旗を翻すところまでやったのはアシェンディアくらいだけど」
冥界の五大災は、天界における『七曜の天使』と対比される伝説級の悪魔たちだ。
五体いずれもがエリーゼと魔王の座を争った魔王候補たちだが、彼らが配下という立場に甘んじているのはエリーゼと戦ってその強さを認めたからであり、弟である現魔王にまで忠誠を誓ったわけではないらしい。
「でもレンが冥界に行ったら五大災も大騒ぎかもね。アシェンディアも魅亞も喜ぶんじゃ

ない？　再戦の機会ができたって」
「……嫌すぎるけど、嫌でも行かなくちゃいけないんだよな。最後の法印を持ってるのが今の魔王なんだろ？」
「そそ。悪魔法印ね。レンが女神法印を持っててキリシェが竜法印を持ってるから、あと一つ揃えれば終焉の島にも行けるはずなの」

〝剣帝が残した伝言に従い、妾は、竜帝、現魔王らと共に『終焉の島』を封印した〟

天界の女神レスフレーゼから教わった史実だ。
終焉戦争の戦場を封印してほしいと頼んだのが他ならぬ剣帝エルラインであったこと。
その島に張り巡らされた結界を突破するには、女神、竜帝、魔王の三者から結界突破のための法印を入手する以外にないらしい。
「世界録のありかで一番有力なのが終焉の島だから……世界録、見つかるといいな」
百年以上も続く英雄たちの競争。
世界録を見つけた者に、史上二人目となる『英勇』の称号を授与する――人類の至宝を求める理由は旅団によって様々だが、レンたち「再来の騎士」は、他の旅団とは違った動機がある。キリシェ、フィア、エリーゼにとっての世界録とは、三百年前に連れ添った仲間

が残した最後の遺品そのものなのだ。
世界録（アンコール）を探す理由は宝探しではなく、その遺品とともに彼を弔（とむら）うため。
だからこそ誰よりも先に見つけたい。
「あと俺も……」
「レンも？」
「ああ。エルラインってご先祖様だから、ご先祖様のおかげっていうのも今さら変な感覚なんだけど……お礼、したいんだ」
エルラインが三大姫（さんだいひ）を連れて旅団（パーティ）を結成していたからこそ、今の自分が、こうして彼女たちに誘われて世界を旅できている。
「最後の手記（しゅき）を見つけることが、俺からご先祖様（エルライン）への恩返しになるといいなって」
握っていたペンを机に置いて深呼吸。
「……よし、手紙はここまで！」
「書き終わったの？」
「続きは明日にするよ。全然いい文面が浮かばなくて。あー疲れた。こんなに長いこと机に向かっていたのも学園を飛びだして以来だよ」
椅子から立ち上がる。
「あと明日は出発の準備もしないとな。冥界（めいかい）に行く準備」

「そうだよー。アタシも道案内するのが楽しみ！　せっかくだからレンには冥界を思いきり満喫してもらわないとね！」

声を弾ませながらエリーゼが大きく跳びはねる。

「……言っておくけど怖いところは勘弁な」

「もちろん。冥界なんてただの広い庭みたいなもんだもん。そこら中に餓えた魔獣がいたり猛毒の沼地があったり広すぎて迷子になるけど、ただの広い庭だよ？」

「それはもう庭じゃないだろ!?」

強大な魔獣や好戦的な悪魔たちが待ち受ける危険極まりない地下世界。冥界は、いまだ人間がその全容を把握できていない秘境の一つだ。

「道案内、頼りにしてるんだから」

「そこは任せてよ。と言っても、まずは冥界に行くための審門まで行かないとダメなんだけどね。レン、ちょっと地図貸して」

荷物の中に入っている地図を取りだすエリーゼ。

それを机の上に広げて、傍にあった万年筆で線を引いていく。

「ここをね、こう通って行くの」

「聖地の北西に歩いていくわけだ。……ん、でもこの先って魔境の印があるけど」

バネッサ湿原と記された領域。地図で赤く警告印が押されているのは、過酷な自然環境

ゆえ旅団の探索さえ制限される『魔境』の入口だ。
そしてエリーゼの描いた徒歩ルートは、その魔境をまっすぐ突っ切っていた。
「聖地からだとここが一番近い審門の在処なの」
「冥界の前にも一波乱ある旅になりそうだな……」
エリーゼと一緒に地図と睨めっこしながら、レンはこくんと息を呑みこんだ。

2

「この暑さのなか申し訳ありません。ずっとエリエス様をお待ちいただいて」
本霊宮の入口で。
炎天下、濃紫色の法衣を羽織った女性が頭を垂れた。
療法士ネビリム。最高位の女性術士の集うカナン巡礼聖教船において、エリエスの側近を任された幹部だ。
「本当ならすぐにでも旅立たれるご予定なのでしょうが」
「い、いえっ……今日の正午に出発したいって言い出したのはコッチですから」
恭しく会釈する彼女に慌てて返事。
エリーゼの意識が戻ったのが一昨日の夜。エリーゼには昨日一日かけて体調回復に専念してもらい、レンは妹に向けた手紙を書き終えた。いよいよカナンを出発ということで、

別れの挨拶のためにエリエスを待っている。
「ただ、少し遅いですね……今日は夜明け前から礼拝堂に籠もられていたので、お祈りも昼までには終わるはずなのですが」
頭上の日射しを仰いで目を細めるネビリム。
「ここでお待ちを。様子を見て参ります」
「もう来るぞ。エリエスの匂いが近づいてくる」
「え？」
「彼女の気配がしますわ。足運びの癖で特定できます」
「法力の波動も感じるしね」
キリシェ、フィア、エリーゼが三者三様にそう言って、示し合わせたかのように建物の扉へと振り返る。
「ごめんなさい、だいぶ遅れてしまったわ」
息を乱したエリエスが扉を開けたのは、それから数十秒後のことだった。
「……さすが。どれだけ遠くからエリエスの匂いを感じとってたんだか」
「匂い？」
「ああいや、何でもないよ」
きょとんと聞き返してくる本人に苦笑で返事。

「それよりソッチは？　慌てて走ってくるってことは何か用事でもあったんだろ？」
「用事じゃないわ。礼拝も予定通りに終わったもの。ただ、礼拝から戻ってみたらシオンから連絡が入ってたの。念話がうちの術者あてに届いたみたいで、その報告を部下から聞いてたら時間を取られちゃって」
「シオンって……あの剣聖シオンか？」
忘れもしない、イスタルシル支城で出会った最高位剣士だ。
ゼルブライトの下へと急ぐ自分にかわって、立ちふさがる外法騎士カサディンの相手を名乗り出てくれた。
「シオン側の念話担当は結界士の夏蕾だったらしいけど、聖地だけじゃなくて、どうも世界中の都市宛てに一斉に念話を送ったみたい」
「剣聖様らしからぬ派手な行動ですね」
そう答えたのはエリエスの側近であるネビリムだ。
わずかに汗を吸って重くなった前髪をそっと手櫛で梳きながら。
「そういった人目につく行いを好まれる方ではないはず。となれば、その通知の内容もよほど重要なものでしょう。それも急を要するような」
「警戒発令よ」
聖女と謳われる少女は、押し殺した声でそう告げた。

「沈黙機関の存在を知ってるかしら」
「沈黙機関……？」
隣のフィアと顔を見合わせた。
「端的に申しあげるならば『世界中の秘境を破壊する怪異』でしょうか。一部の遺跡研究者や旅団の間で、古くからまことしやかに噂されていた存在です」
エリエスの言葉を継ぐ療法士。
「最初の報告は百年以上も前に遡ります。獰猛な徊獣たちの住処であった秘境を探索した旅団が、その奥深くで遺跡を発見。……しかし遺跡の内部に入ったところ、奥にあった壁画や石碑、そして何らかの失われた技術と思しき大聖塔が、既に跡形もなく崩壊していた。そんな報告に端を発します」
「最初は、自然な風化による崩壊だろうって言われていたわ。だけどその後も立て続けに、偶然じゃ説明できない崩壊が世界各地で発見されたの。発見者には私たちカナン巡礼聖教船の先輩にあたる人たちも含まれるわ。規模と継続性からして人間一人でできる仕業じゃない。だけど何らかの自然現象によるものとも思えない。偶然らしからぬ意図が感じられるの」
「意図って……？」
「破壊行為よ」

低く押し殺した声で、聖地を束ねる少女はそう答えた。
「わかっている限り、破壊対象は秘境の奥深くにある遺跡、壁画、石碑、財宝、失われた技術、そして天界と冥界それぞれに続く審門」
「審門を!? どうしてそんなことを?」
「それがわからないから怪異なのよ。沈黙機関っていうのも通り名。誰が命名したのかわからないけど、適切な呼称をつけるだけの情報が揃ってないから百年以上も通称で呼ばれてるってわけ」
眉をひそめるエリエス。
その仕草に、隣に立つネビリムが首肯で応じる。
「多くの遺跡を破壊していることから、世界連合協議で締結した環境維持法にも違反しています。そのため世界各地の都市が沈黙機関に対して莫大な懸賞金をかけて、その正体を確かめるべく多くの旅団に働きかけているわけです。ただ、レン様がご存じないように、旅団養成機関ではあまり説明されることがありません」
「……うん。俺も教官から聞いたことがなかったから驚いた」
教わらないのは、おそらく沈黙機関の実在が証明されていないからだろう。まだ推測でしかないものを旅団養成機関の講義で話しても仕方ない。
「それで、あのシオンから警戒の呼びかけがあったっていうのは?」

「沈黙機関によるものと思しき破壊痕を発見したんですって。被害を受けたのは……天界の審門。覇都エルメキア領に設置された審門が跡形もなく破壊されていたらしいわ」

「そんな!?」

真っ先に声を上げたのはフィアだった。

天界の大天使として聞き捨てならなかったのか、珍しくもその声には強い不安の念がこめられていた。

「それは……容易には信じがたいことですわ。天界の審門は、天界と地上とを繋ぐ重要な扉です。天使の隠蔽法術で隠されているうえに愛天使たちの監視もある。何より七曜の天使による加護が審門を覆っているというのに……」

「シオンがわざわざ世界中に警戒を要請するほどだもの」

控えめな声量で続けるエリエス。

「今まで秘境に限定されていた破壊活動が、よりによって覇都という大都市の間際で行われた。つまり沈黙機関の動きが活発になってきている可能性があるの。聖地もそうだけど、昔の遺跡が保存されている都市が世界中にはいくつもあるわ。沈黙機関の暴挙が都市にまで及ぶかもしれない。それがシオンの警告よ。でもそれは逆に――」

「沈黙機関を捕らえる好機？」

「そう考える都市は少なくないでしょうね。用心深い都市はとっくに一流の旅団に警備依

頼を出しているはず。ウチの旅団も、しばらくは聖地周辺の遺跡警備に人員を割くことになるかもしれない……というわけよ」

口早に続けてきた聖女が、かぶっていたフードを外して天を仰いだ。

「沈黙機関が審門を破壊した場所はエルメキア。しかも私たちが王立七十二階位特務騎士団と交戦してた時のことよ。タイミングが噛みあいすぎてると思わない？」

「確かに不気味だな……」

世界中の遺跡を破壊する謎の怪異。それが実は恐ろしいほど近くに迫っていたのかもしれない。

「このまま旅を続けてたら出遭うかもしれないわけか……」

「はい。なにしろ審門や遺跡を無差別に破壊して回る相手ですから、出会した時に何が起きるかわかりません。道中お気をつけください」

「あなたたちのことだから心配はしてないけど、レンも、精霊の怯えの件で何か新しいことがわかったら教えて。すぐ駆けつけるから」

ネビリム、そして聖エリエス。

カナン巡礼聖教船を代表する療法士と古代詠唱士に見守られながら。

「ああ、ありがとう二人とも。沈黙機関っていう怪しい奴らがいて、そいつらとどこかで会うかもしれないっていうことは頭に入れておくから」

レンは深々と頭を下げた。
「本当に世話になったよ。俺だけじゃなく、キリシェもフィアもエリーゼもさ」
「うむ。世話になった。主にエリーゼが」
「エリーゼが寝てる間もずっとお部屋を使わせてもらいましたからね。人間のベッドであんなに心地よさそうに眠る悪魔は初めて見ましたわ」
「……べ、別にいいじゃん！　疲れてたんだし！」
にやにや笑いを浮かべるキリシェとフィア。その二人に挟まれて、恥ずかしそうに顔を背けるエリーゼの姿。
「それじゃあ、また」
「ええ。またどこかで会うこともあるでしょう。……世界は広大で、運命も決して優しくないけれど、人の繋がりは時にそれをも越えるものだから」
ふっと可笑しげに表情を和らげる古代詠唱士の少女。いつしかその傍らには、彼女に付き慕う二体の精霊の姿があった。
『シルフ、レンの名前、覚えた！』
『いずれまた何処かで』
楽しげにエリエスの上空を飛びまわる風の始原精霊と、エリエスに寄りそってしっとりと微笑む水の始原精霊。

「あなたたちの旅路に、精霊の加護がありますように」
手を合わせて微笑む聖女。
その祈りに背中を押され、レンは聖地カナンを後にした。

聖地カナン・北西――
市壁をこえてすぐ、眼前に広がるのは黄土色の砂が舞い上がる街道だった。
「……うわ。これを歩いていくのか」
「しばしの辛抱ですわ。アルカナ大陸は地域ごとの温度差が激しいことで有名ですから」
涼しげな顔でそう告げるのはフィア。
陽炎が立つほど猛烈な日射しの中でも汗一つかいていないのは、やはり人間と天使とで肉体構造が違うからなのだろう。
「ところでレン、今のうちに話しておきたいことがある」
ふと、隣を歩くキリシェが肘をつんつんと引っ張ってきた。
「話って？」
「さっきエリエスが言っていた話だ。沈黙機関と人間が呼んでいるもの。人間のつけた呼び名だったから判断に時間がかかったが……」

ゆったりとした歩調で歩き続けるキリシェ。
まっすぐ正面を向きながら、竜の姫である少女が毅然とした口調で言葉を続ける。
「実在するとしたらという前提で、その沈黙機関の正体に思いあたる相手が一つだけある」
「……正体、さっきの話でわかったのか!?」
沈黙機関の仕業とされる怪奇現象。
何らかの自然現象か、徊獣によるものか、それとも何らかの組織が関与しているのか。
エリエスの説明を聞いただけでは雲を掴むような話だったはずだ。
「まー、正直アタシらも途中まで半信半疑で聞いてたんだよね。人間の遺跡が壊れるなんていくらでも原因は考えられるもん」
両手を頭の後ろに組みながら、エリーゼ。
「遺跡なんて地殻変動が起きたら一発で崩れるでしょ？　何もなくたって二百年も経てば石材が風化していく。たまたま通りがかった徊獣や悪魔がただのイタズラで壊していく時だってあるからね」
「……っていうことは、それと違うってことだよな」
「レンも鋭くなったじゃない。そう、今アタシが挙げたどれでも無いの」
エリーゼが振り返る先。
四人の最後尾を歩く天使の少女が、いつになく表情に陰を落としていた。

「ね、フィア？」
「ええ。遺跡の損傷ならばともかく審門破壊だけは、たとえば通りすがりの徊獣が気まぐれになせる業ではありません」
　天界の審門が破壊されたと聞いて驚いていたフィア。彼女が何かに驚く姿など、レンの覚えているかぎり自分が精霊を呼びだした時くらいのはず。
　つまり今回の件は、それに匹敵する驚愕だったということだろうか。
「レンにも心当たりがあるはずの相手だよ」
「俺が知ってる相手？」
「そそ。いるじゃない。天界と冥界の審門を破壊してまわる。要するに天使と悪魔に平気でケンカを売ってるってわけ。そんな度胸のある奴って限られてるもん」
　一呼吸分の間をおいて。
「多分そいつらも世界録を探してる。そのために世界中を徘徊して、そのついでに遺跡を破壊してる……って言えばわかる？」
　わずかな緊張を孕んだ声音。
　気づいた時には、エリーゼが大粒の瞳でじっと自分のことを見上げていた。
「三百年前の終焉戦争の相手。アタシらが戦った相手だよ」
「……っ、そういうことか」

過去と現在が繋がった。
碑文の三賢者が追い続けてきた古の大敵が、とうとう世界に姿を見せたのだ。
〝襲撃されたのじゃよ。世界の終焉より現れし「光り輝く者たち」によって、な〟
〝我々の知るかぎり、奴らが世界に顕現した時代が二回ある。一度目がいま伝えたように神性都市の襲撃。そして二度目が――終焉戦争〟
神性都市シィエラミリスの衰退と、古代召喚術が世界から失われた原因。
そして終焉戦争を引き起こした災厄そのもの。
「でも確かに……ソイツらが沈黙機関の正体なら、大昔から世界中を徘徊してるのも納得できるし、世界録を狙っているって推測も当たってると思う」
エルラインが戦った災厄。沈黙機関と呼ばれているものの正体がその残党だとすれば、宿敵が残した手記の存在を警戒するのも当然だろう。
……ソイツらだって気になるはずだ。
……何が書かれてるかもわからない世界録を見過ごせるはずがない。
ゆえに世界中の秘境を巡って世界録を探し、その過程で世界中の審門を破壊している。
そう考えることで遺跡破壊の理由も説明がつく。

「まだ確証のない話です。今は頭の隅にだけ入れておいてくれればいいですよ」
「……わかったよ」
心中を見透かすようなフィアの言葉に、レンはふっと肺の中の空気を吐きだした。
灼熱の陽に晒されていたはずなのに。
頬を伝っていく汗がぞっとするほどの冷気を帯びている。
「正直、私たちも沈黙機関とやらの正体を教えてほしいくらいです。なぜならあの者たちは終焉戦争でことごとく世界から消え去ったはず。ねえキリシェ？」
「そのはずだ」
無言でじっと歩き続けていたキリシェが、わずかに首を傾けた。
「奴らは放逐した。いなくなったはずだ。だが……」
「もしも残党が隠れ潜んでいて沈黙機関として暗躍しているのであれば、世界録を狙っているのは旅団だけとは限らないと。そういうことになりますわ」
「ただし、その目的は世界録の発見じゃなくて消滅だろうけどね」
竜姫、大天使、先代魔王。かつて終焉戦争を戦いぬいた少女たちが紡ぎだす言葉の真意を噛みしめて、レンは自分の拳を握りしめた。
……エルラインの遺した世界録を沈黙機関には渡せない。
……そういうことなんだよな。

「世界録（アンコール）を探す理由が一つ増えたわけだ」
「そうだねえ。けど、まだそうと決まったわけじゃないしね。冥界探検（めいかい）の計画が変更になるわけでもないもん。まずはウチの弟から法印（ほういん）をもらわなきゃ。アタシも久しぶりの帰郷だし、みんな元気にしてるかな」
スキップ調で街道を進んでいくエリーゼ。
「……まあ、弟（アイツ）には容赦（ようしゃ）しないけどね。現魔王だからって調子乗ってたら地下の拷問室で死ぬほど泣かしてやるんだから」
「怖っ!?　もしかして姉弟の仲悪いのかよ？」
「ううんとっても仲良しだよ。仲が良いほど虐（いじ）めたくなるって言うでしょ」
「言わないから！」
「えへへ、楽しみだなぁ」
スキップで進んでいく悪魔の幼女。
あっという間に小さくなってしまう背中をぼんやり見つめて。
「光り輝く者、か……」
自分に言い聞かせるつもりでレンはそう口にした。
沈黙機関の正体が終焉戦争の災厄であるという可能性は理解できた。だが問題は、その災厄とやらの正体が何なのかということだ。終焉戦争から三百年も経（た）っているのだから人

間ではないだろう。そして竜、天使、悪魔のいずれかであるとも考えにくい。

……いったい何だっていうんだ。

……英勇エルラインが戦った相手の正体は。

〝お前の足でたどりつき、お前の目で確かめてみろ。そこでお前が感じたものが、そのまま三百年前の真実だ〟

キリシェからはそう教わった。

終焉戦争の真実は、自分自身で確かめるべきだと。

「それはいつになるのかな……」

「何がだ？」

「ううん、独り言」

緑玉色の双眸で見つめてくるキリシェに軽い口調で返事して、レンは灼熱の荒野を歩き続けた。

Record.2

魔境・バネッサ湿原

1

『世界を旅する上で、冒険者が挑まねばならない最も危険な相手は何か？』

聖フィオラ旅学園に入って間もないうちに指導教官から問いかけられた言葉を、レンは今でも覚えている。

「一、巨大な徊獣（かいじゅう）」

「二、残忍で好戦的な悪魔」

「三、人間を劣等種と見下す狡猾（こうかつ）な天使」

「四、地上の王である獰猛（どうもう）な竜種」

黒板に書かれた四通りの選択肢のうち、レンが選んだのは一番の徊獣だった。

クラスの回答もやはり徊獣を挙げる生徒が多く、次に四番の竜、その次に二番の悪魔、最下位が天使という順だ。

だが指導教官はこう言った。

正解はどれでもない。答えは世界の『過酷な自然環境』そのものだ……と。

――どんな大型船をも呑みこむ死海の大渦。

――狂った磁気嵐により、迷えば二度と出られない黄泉の死樹林。

――一時間と経たずに人体の水分を根こそぎ蒸発させる熱砂漠。

世界には、人間がどんな知識と技術と強さを得たとしてもその地の調査が困難を極める辺境が存在する。

凶悪な徊獣がいなくても、秘境のように謎に包まれた未知の領域がなかったとしても、ただただ単純に『人間には過酷すぎる』と認定された自然の危険地帯。

「それが魔境……なんだよな」

「どうしたレン？」

「聞きしにまさる場所だと思ってさ」

ぬかるんだ大地。

二日前……聖地カナンを発った時には茹だるほどの猛烈な熱風に晒されていたはずが、いま吹いている風は生温く、湿っていて、そして異様な腐臭を帯びていた。

「もうすぐバネッサ湿原の入口だろ？　地図にも載ってる歴とした魔境だし、俺も学園で名前だけは聞いたことあったんだ」

黄土色の荒野から、どす黒い湿原へ。

自分たちの歩いている場所はまだ石畳の街道が整備されているが、道の両脇はヘドロ状の泥沼だ。

「だけど失敗したよ……毒ガスと毒水の噴出地域だっていうなら対策を用意すればよかった。カナンの市場なら解毒用の薬草だって売ってたかも。毒ガスの噴出地帯は生の薬草を噛みながら進めって教官にも言われたのに」

「薬草はないが薬草キャンディーならある」

もったいぶった様子で小さなアメ玉を差しだしてきたのはキリシェだ。

「しょうがないな、特別だぞ？」

「……ありがと。でもこれ、本当に解毒に効き目あるの？」

「包装紙にはのど飴と書いてある」

「ぜんぜん意味ないじゃん!?」

「こういうのは気持ちが大事だ。ところでレン、あんなところに街がある」

キリシェが指さすのは、進行方向の先にある煉瓦造りの建物群だった。

街道の終わりがちょうど楼閣の入口に連結していて、そこを中心に鉄条網でできた壁が左右に広がっている。

「えっとあれは……」

「関所ですわ。魔境と認定された地帯に入るのは危険を伴うので、旅団ごとに申請をする

必要があると聞いています」

すらすらと回答してくれたのはフィアだった。

「あの高い楼閣が物見櫓で、バネッサ湿原の様子を観察するためのものでしょうね。そして鉄条網で区切られた境。あの先からが魔境に認定された領域なのだと思います」

「だから関所が用意されてるのか……」

自分たちの前を歩いている旅団も関所へと入っていく。あの内部で通行許可を求め、認められないと通してもらえないのだろう。

「エリーゼ、よりによって魔境のど真ん中に冥界の審門があるんだ？」

「そそ。一部の旅団には有名みたいだよ」

飄々とした様子で先を進んでいくエリーゼ。

「天使は天界の審門を隠蔽法術で隠すけど、悪魔は冥界の審門を隠したりしないからね。この場所を探索したことのある旅団なら審門の場所も知ってるだろうし」

「まあ……そうでもなきゃ中々こんな魔境に入ろうとはしないもんな」

審門のありかは高値で取引される。その情報を買った旅団が、冥界踏破の目標を掲げてバネッサ湿原にやってきたのだろう。

「レン、念のため、関所では審門のことは素知らぬ様子でお願いしますね」

「わかった。魔境探索が目的ってことにするよ」

関所の入口へ。
薄暗かった外とは一転してまぶしいほどの照明に照らされたフロアで、レンの目に焼きついたのは鎖を掲げた関所の番人たち。
そして、部屋の隅の長椅子に座って泣きじゃくる妖精の姿だった。
「ひゃぁぁぁぁぁぁぁっつリンちゃんリンちゃん大変だよぉぉぉぉっぉぉっっ！」
「あぁもう泣くな、泣くなってば！」
「団長とミスティちゃんが死んじゃうよぉ……」
「死なねぇってば！　あぁもう、泣いてないで落ちつけっての！　泣きすぎて顔真っ赤に腫れてるじゃねえか！」
「だってだってぇぇ……」
ぐすん、と声をうわずらせる妖精の少女。
大きな赤い瞳に、蛍光色の緑から赤へと移ろっていくグラデーションの髪。
お伽話に出てくる魔法使いさながらの大きな帽子と裾の長いローブ。身長は自分のちょうど腰にあたるくらいだろう。人間からすれば小柄だが、妖精種ではかなり大きな部類だ。
「大妖精か、珍しいな」
「ねー。人間嫌いのはずの妖精が、まさか人間の作った建物の中にいるなんて」
キリシェ、エリーゼが揃って顔を見合わせる。

大妖精――人里離れた森の奥深くで樹上に暮らす妖精として知られている。森の外に現れることが滅多になく、レンも本物を見たのは初めてだ。

「頭のいい妖精なんだっけ。果物を持っていった旅団に、お礼に財宝の隠し場所を教えてくれたり。森の抜け道を案内してくれたりって逸話があるのは知ってるけど……」

「ええ、ですがとても恐がりで臆病なはずです。妖精全般の特徴ですわね」

頷きながらも、やはり不思議そうに大妖精を見つめるフィア。

「人間に懐くということだけでも珍しいのに。エリーゼのいうとおり、こんな人間の建物に現れたのは私も初めて見ます」

「なあフィア先輩、その隣に座ってる女の子ももしかして？」

「ええ、獣人でしょうね。これも珍しいです」

泣きじゃくる大妖精の隣に座って宥めている少女。彼女もまた人間でないことはレンの目にも明らかだった。

爛々と輝く黄金の瞳と、猫のように細くすぼまった瞳孔。

大きな三角形の耳がショートの赤髪からツンと飛びだしていて、背中の尾てい骨からも虎のような黄色と黒の尾が伸びている。肩からむき出しの肌からも、全身がネコのようなツヤのある毛並みに覆われているのが見てとれた。

「リンちゃ――――ん！」

「だぁっ、もう静かにしろってシルク！　団長が死ぬわけねぇだろ。ミスティも一緒だし。ていうか目立つから泣きやめっての！」
「むぐぅっ!?」
小柄な妖精を羽交い締めにする獣人という、世にも珍しい光景。
どちらも人間との関わり合いを嫌って森の奥深くで暮らしている種であり、さらに言えば妖精と獣人も決して仲が良いわけがない。
「見るかぎり何か困っているようですが。レン、心当たりあります？」
「俺に聞かれても……」
弱った苦笑のフィアに、こちらも首をふって返事。
と。
「お前たち受付は済ませたか？　魔境の探索か、それとも旅団救援の特務か？」
監視官――関所の通行を審査する老人二人が、息を切らせて魔境側の入口から姿をみせたのはその時だった。
「ここは大陸の都市連合で魔境と認定された危険区域だ。一般人の通行を禁ずる。旅団であっても過去に一定の特務を成功させてなければ……」
「いや待て。お前たちは!?」
目をみひらいた監視官が、もう一人の監視官を手で制した。

キリシェ、フィア、エリーゼを観察するように睨みつけ、最後に、監視官二人の視線が自分の前で停止する。

「……お前たち、あの『再来の騎士』か？」

「エルラインそっくりの剣士と三人の少女たち。まさしくエルライン剣帝旅団と同じ構成ではないか」

監視官が口にした旅団名は、いわゆる通称だ。

炎の将魔アシェンディアの撃退を機に炎崖都市ジオから噂として広がったのが始まり。さらには覇都で王立七十二階位特務騎士団とも剣を交えた話は世界中を驚愕させたことから、その通称がほとんど事実上の正式名称になってしまった。

「レン、素直に答えちゃってください。魔境の通行許可をもらうのですから、実績のある旅団であると主張した方が印象もいいはずです」

後ろからフィアがこっそり耳打ち。

「……ええ。一応、俺らがそう呼ばれてるみたいですけど」

「やはりか！」

興奮の面持ちで監視官二人が手を打った。

「話は聞いている。街を襲った疾竜を一睨みで気絶させ、大炎山に巣くっていたアシェンディアと、その配下である悪魔たちを一夜で壊滅させたと」

「……え？」
「冥界の大悪魔アシェンディアを真っ二つに切り裂いて成敗し、さらには覇都エルメキアの騎士王ゼルブライトさえ一撃で叩きのめしたそうではないか！」
「えぇっ!?　それどんな噂!?」
「はっはっは、そんな謙遜せずともかまわん」
「謙遜じゃないですってば！」
噂が噂を呼んで膨れあがるにも程がある。
まず、学生街で疾竜を気絶させたのはキリシェだ。
ガリア大炎山で悪魔を追い払ったのもキリシェとフィアとエリーゼ。さらに言えば炎の将魔アシェンディアは冥界に追い返しただけ。
極めつきは騎士王で、あの戦いはレンからすれば惨敗も惨敗という結果だった。
「うむ。まさに噂の通りだ。全部このレンがやった。悪魔どもを片っ端から成敗したぞ」
「私たちの自慢の騎士ですわ。騎士王も一撃ですの」
「見せてあげたかったなー。アシェンディアを真っ二つにしたところ」
「って三人ともなに言ってるんだよ!?」
胸を張ってうなずく三人の少女たち。
「おおっ、やはり噂どおりの！」

「通行を許可しよう。お前たちならばこの先の魔境とて恐れるに足るまい」
「ど、どうも」
……後で覚えてろよ？
そんな意思をこめて後ろに振り返ってみるが、案の定キリシェもフィアもエリーゼも、素知らぬ顔だ。
「あの……ところで一つ聞いても？　あそこにいる妖精と獣人って？」
「あやつらか」
いまだに泣きじゃくっている大妖精と、それをなだめようと必死の獣人。
「あれも旅団の一員だ」
「旅団!?」
反射的にふり返る。
まさかとは思いながら、薄々その予感はしていたのだ。
人間の旅団に妖精や獣人が加入する事例は、珍しいがゼロというわけではない。妖精は好奇心旺盛な種族で、獣人は一度受けた恩を忘れないという気質をもつ。人間への警戒心さえやわらげば仲間にすることも不可能ではないからだ。
……妖精は、妖精だけの特殊な法術で狩人と探索士に適性があるし。
……獣人も、運動能力に恵まれてるから武闘士向きって言われてるんだよな。

けれど現実に旅団に加わっている姿を目にしたのは初めてだ。
「でもなんでその二体が？」
「メンバーが湿原で遭難したらしい」
苦渋の表情を浮かべる監視官二人。
「あやつらは救援を求めて関所まで戻ってきたわけだが、だいぶ混乱しているようでな。仲間が遭難したという以外の要点がつかめん」
「今は有志を募っておった。魔境で遭難した旅団を救出するための指示も、我々の職務の一つであるからな」
だから、最初はあんなに息を切らせていたということなのだろう。
「ところでレン」
「ん？」
「その妖精と獣人が、わたしたちの話を聞いてコッチを見ているぞ」
腕組みするキリシェの視線を追いかけて。
自分の視線と、こちらをじっと見つめてきている二体の視線とが重なった。
「……再来の騎士？　リンちゃんリンちゃん、シルク聞いたことあるよ」
「おう。団長がすげぇって驚いてた旅団じゃねえのか？　だ、だけどよ……あいつら変な臭いがする。あの三人の女。特に銀髪の……あの臭いもしかして……」

「う、うん……シルクもそう思う。この臭い間違いないよ」
こそこそと耳打ちしあう妖精と獣人。
そこに堂々と近づいていくのはキリシェだった。
「お前たち、そんなこそこそ喋らずとも――」
『竜だっ!?』
がたんと音を響かせて長椅子がひっくり返る。
「リンちゃんリンちゃん、シルクたちもうおしまいだよ！」
「お、おおお落ちつけってシルク。りゅ、りゅ竜なんて……ちっとも怖くねぇよ！　あんなのオレのパンチで一撃だっての！」
「ならどうしてシルクの後ろに隠れてるのっ!?」
座っていた妖精と獣人が顔を真っ青にしてフロアの隅に逃げていき、そこで震えながら互いを抱きしめあう。
そんな二体に対し、キリシェもまた穏やかな表情を作ってみせて。
「落ちつけお前たち。怯えるな。わたしたちに敵意はないぞ」
『食べられるっ!?』
「食べるか！」
健闘も空しく引き下がるキリシェ。

珍しくも、今の一言で少なからず傷ついたらしい。
「……こほん。レン、交代だ」
「大丈夫だって。俺たち何も悪いことしないから」
悲しげに後退するキリシェと入れ替わりに、レンは二体の前に歩いていった。
「仲間とはぐれたっていうのは本当なのか？」
「……うん」
涙を溜めながらうなずく大妖精。
「シルクたち四人で来たの。でも団長とミスティちゃんが……」
「仙人草って草がこの湿原に生えてるって聞いたんだよ。どんな猛毒も解毒できて、栄養もあるから病人にとっても最高の生薬になるって……」
大妖精を抱きしめながら言葉を続けるのは獣人の少女。
仙人草――万能薬として名高い稀少な草だ。猛毒の沼地にのみ生息し、その葉も茎も雪のように白く透きとおっているという。
「それを探しに来た途中で仲間とはぐれたのか？」
「おう。湿原の奥で塔みたいなものを見つけたんだ。黒い石で出来た彫刻みたいなやつ。それに近づいた団長とミスティがすげぇ霧に包まれて……いなくなってた……オレの嗅覚でもわからなくて」

「黒い塔？　それってもしや」
獣人の言葉に、ある光景が脳裏を過ぎった。
聖地カナンでの死闘――
波の将魔・魅亞の襲撃を、エリエスと共に追い払った時のこと。

〝冥界の審門だと!?　まさか、この場に転移させたというのか！〟
〝巨大な獣の爪を想起させる三角錐状の大聖塔。四本からなる大聖塔の中央に、先の見えない漆黒の霧が厳かなる扉となって顕現していた〟

冥界の審門。
その存在を知らない旅団が、偶然に審門から冥界へと転送されることは考えられる。
「エリーゼ？」
「んー。たぶんレンの考えてる通りだろうね」
後ろ頭を掻きながら苦笑するエリーゼ。
「同じ審門からでも地上には戻れるんだけど、あまりのことに混乱しちゃう人間もいるだろうし。見つけにいってあげた方が確実だろうね」
「……審門って何のことだ？」

「気にしない気にしない。アタシらが探しに行ってあげるってこと。特別サービスだよ？」
ぽかんと口を半開きにする獣人リンに、余裕の笑みでウィンクする先代魔王。
「任せときなさいって。心当たりあるから」
「ほ、本当か⁉」
「団長とミスティちゃんのこと助けてくれるの？」
「急ぐ必要はあるけどね。何もわからないまま冥界に迷いこんだ人間が、そうそう上手く生き延びられるわけないし」
すたすたと関所の出口へと歩いていくエリーゼ。
その様子に、一部始終を眺めていた監視官二人が慌てて走り寄ってきて。
「む。待て待て！　いま他の旅団にも救援を要請しておる。先に派遣した第一陣からの連絡を待ってから――」
「あいにくと、そんな余裕はありませんわ」
ふわりとひるがえるスカート。
穏やかな微笑と妖艶な脚線美とを晒し、真っ先に駆けだしたのはフィアだった。
「エリーゼ、道案内は任せますよ」
「まっかせなさい！」
続くエリーゼとキリシェ。

関所に立つ兵士が止める間もなく出口をさっと飛びだして、魔境・バネッサ湿原をまっすぐ北へと走りだす。

「そういうわけで審門まで最短ルートで出発！　途中で底なし沼とか毒ガスの噴出地帯とか突っ切るけど、レンも頑張ってついてきてね？」

「男の子だから平気ですわ」

「底なし沼に男の子は関係ないだろ!?」

先を行く三人の背中を追って、レンも魔境へと第一歩を踏みだした。

――ぬかるむ大地。

一歩踏みだすたびに靴先が泥の中に沈みこむ。足を引き上げようとすれば、今度はヘドロ化した土が糸を引いて靴裏にこびりつく。

「うわ、気持ち悪っ！　まるで生き物みたいに泥が靴にくっついてくる!?」

「取り乱すな。泥を嫌って歩調を乱せば、ますます身体が沼に沈みこむ。いつもの通り走ればいい」

目の前を走るキリシェがちらりと目配せ。

その言葉のとおり、これだけ薄気味悪い泥沼のなかを走りながらも、キリシェの靴先にはわずか一欠片の汚れさえ付着していない。

フィアも、そしてエリーゼもだ。

水の上を走っても一滴の飛沫さえ生まないだろう。そう思わせるほど静かな歩法。
「……やっぱ凄いな」
「本当は飛んでいければいいんですけどね」
軽やかに沼地を駆けるフィア。
「早いし泥もつかないし、毒ガスの溜まった地帯も避けられます。良いことずくめですわ」
「ダメなの？」
「後ろ、ご覧なさい。大きく振り返らないようにね」
背後から迫ってくる足音。
鎧の金属が擦れる音と、鞘に収まった大剣が震動で揺れる音――フィアの言葉の意味を察して、レンは走りながら背後を見やった。
「他の旅団が!?」
自分たちが走るルートを堂々と追って来ている。その数ざっと十数人。一つや二つの旅団ではないだろう。
「先の関所で私たちを見ていた旅団ですわ。監視官との話を立ち聞きしていたのかしら。私たちも有名になったものですね」
「……俺たちが注目されてるのか」
ガリア大炎山での王立七十二階位特務騎士団と似た現象だ。

炎の将魔アシェンディア討伐のために何十という旅団が集まっていたが、そこに王立七十二階位特務騎士団が参加しているとわかった途端、周りの旅団の顔色が変わったのを覚えている。

「アシェンディア討伐の時にも、王立七十二階位特務騎士団に手柄を奪われることを恐れた者たちがいたでしょう？　旅団の救援も立派な職務ですからね。成功すれば手柄になり報酬が発生します。そこに私たちが参加したことで慌てて追って来たんだと思いますよ」

「でも、どうしよう」

「好きにさせておきましょう。それにレンも前を向いてないと危ないですよ。目の前に底なし沼だから」

「うわっ!?」

褐色に染まっていた泥の地面から一転、どす黒い漆黒の沼地が現れた。

草木一本生えていない死の沼。毒水の飛沫が一滴でも口に入れば全身が痺れて動けなくなり、そのまま底なし沼の中へと沈んでいくだろう。

まさに魔境と呼ぶにふさわしい光景だ。

「エリーゼ」

「あいよキリシェ。レン、こっちだよ。アタシが飛ぶところちゃんと覚えてね」

エリーゼが躊躇無く底なし沼へと着地。

——沈む。

そう思いきや、エリーゼの爪先が泥沼の水面を綺麗に蹴った。

スキップするように跳びはねたエリーゼの身体が宙をわたって数メートル先の水面に着地して、さらに前へ前へと跳びながら進んでいく。

「泥沼は、水の中にたくさんの土や砂の粒子が混じっています。あとは水の流れと淀みを観察して水面の硬い部分を見極めればいい。足を着けるのに適した場所を見つけて、正確に跳躍してるんです」

ついてきてくださいね——微笑と共にフィアが地を蹴る。

エリーゼが着地した弾みに生まれる小さな波紋。その波紋が消える前にキリシェが着地し、さらにその波紋が消える前にフィアが飛びうつる。

「レン」

「わ、わかってるよ！……ああもうっ！」

息を止めて心を決し、レンもまた漆黒の毒沼へと飛びこんだ。

フィアが残してくれた波紋を着地の目印として、そこに爪先だけで着地。足が沈む前にさらに一つ先の波紋目がけて飛びうつる。

「怖っ！　これ一歩でも間違えたら底なし沼に呑まれるんだろ!?」

気が遠くなりそうな恐怖に必死で抗いながら、フィアの着地場所だけを凝視。

二回、三回と跳躍に成功して――

『ワァ、スゴイスゴイ！』

気づけば。

フード姿の小人が、自分を見上げながらすぐ足下に並んで一緒に走っていた。

「土の始原精霊？」

『怖クナイヨ。土ガ、支エテクレル』

弾む足取りで走っていく精霊。霊的存在ゆえに波紋も足跡も水面に残らないが、それでもその足取りは力強く自信に溢れたものだった。

『頑張ッテ！』

「……ああ」

自分の不安を感じとって現れた精霊に答えて、水面を蹴る。

エリーゼ、キリシェ、フィア、そして土の始原精霊に見守られるなかレンが死の毒沼を踏破したのは、それから間もなくのことだった。

「……はぁっ……あっ……や、やった！」

「あ。レンってば息しちゃダメ。ここ毒ガスの噴出地帯だから。息止めないと死ぬよ？」

「だ、か、ら、どうなってんだよこの魔境!?」

2

胴体の太さは人間の指ほどしかないのに手足が異常に細くて長い虫。
ソレを狙うのは沼の水面から顔を出した毒蛇で、その毒蛇もまた真っ赤な色をした怪鳥に啄まれていく。
毒を持つ生物さえも、さらに強力な毒を持つ生物に狙われる凶暴な生態系。
それが、バネッサ湿原でレンが目にした光景だ。
「……ちょ、ちょっと……休憩……」
身体をくの字に曲げて深呼吸。
蒼く輝く剣を沼地に突き刺した姿勢で、レンは懸命に声を振りしぼった。
「さ、さすがに……猛毒のガスが噴きだす地帯で息を止めながら体長十メートルの大ムカデと戦うのは命の危機だった……呼吸的な意味で……」
「レンの顔がみるみる真っ青になっていましたからね。いつ酸欠で倒れるかと見てる私たちもハラハラでしたわ」
くすっと口元に手を当てて微笑むフィア。
ちなみにキリシェは「おやつの時間だ」と言ってお菓子の箱を取りだして、エリーゼは珍しい羽虫を捕まえようと追いかけ回している最中だ。

「ところで気になっていましたが、その霊剣、凱旋都市に還っていかないのですね」
「ああ、そうなんだよ。覇都で召喚してからずっと消えなくてさ」
霊剣ヴィエルジュ――剣の柄はすっかり錆びて色が落ちているにもかかわらず、その刀身だけは、今も澄みきった海面さながらの美しい蒼を宿している。
〝あの剣そのものが強い精霊の力を宿した精霊具だ。天界で粋がっていた大天使と、冥界で我が物顔をしていた魔王を問答無用ではり倒したのもあの剣だったからな〟
英勇エルラインの伝説の、その礎となった剣。
もともと凱旋都市では鞘がない状態で飾られていたため、手元に召喚した時も鞘がない状態だった。そのため今は包帯で刀身を巻き、それを背に担いでいる。
さらに驚くほど軽い。
まるで羽毛で出来た剣。背負っていることさえ忘れてしまいそうになる程だ。
……覇都でゼルブライトと戦った時に召喚して。
……俺が意識を失ってからもずっと手元に残ったまま。
古代召喚術とて万能ではない。どんなに有能な術士であろうと、召喚した物体は時間の経過によって本来の場所へと還っていく。

にもかかわらず霊剣ヴィエルジュは一週間が経っても消滅していないのだ。
「俺も不思議でさ。何でだろ？」
「剣が消えていない理由か？……幾つか考えられるが気にしなくていい。なにせ、それは霊剣自身が決めることだろうからな」
「っていうと？」
「秘密だ」
意地悪っぽく、けれど妙に楽しそうに答えるキリシェ。
手元のお菓子箱から包みを取りだして。
「とにかく霊剣をきちんと召喚できるようになったことは褒められる。特別に、わたしのおやつであるブランデー入り高級生チョコを一つやろう」
「……うーん」
「なに、一つでは足りない!?　くっ、意外な強気に出たな。な、ならば大奮発で二個！これでどうだ!?」
「いやいや。単に、こんな怖い場所でお菓子を食べる気になれないだけだよ」
霊剣を地面から引き抜いて、あらためて辺りを見わたす。
「レン、休憩おしまい？」
捕まえていた虫を放してやるエリーゼ。

「もう大丈夫。遭難してる旅団がいるんだし頑張って急がないと……だけど、さすが魔境って言われるだけのことはあるよ。後ろ、誰もついてきてない」

自分たちを追いかけてきていた旅団たち。

最初の底なし沼までは大きく迂回して追跡してくる者もいたが、その後の毒ガスの噴出地帯、それに猛毒の昆虫たちが飛び交う密生地を抜けたところで断念したらしい。

経験だけならば、レンたちよりずっと経験豊富な旅団もいただろう。

そんな彼らでさえ二の足を踏む危険地帯。レンも、先を行く三大姫たちに必死でついていったから無事なのであり、この魔境を一人で横断しろと言われても正直に自信が無いと答えるところだ。

「まあねー。でもこの魔境に限っては理由があるんだけど」

「理由？」

「そそ。実はこの魔境ができたのって審門の影響なんだよね」

「この場所が!?」

アルカナ大陸の中でもあまりに特異な自然環境。それが冥界の影響を受けたものだという話は今まで聞いたことがない。

「てっきり地中の有毒成分が噴きだしてるのかと思ったけど……」

「そういう魔境もたくさんあるよ。でもここは特別なの。冥界の審門って見つければ誰で

も通行可能って話はしたでしょ。それってつまり冥界にいるモノも簡単に地上に這い上がってこれるって意味だからね」

古くから冥界の障気や魔獣が地上に昇ってきて、半冥界化してしまった。

それがこのバネッサ湿原だったのだ。

「ってことはほかの魔境も？」

「んー、わかんない。調べればあと二、三箇所はあるかもしれないけど、ここまで冥界の影響を受けた場所って珍しいよ」

近づいてくる吸血ヒルを蹴り飛ばしながら、エリーゼ。

「冥界の毒が溜まりやすい風向きや地形。それに冥界の生物が過ごしやすい気温や天候、あとエサも必要だし。そういう条件がぴったり一致したんだろうね」

「……冥界に行く前の心の準備ができた気分だよ」

最も広大な秘境の一つとして知られる地下世界。

有史以来多くの武勇者や冒険家それに王の軍隊が挑んだものの、誰一人としてその全容を明らかにした者はいないと言われている。

そんな過酷な自然環境の一端を垣間見た気分だ。

「それでエリーゼ、まだ歩くのかな」

「ええとね、そろそろ着くんじゃないかな。えっと……こっちのはず！」

ヘドロ状に融解した地面を気にせず進んでいくエリーゼ。
「あ、この先だよ！　見覚えある！」
エリーゼが指さしたのは、地面が真っ白に染まった不気味な丘だった。
「なるほど。白く見えたのは植物の落ち葉でしたか。植物の元からの色なのか、それとも何らかの毒か病気のせいなのかはわかりませんが」
「フィア先輩、怖いこと言うなって……」
真白い落ち葉が積もった湿原。
吹きこむ風が足下の葉を吹きあげては宙へと攫っていく。
真上にあった陽はいつしか地平の先へと沈み、空もまた灰色混じりの茜色に染まっているなかで、エリーゼの背を追いかけて丘を登って。
「……」
息が詰まる。
丘を登りきったところで足を止め、レンは無意識のうちに言葉を発していた。
「嘘だろ……」
冥界の審門は存在した。
巨大な獣の爪を想起させる三角錐状の大聖塔。それが四本で一つの審門を構成しているのも波の将魔戦でエリエスが召喚した審門と共通だ。

唯一の違いがあるとすれば、その大聖塔の中心に顕現しているはずの漆黒の霧が、ほとんど消えてしまっていたことだろう。

転移機能を失った扉――

冥界の審門は、破壊されていた。

大聖塔のうち一本は跡形もなく崩壊。

残る二本も中程からへし折られ、かろうじて原形を留めている塔もそこかしこに亀裂が入っている有様だった。

「……」

言葉が出ない。いったい何が起きたというのか。冥界への道が閉ざされたこと以上に、目の前の状況を理解しようとするだけで目眩さえ覚える。

「……やってくれたじゃない」

その中で。

瞳に危険な光をたたえて口にしたのは冥界の先代魔王だった。

「冥界の審門は悪魔の所有物。悪魔の所有物はみんなアタシの所有物。それを勝手に叩き壊してくれちゃって」

「暗雲が垂れ込めてきましたわね」
崩壊した大聖塔へと近づくフィア。
塔の残骸である破片の一つをつまみあげ、それを鋭い視線でじっと凝視する。
「とてつもない力。審門をここまで跡形無く破壊するなんて」
「そんなに……？」
「ええ。聖地でエリエスから話を聞いていたのがまだ不幸中の幸いですわ。何の前情報もなくコレを見ていたら、正直、冷静ではいられなかったでしょうね。何よりこの破壊痕、まだ時間もそれほど経ってないはず」
フィアの指先から、大聖塔の破片が滑りおちて地に落ちる。
「『沈黙機関』と人間が呼称しているモノ。世界録を探す上で、やはり避けては通れない相手のようですわね」
「見事に先手を取られたな」
半壊した塔に鼻先を近づけるキリシェ。
「わたしの嗅覚にも引っかからないが、沈黙機関とやらもまだ遠くには行っていないはず。いつどこで襲ってくるか」
覇都から自分たちを追跡してきた？　あるいは単純に先を越されたか？
一つだけ確かなことは、フィアの言うとおり、世界録を見つける旅のうえで沈黙機関と

相まみえる可能性が一気に高まったということだ。
「そういえばレン」
思いだしたようにキリシェが手を打った。
「さっき妖精と獣人の旅団がいただろう？」
「ああ。仲間が湿原で行方不明になったから探してくれって頼まれた旅団だろ」
「それらしい人間の臭いが残ってる。やっぱり審門から冥界に落っこちたようだぞ」
「……本当か!?」
瓦礫と化した大聖塔へと振り返る。
冥界に転落した旅団。地上に戻ろうにも審門が壊れてしまっている以上、容易に戻ってくることもできないに違いない。
「エリーゼ、この近くに他の審門は？」
「この大陸にあと一つあるよ。でもどんなに急いでも歩いたら一週間はかかるんだよね。キリシェに竜に戻ってもらって背中に乗るって方法もあるけど……」
口をへの字に曲げてエリーゼが腕組み。
「冥界に行くだけならいいんだけどね。でも別の審門を使っちゃうと転移先も別の場所になるから、行方不明の旅団と離れちゃうの」
「ああ、そうだよな……」

途方もなく広い冥界を歩きまわって、どこにいるかもわからない遭難旅団（パーティ）を探す。想像するだけで気の遠くなる救出作業だ。

「……うーん」

「どしたのレン？」

「これ、動かないかなってさ」

エリーゼの見守るなか、レンは足下に転がる大聖塔（オーバーリスク）の破片を拾い上げた。半壊した二本の塔の欠落部分に、その破片をパズルのように押し当てる。

「こんな感じで砕けた部分をくっつけてみるとか」

「いやいやさすがに？」

エリーゼが苦笑するとおり審門は何一つ反応しない。

「これも立派な失われた技術（オーパーツ）だもん。そんな簡単に直らないってば」

「でもこれ、まだ黒い霧が残ってるんだよ……」

四本の大聖塔から構成される審門の中心部に溜（た）まっている漆黒（しっこく）の霧。エリエスが冥界の審門を召喚した時は、この黒い霧が転移の扉となって顕現（けんげん）していた。

今はレンが抱えられるほどの量でしかないが、ふよふよと宙に漂っている。

……本当に審門が機能停止していたらこの霧も消滅してるだろうし。

……完全停止してるわけじゃない気がする。

現に四本の塔のうち一本は原形を留めている。残り二本も半壊だが、半壊程度で収まっていると言った方がいいだろう。

「フィア先輩？　天界の審門だとこういう場合は？」

「あいにく審門の管理は愛天使に一任しておりますの。もちろん女神様なら知っているでしょうけれど。キリシェはどう思います？」

「レンの言うとおり完全に停止してはいないように見えるぞ。それにわたしたちも別の審門に向かう時間が惜しい。つまりだ……」

破壊を免れた最後の塔へと近づいていくキリシェ。

穴があくほどそれをじっと見つめて。

「えいっ！」

キリシェの回し蹴りが、狙い違わず塔に直撃した。

「さあ動け、少しは意地を見せてみろ」

『蹴った――――っ!?』

「竜の渓谷では、飛べない子竜をこうやって教育するのが風習だ。うん懐かしい。わたしもよく同胞の子竜を崖から突き落としたものだ……というわけで、さあどうした審門よ。貴様も失われた技術の端くれというのなら期待に応えてみせるがいい！」

「ちょっとちょっと、ダメだってばキリシェ！」

さらに半壊した塔二本も蹴りつけるキリシェを後ろから羽交い締め。
「落ちつけレン。見てみろ」
「え？」
キリシェの指さす先で。
無事だった塔と、半壊した塔が淡い紫色の光を帯びて輝きだしていた。塔の先端からも漆黒の霧が泉のようにわき出している。
「嘘おっ!?」
「意地を見せたようですわね。……でも、これちょっと立場的にマズイかも」
辺りを見回すフィア。
自分たちを取り囲むようにあふれ出す漆黒の霧が、やがて大きな扉を形成していくのを眺めながら。
「私たち、みんな審門の中心に集まっていますわ。つまり全員が転移の範囲内。このままでは大天使や竜姫まで冥界に――」
言い終わるその前に。
レンと三人の少女たちは、地上から冥界への転移を終えていた。

「エリエス様」
「……」
「エリエス様ってば」
「ひゃっ!?」
背中にひやりとした手が触れる。冷気が全身を伝っていく感覚に、エリエスは悲鳴を上げて立ち上がった。
本霊宮二階。エリエスの私室で――
「ネビリムってば!?」
「窓際で陽にあたり続けると熱射病になりますよ。それに、これ以上日焼けしたくないとも仰っていたではありませんか」
いつの間にか部屋の扉を開けて入ってきていたネビリム。
最高位の療法士の証でもある濃紫色の法衣……ではなく、今の彼女は珍しく肩から先の二の腕が露出した軽装だ。

「水浴びをしてきました。暑さ対策になりますし、心を落ちつかせて祈りに集中できるのでエリエス様もぜひ」

「……もう。それで手が冷たかったのね」

微苦笑を浮かべて窓枠から遠ざかる。

ネビリムに指摘されたとおりずっと窓向こうを見ていたせいで、強烈な日射しを浴びて身体中が汗だくだ。日常着としても愛用している金色の法衣が、すっかり汗を吸って重たくなっている。

「すっかり心ここにあらずのご様子ですね」

「何のこと？」

誤魔化したつもりはなかった。本当に、ネビリムの言葉に対する心当たりがすぐには思いつかなかったからだ。

「察するに、彼らの旅が気になっているのではないかなと。彼らがここを発ってもう三日です。道のりが順調であればバネッサ湿原に着いている頃でしょう。早ければ冥界にまで到着しているかもしれません」

「……」

指摘されて初めて気づく。じっと窓向こうを眺めていた理由が、今まさにネビリムの言ったとおりのことだったからだ。

……レンたち、無事に魔境を突破できたかしら？

……冥界は想像も絶する危険地帯っていうし。恐ろしい目に遭ってはいないかしら。

エリエス自身でさえ無意識のうちに、自分が彼らの旅団の一員であるかのような心境になってしまっていた。

「私たちカナン巡礼聖教船は、もともと精霊信仰の布教を担う宣教師が創設したものです。善行として徊獣討伐や秘境探索も行いますが、その本分はあくまで精霊の住処を見つけ、精霊を保護することと言えるでしょう」

しとしとと降る小雨のように優しい声で。

ネビリムが窓の向こうへと眩しそうにふり向いた。

「世界録を見つけるという目的も、私たちにとっては、世界中で精霊が怯え始めたという怪奇現象の原因を突き止めるため。そういう意味で、彼らのように世界を冒険して未知の地平を見つける——というような面白みには欠けるかもしれませんね」

「大丈夫よ。浮つく気はないから」

〝……楽しそうで何より〟

〝楽しいわ。だって、こうして自由に外を回れるのって一年ぶりくらいだもの〟

彼らと共に過ごした日々が自分（エリエス）にとって刺激的であったことは事実。けれど聖女という役目を忘れたことはないし、これからも役目を放棄する気はない。

「カナンの街並みをレン様に案内されている時が特に楽しそうでしたね。私たちの旅団（パーティ）では、エリエス様と同世代の男性は珍しいですから」

「……そんなんじゃないわ」

ぷいっと顔を横に背ける。

内心、ほんの少しだけドキッとしたのは内緒だ。

「……ネビリムが水浴びで頭を冷やして来いっていうなら、その通りにするけど」

「いえいえ。そんなつもりはありません」

ネビリムが可笑（おか）しげに口元をほころばせた。

「それに私が参りましたのも、それを注意するためではありません。お客様です」

「客？」

「どうぞ。お入り下さい」

ネビリムの招きに応じ、部屋の扉が開いていく。

誰かと会う約束をしていた覚えはない。誰だろう？　扉の先を見つめるエリエスの視界に映ったのは、絹糸（きぬいと）のようにさらさらと流れる金髪だった。

――中性的な雰囲気を湛（たた）えた剣士。

どこか愛嬌のある双眸に端整な面立ち。女性的な柔らかい印象を与える雰囲気を湛えながらも、全身からは確かな活力と生気が感じられる。

その背中に、二本の精霊剣を携えた剣士。

「シオン!?」

「やあエリエス、最近よく会うね」

のほほんとした様子で片手を上げる金髪の青年。

剣聖シオン。騎士王ゼルブライトと並んで現代最強と謳われる天才剣士が、再び聖地を訪れていた。

「……もう。来るのなら先に言ってほしいわね」

「ごめんごめん。さておきお疲れさま。お互い無事で何よりだったよ」

「覇都の件かしら？」

目配せでシオンに椅子を勧め、エリエスもその対面に腰かける。

……この短期間にカナンを二度訪れるなんて。

……よほど気になることでもあったのかしら？

エリエスがレンたちと覇都エルメキアに挑んだ時、ほぼ同時にシオンも動いていたはず。

その時の情報交換だろうか。

「覇都に入ったら王立七十二階位特務騎士団に囲まれる可能性が高いから、早めに加勢し

てくれるって言ってたじゃない。なのに駆けつけるのが遅いんだもの。慌てたわよ？　覇都を脱出する時も急にいなくなっちゃうし」

「ごめんごめん。僕らもいろいろと立て込んでてね」

申し訳なさそうに後ろ頭をかく剣聖。

「でも今回はソレじゃないんだ。ええと、僕が手配した連絡は届いてるかい？」

「……沈黙機関のことなら話は聞いたわ」

レンたちが聖地を出発する直前に受けた念話だ。

世界中の主要都市に向けた警告。沈黙機関と思しき者たちによる破壊の報告と、それに対する都市側の防衛を要請するものだった。

古代遺跡を観光名所としている都市は少なくない。そこを沈黙機関が襲撃するかもしれないと、そういった警告がなされていたはず。

「わざわざ説明のために寄ってくれたのかしら」

「念のためにね。カナンが管理してる遺跡の数は、他の都市と比べても桁違いに多いから。でも実はもう一つ目的があってさ」

直立不動のネビリムを見上げるシオン。

「僕が初めてここに来た時に案内してもらった古い礼拝堂。もう一度見てみたくなって。ほら、あの『精霊の姫』って呼ばれてる像があったと思うんだけど」

「古寺院のことかしら？」
レンにも案内したことがある場所だ。
精霊信仰の建物としては現存する最古の物だと言われている。

〝お前らもこの場所が好きなの？〟
〝ココ、好キ！〟
〝……好キ〟

精霊に愛された空間――あの場所を訪れたレンの精霊二体が顕現し、楽しげに周りを跳ね回っていたのを覚えている。
「実はさ、沈黙機関のことで確かめたいことがあって」
「何か掴んだってわけ？」
「いやいや、まだ想像の範疇だよ」
好奇心まじりの笑みでシオンが肩をすくめてみせる。
一見すれば暢気で曖昧な表現にも映るが、そう答える彼の言葉は、確固たる自信を感じさせる力に満ちていた。
「エリエスが忙しいなら、通行許可さえもらえれば僕一人で行くけれど」

「それはダメ」
真顔の剣聖に、エリエスはきっぱりと返事した。
「私も行く。そんなこと言われたら気になるに決まってるじゃない」
「言うと思った。決まりだね」
「――ネビリムすぐに手配して。準備が整い次第、目的の遺跡に向かうわ」

Record.3　そして冥界へ

1

冥界ヴェナ・アスラ・ドール。

その地は、人類がいまだ全容を掴むに至っていない。

陽の光の届かぬ広大な地下世界にして、もっとも凶暴な生態系が発達した魔大陸。古くからそう知られてきた秘境が今まさに、レンの前に果てしなく広がっていた。

太陽のない世界。

頭上は不気味な血色の霧に覆われ、地平線の先には怪しげな極光が輝いている。

空気は生臭く、粘り気があり、ただ呼吸しているだけで肺の中を何かが浸食していくような怖気を感じる。

「レン気をつけてね。ここらへん寄生菌の繁殖地みたい。胞子を空中にバラまいてるから、息すると肺の中に菌糸が入って浸食されるよ」

「……って、本当に浸食されるのかよ!?」

常識と言わんばかりのエリーゼの忠告に、レンは慌てて口元に手をあてた。

いま立っているのは小高い丘だ。

足下には刃のように鋭利な棘の生えた花が群生し、ふと顔を上げれば、サソリに羽の生えたような昆虫が目の前を悠然と飛んで横切っていく。

太陽のない空も初体験だが、植物も虫も、何から何まで地上の生態系と違う。

「エリーゼ、この虫は触っても平気?」

「んー……どうだろ。魔界は生き物たくさんいるからね。毎日たくさんの生物が絶滅するかわりに、毎日同じくらい新種が生まれるって言うし」

肩に飛びのってきた斑模様のトカゲを愛でながら、エリーゼ。

どんな恐ろしい毒や牙を隠し持っているのかわからないが、エリーゼ本人はむしろそれを楽しんでいる雰囲気だ。

「うんうん、懐かしいなぁこの景色! どうレン? 良いところでしょ?」

「……良いところねえ」

「まず綺麗な景色」

「……血のように真っ赤な空と、腐ったリンゴみたいな色の地面が?」

「可愛くて愛嬌のある生き物たち」

「……周りに漂ってる羽虫が、さっきから俺の身体を刺そうとしてるんだけど」
「そしてこの危険に満ちたワクワク感！」
「それだけは文句の言いようがないくらい満点」
「でしょー？」
嬉しそうに声を弾ませる褐色の幼女。
「で、どうキリシェとフィアは？　冥界もなかなか良い場所だと思わない？　竜と天使が冥界に入って来るのなんて数百年ぶりだろうし、二人も初めてでしょ」
その自信溢れる言葉を受けて――
竜姫と大天使の返事は、見事に息の合った嘆息だった。
「野草が全部マズそうだ。味見をする気にもなれない」
「目に映る色調がとても悪趣味ですわ。真っ赤な空に真っ黒な森。土は青錆色だなんて。まるで悪魔の世界のようです」
「……ていうか実際に悪魔の住処だからな」
やはりと言うべきだろうか。
竜の渓谷と天界に棲む者として、冥界の景色はあまり好みではなかったらしい。
「でも本当にすごい場所だな。こんな秘境がまだまだ世界にあるんだ……」
青錆色の地面を靴の先端で掘り返す。腐った生卵のような粘着性があり、バネッサ湿原

のようなヘドロ化とはまた別種の異質さを感じさせる大地だ。
「わっ？」
何の前触れもなく地面がどろりと液状化。
レンの靴が吸いこまれるように地中に沈みだした。
「ここも底なし沼か！」
「ううん。たぶんそれ地中の魔獣の罠だと思う。早く足を引っこめないと土の中に引きずり込まれちゃうよ」
「怖っ!?」
「なんだかんだで人間の気配って冥界じゃ珍しいからね。虫も魔獣もレンの匂いを嗅ぎつけて集まってきてるのかな」
「そんな歓迎お断りだから！……っていうかキリシェとフィア先輩は？」
「何ともないぞ」
「あいにくと、私たちは冥界から早々に嫌われてしまったらしいですわ」
平然と丘に立ったままの二人。
エリーゼやレンの周りを飛び交う虫や、足から這い上がって来ようとする奇怪な動物が、彼女たちの周りだけは殺虫剤でも撒いたように皆無なのだ。
自分を襲った地中の魔獣も、そういえば二人を標的にはしていなかった。

「冥界の獣は勘が鋭いからね」
丘の上から周囲を見回すエリーゼ。
「フィアは暴れん坊だから迂闊に近づいたら蹴られそうだし。キリシェも気配は竜だし、襲いかかったら逆に食べられちゃうって怖がったのかも」
「蹴りません！」
「食べるか！」
頬をふくらませて言い返す天使と竜。
二人で顔を見合わせて。
「天使の気配に驚いているだけですわ。冥界では馴染みのないものでしょうから」
「竜だってそうだ」
三百年前にエルラインの仲裁で成立した三種族の協定。
そこには互いの領土への不可侵規定も含まれているという。なりゆきとはいえキリシェとフィアの二人が冥界を訪れたのは、冥界全土におよぶ大事件に違いない。
「この場ではわたしもフィアも大人しくしているとして。レン、あっちの森から人間の匂いがする。遭難した旅団とやらだと思うぞ」
キリシェが指さしたのは丘の下の密林だった。
「まだ匂いが強いから、そう奥へは行っていないはずだ。行くか？」

「ああ、もちろん」

……ここに来て間もないけど一つ理解できた。

……この冥界っていう秘境は、人間が活動するにはあまりに過酷すぎる場所だ。

地上とは比べものにならないほど凶暴に進化した自然環境。何も知らずに迷いこんだ旅団が無事でいられるとは思えない。

「行こう！」

鞘代わりに巻いた霊剣の包帯を解いて、レンは丘を駆け下りた。

黒葉の樹海。

墨で塗りつぶしたように黒い葉を生い茂らせた大樹が連なった密林だ。太陽のかわりに大地を照らす極光の輝きが黒葉に遮られ、樹海の中は薄暗い。

「……これも冥界の樹？」

「そそ。地上では見かけない種だと思うな」

地面から飛びだした太い根を飛びこえていくエリーゼ。

「でも意外。レンならきっと、この樹に驚いて跳びはねるかと思ったのに」

「俺が？　いやいや、だって葉っぱが黒いだけだもん。ちょっと慣れない色だけど、それ

ならさっきの丘で見た虫とか動物の方が不気味だし」
「レン、観察が足りませんわ」
肩を叩かれて、フィアの指さす先へとふり向いた。
「あの木の根」
「……根っこが動いてる!?」
ビクンと痙攣しながら、まるで蛇がのたうつように蠢く木の根。それも一本や二本ではなく地上に這い出ている根っこほとんど全部だ。
「げっ、ていうか枝まで動くのか!?」
しゅるりと首筋に触れてきたのは背後に生えた大樹の枝だった。レンの腕よりも太い木の枝が、まるで意思があるように忍び寄ってきていた。
「冥界の樹は、枝も根っこも自分で動かせるの。植物を食べる魔獣が大量にやってくると大変だよ？　樹がみんな逃げだして、樹海が一晩で大移動するんだから」
「……ようやく見慣れた物を見つけたと思ったのに」
蠢く木の根を飛びこえる。
「単なる樹ですらこの様子ってことは、密林の中にいる生き物も？」
「ちょっとヤバイかもね。行方不明になってる旅団」
四人の先頭を歩くエリーゼが溜息。

「アタシたちが転移してきたのが見晴らしのいい丘だったでしょ。あそこにいると目立つから虫とか魔獣がどんどん寄ってくるし、それでこの樹海に逃げこんだんだと思うけど、あんまりいい選択じゃないかも」

「……そんなに？」

「うん。この方角を突っ切るのがちょうど魔王宮に近い経路だから、アタシらにとっては近道なんだけど。そういう理由でもない限り人間が通る場所じゃないよ」

振り返ったエリーゼが手を前に出して、指を二本立ててみせた。

「魔獣に襲われちゃうか、動く樹のせいで現在地を見失って行き倒れるか」

「どっちもご免だよ。キリシェ、密林の中でも匂いはたどれる？」

「こっちだ。おそらくこの奥に逃げていった」

先頭役をエリーゼからキリシェに交代。

黒い茂みをかきわけた先に現れる獣道を道なりに進んでいくのだが、そうしている間も怪鳥の鳴き声をはじめ獰猛な獣の雄叫びがそこら中から響いてくる。

「……獣の姿が見えないのが不気味だよな」

「息づかいはすぐ近くに感じるぞ」

「えっ？」

「いつ飛びかかってきてもおかしくない。ほら」

茂みの奥の地面を指さすキリシェ。
そこには地面に穿たれた巨大な足跡。三本指で鋭利な爪があるということはわかるが、この足跡がいったい何の魔獣なのか想像もつかない。
「今日の夕食当番はレンだったな。コイツを捕まえれば当分は肉に困らなさそうだぞ」
「命がけにも程があるだろ!?　もっとこう、普通の池で魚釣りとかできないのかよ！」
魔獣らしき足跡から慌てて離れようとした矢先。
――叫び声。
野生の獣とは違う、明らかに人間のものである声が木々の向こうから響いてきた。
「今の声……！」
「見つかったことは好ましいが、あまり良い状況ではなさそうだな。レンこっちだ」
姿勢を低く、頭上の枝をかいくぐりながらキリシェが獣道を駆ける。
蠢く木々の合間の先に。
「……お前たち!?」
拓けた平地。
倒れている壮年の剣士と、身を伏せる白髪の少女という二人組。そんな彼らに迫るのは、見上げるほど巨大な体躯を持つ怪物だった。
「隻眼巨人!?」

数々の英雄譚にも登場する一つ目の巨人だ。
鱗状に変質した体表は黄土色。全身の姿形は人間に近いものの全身の筋肉の発達具合は比べものにならないだろう。外見だけでも十二分に威圧的だが、その四本の腕に大樹の幹ほどに太い棍棒まで握りしめている。
「コイツの縄張りだったみたいだねぇ。冥界の隻眼巨人は爪に呪詛が付着してるはず。呪われると悪魔でも意識を失って狂乱化するくらい強力だから」
「こんなデカい図体で呪詛まで持ってるのか！」
霊剣ヴィエルジュを握る腕に力をこめる。
倒れた二人めがけて隻眼巨人が棍棒を振り上げて、振り下ろす。その動作が切りかわる一瞬の合間に、レンは巨人の足下へと走った。
「な、何やってんだ!?　お前までコイツの餌食になるぞ！」
倒れている剣士からの警告を聞き流し、輝く精霊剣を振りあげる。
唸りを上げて叩きつけられる巨大な棍棒。その先端だけに意識を集中し、一切の迷いなく振りきった。
――剣と棍棒とが交叉。
『ッ』
隻眼巨人がわずかに身震い。霊剣ヴィエルジュの刀身が、今まさに二人へと振り下ろさ

れた棍棒を切断したのだ。
だがこれだけでは巨人は止まらない。
『危ナイ！　危ナイヨ！』
肩に掴まった姿で顕現した土の始原精霊に応え、レンは身をひるがえした。
「さすが四刀流ってわけか……」
隻眼巨人の腕にはまだ三本もの棍棒が握られている。
レンに棍棒を切断されたことを悟るや、すぐに残る三本の棍棒で同時攻撃を仕掛けてきたのだ。もしも後退ではなく追撃を選んでいたら、三方向からの同時攻撃を避けきれずに受けていただろう。
「……土の始原精霊……精霊が人間を？　うそ……」
白髪の少女の惚けた呟き。
一方でレンの背後では――
「見た目は大人と子供の戦いだな。いや子猫と獅子の戦いか？」
「まあ何とかなるでしょう。レン、複雑骨折くらいならすぐ治してあげますわ。安心して何度でも戦って経験を積んでください」
「呪いもアタシが解呪できるから、何回呪われてもいいからね？」
木の根に腰かけてくつろぐ三大姫。そんな暢気な彼女たちに応じる余裕もなく、レンは

霊剣を握ったまま全力で大地を蹴った。
隻眼巨人の側部へと右回り。
それに反応して巨人が振り向くのを利用し、さらに跳躍を切り返して視線を揺さぶる。
相手の視線がブレた一瞬のうちに左回りで背後まで一気に回りこむ。
……踏み潰されないように。
……だけどギリギリまで密着する！
この怪物最大の特徴でもある一つ目では捉えきれない背後へ。しかし死角に回りこまれた気配を察知した隻眼巨人もまた、跳ねるように振り返る。
「――火の始原精霊！」
『火、灯ス？』
「ああ」
蒼く透きとおった刀身が、火の始原精霊の力を得て紅蓮の剣へと昇華。その切っ先が隻眼巨人の棍棒を紙切れのごとく斬り飛ばし、強固な体表をも切り裂いた。
「レン、まだですわよ」
「わかってる！」
恐ろしいほど俊敏な動きで隻眼巨人が後退。霊剣はこの巨人の太股をわずかに掠めただけだ。この程度の傷では痛みなど無きに等しいだろう。

……さすが英雄譚にも出てくる怪物。
……歴戦の騎士が苦戦したっていう伝説はダテじゃない。
燃えさかる炎の剣を携え、身を屈める。
怒り狂った隻眼巨人の逆襲。そう予感してレンが迎撃態勢をとった矢先。
『――――』
ずん、と音を立てて落下していく巨人の棍棒。持っていた武器を手放すや、怪物が地響きを立てて森の奥へと駆けだした。
「え？　あれ、逃げていったけど」
「あらら。レンの剣が急に燃えだしたから驚いたのかな」
木の根を椅子代わりに座るエリーゼ。
「レンの炎を見て、反射的に逃走本能が刺激されたとか」
「炎が苦手なのかな？」
「んー。怖がるとしたら炎じゃなくて悪魔の法術全般かもね。たとえば冥界に業火の山があるんだけど、そこは四百年くらい前に炎の将魔が激怒して燃やした山なの。今も熱いから魔獣だって近づけないしね。悪魔の法術を警戒する魔獣は少なくないよ」
「……だってさ？　お前の炎、悪魔の法術と勘違いされたかも」
こぼれた苦笑で火の始原精霊に目配せ。

「ありがと。もう平気みたいだから」
『モウイイノ？』
少しだけ寂しそうな紅蓮の火蜥蜴。
霊剣を包んでいた火が消えるのを待ってから――
「おおぉぉぉぉっ、すげぇ！　すげぇよお前さんっっ！」
「うわっ!?」
振り返る間もなく後ろから力一杯抱きつかれた。
隻眼巨人に襲われて地面に倒れていた壮年の男性剣士。身長は向こうの方が高いので、抱きつかれるというより羽交い締めにされたような状態だ。
「おいおいおい、あの化けモンを追い返しちまうとは。若ぇのに大したヤツじゃねえか！」
「た、助かって何よりだけど……離してもらえると嬉しいです……」
「お？　そうだった。はっはっは、悪ぃなボウズ。感極まるとつい身体が動いちまうのが俺の癖でな」
豪快な笑い声を響かせて手を離す男。
浅黒く日焼けした肌に筋肉質な体躯。年齢は三十代の後半から四十近いだろうか。剣士としても旅団の一員としても十分に熟練と言っていい頃だろう。
「挨拶が遅れたな。俺はダンっつぅんだ。『黄金の夜明け』って旅団を仕切ってるもんで、

家族からは団長って呼ばれてる。まあよろしく頼む」
「家族？」
「おう。旅団の仲間は俺の大事な弟妹みたいなもんだからな。単にメンバーって呼ぶのも味気ない言い方だろ」
「……珍しい呼び方ですね。それに、すごい強そうな名前の旅団」
「そうだろう？　男たる者、まずは名前から格好つけないとな」
嬉しそうにダンが胸を張ってみせる。
「で、ボウズお前は？」
「……レンです」
「ほう、レンっていうのか。しかしボウズ、お前さんよく見れば誰かに似てるな」
じろじろとこちらを見つめて。
「もしや、最近どこかで名を上げるようなことがなかったか？　風の噂でよ、エルラインに似た奴が色んな場所で奮闘してるってのを聞いてるもんでな」
「あぁ。たぶんソレは俺と、あと後ろの三人です」
後ろで様子見の三大姫へと振り返る。
「……でもそんな大したことはしてないけど」
「おっ、じゃあお前さんたちが例の旅団か。なるほどなるほど。いや助かったわ。こんな

ところで思わぬ出会いに恵まれたもんだ」

ほっとした表情でダンが胸をなでおろす。

「しかし驚きの連続だぜ。バネッサ湿原ってのが恐ろしい場所ってのは聞いてたが、まさか隻眼巨人（サイクロプス）まで出るとは思わなかったんでな。ちょっと奥深くに来たら景色が一変してよ。見たこともない獣に追いかけられて途方に暮れてたとこだ。……ところでお前さんたち、余計なお世話だがどうしてここに？」

「あなたの仲間に救援をお願いされたからですわ」

「付け加えると、ここは冥界（めいかい）だ。お前の知る地上ではない」

「バネッサ湿原に審門があったってわけ。気づいてないみたいだけど、オジサンたちそこから冥界に転移（てんい）してきたんだよ」

畳みかけるように答える三人の少女たち。

「……なに？　冥界だと？」

辺りを見回すダン。

地上にいない奇妙な虫や小生物、腐敗した色味の大地に、黒い葉を茂（しげ）らせた動く大樹たち。それらを穴があくほど観察した後に。

「冥界っ!?　ど、どどど、どうなってんだよ一大事じゃねえか！」

悲鳴を上げて転倒した。

「なあミスティ、お前も気づいてなかったよな？　ちょっと変わった森くらいにしか思わなかったよな？」
「気づいてました」
「なんで言ってくれないんだよこんちくしょう!?」
「言いたかったけど、ずっと隻眼巨人（サイクロプス）に追いかけられてましたから」
ワンピースについた砂埃（すなぼこり）をはらう白髪（はくはつ）の少女。
ダンと同じ黄金の夜明け（ヴィーナス・ライト）の一員だというのは想像がつくものの。
……あれ？
……なんだろう。この子？
新雪さながらに白く輝く髪に、一切の色素が抜け落ちたように白い肌。
背はキリシェと並ぶほどだが、その肢体（したい）は華奢（きゃしゃ）と呼ぶのも憚（はばか）られるほどにか細い。さらには表情も乏しく口数も少なめ。
どこの街角で会っても気づかずにすれ違いそうなほど存在感が希薄なのに。
……胸が……ざわつく？
……なんでだ。初めて会っただけのはずなのに。
何か大事なことを忘れてしまった時のようなソワソワとした浮遊（ふゆう）感に、レンが内心首をかしげようとした矢先。

manga-zone.org

「どうかしましたか？」
視線と視線が重なった。
抑揚のない無機質な声で尋ねてくるミスティ。
「わたしが何か？」
「う、ううん！　ごめんジロジロ見て。何でもないから！」
「そうですか」
ぷいっと顔を背ける白髪（はくはつ）の少女。が――
「どうかしましたか、じゃねえだろミスティ？」
「きゃっ!?」
「お前なぁ、助けてもらったんだから礼の一つも言うもんだぜ？　それが人と人の縁ってやつだ。そうだろ？」
「……団長、土だらけの指で髪を掻（か）き回さないでください」
べたべたと髪に触れるダンと、それを困り顔ながらも受け入れるミスティ。
まるで親子。熱烈な親の愛情表現（スキンシップ）に弱りながらも、それはそれで「親とはこういうものだ」と悟った早熟の子供のような雰囲気だ。
「ほら、お前も頭を下げろやミスティ」
「……礼を言います」

「はっはっは！　素直じゃねえなミスティは。無愛想だが、根は情に厚くて可愛い奴なんで勘弁してくれや。しっかしそうか獣人と大妖精を待たせてるもんな。はえぇところ地上に戻らないと」
「戻れないよ」
「なぬ？」
エリーゼの軽い一言に瞬きするベテラン剣士。
「バネッサ湿原にある審門は壊れちゃったの。アタシたちも試したけど、丘にある審門はもう動かないみたい。地上に戻れないってわけ」
「……つまり？」
「一生冥界で暮らすことになるね。頑張って？」
「うぉぉぉっぉぉぉっ!?」
「こらこらエリーゼ、ダメですよ脅かしては」
悲鳴を上げるダンを後目に、いたずら笑顔のエリーゼを窘めたのはフィアだった。
「本当に信じきっているではありませんか」
「だって面白いんだもん。好い感じに反応してくれる人間は嫌いじゃないよ」
お腹に手をあてて笑いをこらえる先代魔王。
「任せときなって。笑わせてもらったお礼に、魔王宮にある審門を使わせてあげるから。

人間に使わせるのなんて何百年ぶりだろうね」

「……魔王宮……だと？」

「私たちの目的地です。そこに一緒に向かいましょう、ということですわ」

魔王宮。

冥界に棲む悪魔たちの塒であり、その首領である魔王の拠点としてあまりに有名だが、現実にどのような場所なのかはレンもまだ聞いていない。

……あの五大災もそこにいるっていうもんな。

……本当に無事に帰ってこれるのか俺だって不安なくらいだし。

エリーゼは「アタシが一緒にいれば平気」と言うが、レンの本音は、凶暴な肉食動物の檻に自分から入っていくような心境だ。

「ところでレン。剣、まだ手にしていた方がいい」

最後に根っこから立ち上がるキリシェ。

凛と整った面立ちで茂みの向こうを睨みつける。

「冷たい息づかいが近づいてくる。十中八九、魔獣だろうな」

「俺たちの方に来てるのか!?」

魔獣とは、悪魔と同種の障気を発する獣の総称だ。なかには法術さえ行使する種があり、どの獣も狡猾で警戒心が強く、そして凶暴。冥界を探索するうえで旅団が悪魔以上に遭遇

を恐れるべき相手だろう。
「一直線にわたしたちへと向かってきている。ふむ、少々面倒くさそうだな」
「面倒って、さっきの隻眼巨人くらい？」
「比べものにならん」
キリシェが口早にそう告げるのと時同じくして。
――沈黙する密林。
さっきまで聞こえていた獣のうなり声が、水を打ったように静まりかえった。
「……この怖気!?」
茂みから吹きつける冷たい障気を感じた瞬間、全身という全身の肌が粟立った。背中から汗が噴きだして胸の鼓動が一気に早くなる。
「何だ！」
目の前の木々をなぎ倒しながら現れる魔獣。
それは漆黒の巨犬だった。
後ろ脚で立てば前脚が民家の二階にまで届くであろう驚愕の体高。全身が発達した筋肉に覆われており、その黒い毛並みは鎧のごとく硬化している。
そして何よりの特徴が、首から生えた三つの頭だ。
「け、ケケ……三頭の冥獣っっっ!?」

震えすぎて歯の根が合わないダン。
今まで数々の旅で多くの徊獣と遭遇してきたであろう熟練の剣士が、たった一体の魔獣を見ただけで戦意を喪失してしまう。
冥界の門番とも称される獣。
一度激昂すれば、高位悪魔さえ逃げだすほどの残忍さと凶暴さを備えた狂犬。まさしく冥界を代表する魔獣と言えるだろう。
……そうか。さっきの隻眼巨人が逃げたのは炎を恐れたからじゃない。
……こいつが近づいてくる気配を感じたからだ。
したたり落ちる汗を拭う余裕もなく、眼前の巨犬を決死の覚悟で睨み上げる。
ダンとミスティを逃がす時間稼ぎ。その算段を咄嗟に――
「おーっ！　三頭の冥獣じゃん！」
エリーゼが、ぱっと魔獣の足に飛びついた。
「そっかそっかー。ご主人様の帰りに気づいて迎えに来てくれたのかな？　かな？」
『黙れ』
前脚でエリーゼを払いのける三頭の冥獣。
「あいたっ！　ちょっとこら！」
『貴様、ようやく冥界に戻ってきたと思えば……』

三つの首がそれぞれ動く。
うち一つはエリーゼを見据えたままで。
二つ目の首が竜姫と大天使。そして三つ目の首が自分とダン、ミスティを見下ろして。
『竜と天使？　ずいぶんと煩わしいものを冥界に引き入れたな。我が住処まで天界の匂いと竜の匂いが漂ってきたぞ……』
「ああなるほど、それが気になって駆けつけてきたんだ？」
『答えろ！』
「なりゆきだ」
エリーゼにかわって前に出るキリシェ。
苛立ちを隠そうともしない魔獣をまっすぐ見上げて。
「気に触ったのならば詫びる。逆の立場で、竜の渓谷にお前が侵入したらわたしも怒るだろうしな。わたしたちの目的は魔王宮だ。冥界を荒らすつもりはない」
「約束しますわ。目的を果たしたらすぐに地上に戻りますので」
続いてフィア。
そんな二人とエリーゼを交互に見返し、三頭の冥獣が不満そうに歯ぎしりを漏らした。
『ならば早々に戻ることだな。我は塒に戻る』
「あ、待った待った！　アンタ足速いじゃん。アタシら乗せて魔王宮まで送ってよ」

『なに……？』

「アンタの塒までの途中だし、遠回りにはならないでしょ」

使い魔に再び声をかけたのはエリーゼだった。

『何を戯けたことを……』

「魔獣アルギネスの骨ほしくない？　アンタの大好物、魔王宮の倉庫にたくさん残ってると思うけど」

『……断る』

「じゃあ大奮発で二つ」

『三つだ』

重低音のきいた唸り声を響かせる魔獣。

『我の頭の数を理解しているか？』

「はいはい。じゃあ交渉成立ね。あ、でもアタシはレンに冥界の案内をしながら歩いていくからいいよ。こっちの二人を屋敷の前まで送ってちょうだい」

「……へ？」

エリーゼに人差し指を向けられたダンが顔を強ばらせる。

「ま、待て待て待て!?　それ俺らどうな――――」

『こうなる』

魔獣の尻尾が蛇のように蠢いて、黄金の夜明けの二人を締め上げた。
『魔王宮の前に放りだしておく』
「うおぉおおっぉおおっっっっっっっっっっっ!?」
木々をなぎ倒しながら一瞬で遠ざかっていく三頭の冥獣。レンが一呼吸する間に、既にその漆黒の巨体ははるか遠くの木々の中へと消えていた。
「いいのか、あんなんで……」
「平気じゃない？　一緒に冥界を歩くより安心だよ。レンならともかくも、普通の人間が冥界を歩き回るのなんて無謀なんだから」
三頭の冥獣が残した足跡をなぞってエリーゼが歩きだす。
「気を取り直して出発！　さ、次はどんな魔獣が出てくるかな？　まだまだ沢山いるからレンも楽しみにしててね？」
「……程々にしてくれよ」
霊剣を右手に、レンは先を行くエリーゼを追いかけた。

2

「お前ら遅ぇぇよ!?」
「……まさか一昼夜、屋敷の前で待ちぼうけとは思いませんでした」

三方を断崖に囲まれた丘の上。

疲れはててその場に座りこむダンとミスティが、こちらの姿を見るなり飛び起きた。

「ん？　てかボウズ、何だかボロボロだな？」

「ええ……まあ一昼夜、ずっと冥界をさまよい続けたので」

黒葉の樹海から魔王宮までゆっくり歩けば三日かかると言われ、とにかく早く魔王宮に向かおうと走りっぱなしの一日だった。

「魔獣に追われて走って逃げたところが王毒種の虫の巣で……逃げようとして湖に潜ったら、そこも水の中にでっかい人食い魚がいて……全力で泳いで対岸にたどり着いたら、ええと磁場が狂った砂漠で迷子に……」

「……お、おう。よく無事で」

はたと真顔に戻るダン。

「ていうかよ、本当に魔王の屋敷なんてあるんだな」

白霧のかかった大屋敷。

中央の屋根には時計塔らしきものがそびえ、歪んだ文字盤上でゆっくりと時を刻んでいるのがわかる。巨大な庭園には手入れされた芝生が広がり、花壇では瑞々しい大輪の花が咲き乱れ、その上を黒い翼の妖精たちが飛びまわっている。

王族の屋敷めいた絢爛さと、幻想感。

二つの異なる美しさが見事に調和した設計だ。
「綺麗でしょ？　いま棲んでるのは五大災とその部下たちと、ほか沢山だね。基本的に来るもの拒まずだよ、賑やかな方が楽しいから。というわけで、レンどんどん進んじゃって。早く中に入ろーよ」
「お、おいエリーゼってば!?」
押されるまま魔王宮の扉まで小走りに駆けていく。
鈍い青銅色に輝く両開きの扉。さすがは悪魔の屋敷と言うべきか。扉全体に何かしらの法術が仕掛けられていて、うっすらと怪しげな薄紫色の光に包まれている。
「……俺が開けるの？　この扉？　迂闊に手を触れたら罠とか発動しそうなんだけど」
「何事も挑戦だ」
「冥界では、私たちはあくまで付き添いですので」
暢気なキリシェとフィアに見守られ、ダンとミスティの不安げなまなざしを背中に受けながら、レンは魔王宮の扉へと手を伸ばした。
ギィっという金属同士が擦れる音。
レンの指先が扉に触れるより早く、扉の方が先に動きだした。
内開きに開いていく扉。
その先に映る光景は、煌びやかなシャンデリアの照らす絢爛なロビーだった。

「お帰りなさいエリーゼ様。
そしてようこそ皆様、魔王宮リーゼルシャットへ」

家政婦姿の少女が恭しく頭を下げた。
この広大な魔王宮の出迎えがわずか一人というのは寂しい気もするが、当の少女にそれを気にした様子はない。
むしろそれを誇りに感じてさえいるような粛然とした佇まい。
――自分一人だからこそ全てを捧げて尽くすのみ。
そんな雰囲気が感じられる。
「申し遅れました。私、この宮殿にて家政婦長を務めておりますルルと申します」
上品なワンピースに白の頭飾り。
人間の家政婦とまったく同じ仕事着を身につけた青髪の悪魔。落ちついた物腰と丁寧な言葉遣い。清楚でありながら、どこか高貴な印象も感じさせる相貌だ。
その中で唯一「悪魔らしい」ものがあるとすれば、それは爛々と赤く輝く瞳だろう。
赤い満月――
まるで吸いこまれそうなほど深い魔性の瞳。

「本日は皆様の……っと、エリーゼ様？」
「ルルッ！」
家政婦長（ハウスキーパー）の悪魔が言い終えるのを待たずに抱きついたのはエリーゼだった。
「ひっさしぶり！　ねね、元気だった？」
「もちろんでございます。エリーゼ様こそ長旅でお疲れでしょう。お部屋も調えておりますので今日はゆっくりお休みください。もちろん、その前に魔王様へのご挨拶（あいさつ）を忘れずに」
「えー……魔王（アイツ）への挨拶なんていつでもよくなーい？」
「そうはいきません。魔王宮の代々のしきたりでございます。エリーゼ様だって、自分が魔王の時に挨拶を忘れる悪魔がいたら怒るでしょう」
可笑（おか）しげに微笑（ほほえ）むルル。
「魔王様もエリーゼ様のお帰りをビクビクして……いえ、ワクワクしてお待ちです」
「それはいいんだけどさー、それでねルル」
「冥界（めいかい）に竜と天使を連れてきたことですね？」
抱きつくエリーゼを絨毯（じゅうたん）の上へと優しく降ろす家政婦長（ハウスキーパー）が、弱ったような微苦笑で肩をすくめてみせた。
「話は三頭の冥獣（ケルベロス）から聞きました。三百年前の協定があるとはいえ、浅からぬ因縁の相手……とはいえエリーゼ様が連れてきたのであれば客人です。すでに私から屋敷の使い魔、

そして五大災に連絡はしております。間違っても取っ組み合いを始めぬようにと」
「さすがルル！」
「お褒めにあずかり光栄です。そして――」
少女の真っ赤な瞳が映したのは、キリシェとフィアの前に立つ自分だった。
無言の観察。
頭から爪先までをじっくりと眺めた後に。
「なるほど。本当によく似ている」
家政婦長の悪魔がふっと表情をやわらげた。
「あなたがレン様ですか」
「……俺のことを？」
「炎の将魔から聞いています。あの剣帝エルライン生き写しの面影。しかも精霊まで従えている人間と聞いて、魔王様や五大災、屋敷中の者たちがあなたを一目見たいと楽しみにしていました」
エリーゼの頭を一撫でし、くるりと身をひるがえす青髪の少女。
「皆様、これより魔王様の広間にご案内いたします。どうぞご一緒に」
「みんなついてきて。あ、黄金の夜明けとかいう二人もね」
ルルに手を引かれて歩きだすエリーゼ。その後にレン。キリシェとフィア、そして最後

に黄金の夜明け（ヴィーナス・ライト）の二人という行列だ。

「歩きながら、魔王宮のことをご案内いたします」

通路にこだまする硬い靴音。硝子（がらす）のように研磨された大理石の床を進む家政婦長（ハウスキーパー）が、歩調はそのままに通路の前方を指さした。

十字の曲がり角の先。

通路に終わりがない？

レンが目を凝（こ）らしても、遠くがぼやけるほど先まで通路がずっと続いている。

「幻術の類（たぐい）ではありません。単純にこの屋敷がそれほど広大なのです。通路の終わりまで走るとすれば、人間であれば空腹で行き倒れになるくらいの広さがあります」

「……そ、そんなに!?」

「はい。魔王宮を外から見たときに霧がかかっていたと思いますが、あれは空間干渉系の高等法術（ほうじゅつ）です。あまりに大仰な外見はかえって景観を損（そこ）ねるということで、空間圧縮を施（ほどこ）しています。それで見た目だけはあの程度の大きさで済んでいると」

十字路で立ち止まるルル。

彼女が何を意図して立ち止まったのか。それを嫌が応にも察し、レンは最後尾に立つダンと顔を見合わせた。

「よおボウズ、これは俺の目の錯覚か。どうなってんだこの迷路は？」

「同感です」

十字路の左右に延びた通路の先には、また十字路。その先の通路では、今度は二股に別れた分岐路がどこまでも延びている。

……ただの屋敷じゃない。

……ここは悪魔が仕掛けた迷宮そのものなんだ。

「どれだけ広いか想像して頂けたと思います」

十字路を右に曲がっていくルル。

「屋敷が広すぎるせいでまだ悪魔も使い魔も見かけませんが、実際の魔王宮はとても大所帯です。悪魔と使い魔があわせて七百六十五体、それに宮殿の清掃や巡回を任せている黒妖精が四千二百九十一体です」

「あと庭園と中庭に放してる魔獣が八十体くらい？」

「エリーゼ様よく覚えていらっしゃいますね。正確には八十四体です」

すらすらと答える家政婦長。

「あらら、その管理となると大変ですわねぇ」

感嘆の溜息をこぼすフィア。

眩い金髪をくるくると指先で巻きながら。

「私、天界の同胞が何体いるのかも覚えておりません。ねえキリシェ？」

「まったくだ。竜の渓谷もしょっちゅう子竜がはぐれて大騒ぎだぞ。そのたびにカルラが渓谷中を飛び回って捜索してるというのに」

腕組みしながら首を振って応じるキリシェ。

「レンも、聖フィオラ旅学園の生徒や教員の数は覚えてないでしょう？」

「え？　ああ、そう言われてみれば……」

三年間在籍しているというのに、名前と顔が一致しない教員は少なくなかった。

生徒もクラスメイトの数ならばともかく、学年ごとの生徒数、さらに一人一人の名前など覚えようという気にもなれない。

だが、ルルという悪魔はそれをすべて記憶しているのだろう。

広大な魔王宮の構造。そして悪魔や妖精、魔獣の全個体と名前のすべてを、完璧に把握しきっているはず。

「家政婦長ってすごいんだ……」

「長くこの仕事に就いていますので。半分は趣味のようなものです」

当たり前のように答える家政婦姿の悪魔。

「もう少々歩きます。同じような通路が続くと思われるかもしれませんが、壁に飾ってある風景画や花瓶はぜんぶ違うものです。魔王宮を歩く際の目印にもなりますので、歩きながらご覧ください。ただし――」

「へえ。こいつは洒落てるじゃねえか。俺はちっとばかし工芸品にうるさいぜ？」

ルルが説明を言い終わるより前に。

奥の花瓶に目をつけたダンがふらりと奥の壁際へと向かっていく。

「おいおいミスティ見ろよ。花籠まであるぜ」

「……花籠？」

「竹細工の花瓶だよ。竹を切って段々に編みこんで作る。見た目が涼しげだから青とか白の花とよく合うんだなこれが。それに、この青い花も冥界のにしちゃ綺麗じゃねえか」

感心しきった口調で満足げに花瓶へと近づいていく壮年剣士。

「あれ？　でも花の匂いがしない……って、うおおおおおおおおおっっ!?」

途端に巨大化して襲ってくる花の怪物。

「ただし絵画も調度品も、ご鑑賞の際はお気をつけ下さい。十個のうち九個の割合で罠が仕掛けられていますので」

「こんちくしょうが、それほとんど罠じゃねぇか!?　ミ、ミスティ頼む！」

「……団長、しっかり」

蔓に拘束されたダンを引っ張る白髪の少女。そんな命がけの救出作業を、レンも一緒に手伝いながら。

「えっと、ルルさん？」

「ルルで結構です」
「この屋敷って、もしかしてずっとこんな感じで罠だらけ？」
「初代魔王の趣味です。この通路も、一つ間違えれば無限回廊に迷いこむのでご注意を。エリーゼ様でさえ何度ここで迷子になったかわかりません。ね、エリーゼ様？」
「いやぁ懐かしいねえ」
「魔王が迷子になる魔王宮はダメだろ……」
レンも歩きながら目印に絵画を覚えようとしているのだが、似たような風景画があまりにも多すぎて早々に挫折した。
……複雑な地下迷宮になると優秀な地図描画士（グラフィッカー）の同行が必須らしいけど。
……本当にそんな感じだな。
「レンってば、そんな怖々歩かなくてもいいんだよ？　アタシの屋敷なんだから」
「エリーゼの家だから怖いんだよ！」
手を繋いで歩いていくルルとエリーゼの後ろにぴったりついていく。
「あれ？」
にわかに周りの空気が変わった。シャンデリアの輝きも、周りの絵画や調度品も何一つ変化ないというのに、空気が重い。
息苦しい……光さえ届かない深海に放り込まれたかのような圧力だ。

「気づきましたかレン」
「ずいぶんと障気の濃い場所に来たな。よほど強力な悪魔が近くにいるらしい」
淡々と口にするフィアとキリシェ。
だがそんな二人でさえも、表情にわずかな警戒を浮かべている。
「五大災の私有地だね」
先頭を歩くエリーゼが振り返った。
「魔王宮の所有者は魔王だけど、ここはその例外。特別に切り離されて五大災の所有ってことになってるの」
「ってことは五大災がぜんぶここに？」
「はい。しかし気まぐれな者たちの集いです。部屋の中に何年も籠もっていたと思ったら、屋敷の外に出て百年ほど戻ってこなかったり。出かける際に一言教えてくれれば食事の用意もしないで済むのですが……」
目頭に指をそえて家政婦長が嘆息。
「この五大災の部屋の先が、魔王様のいらっしゃる広間です。どうぞ」
すたすたと先を進んでいく悪魔の少女。
五大災は、単純な強さにおいては現魔王をも上回る冥界の最強戦力だ。特別な私有地を与えられていることからも、その身分は魔王に準じるのだろう。

一方で、その領地である通路を歩くルルの姿はあくまで毅然として、家政婦長らしい威厳に満ちている。

……そこまであんまり尻込みした感じもないし。

……魔王宮の家政婦長って、結構高い身分にあたるのかな？

ふと脳裏にうかんだ思考に思いを巡らせて。

「え？……わっ！」

衝撃。

全身に伝わる衝撃に足がふらついて、レンはその場の壁によりかかった。

曲がり角で注意を怠っていたところに、ちょうど角を曲がってきた相手とぶつかってしまったらしい。

「あいたた……ご、ごめん……」

「……い、いやこちらこそ。魔王様への謁見の客人か？　申し訳ないことをした」

ふらつきながらも深々と会釈。

顔を上げた先に立っていたのは、ちょうどレンと同じくらいの背丈の悪魔だった。

外見年齢は人間の十代後半だろう。

肩にかかるほどの濃緑色の髪に、赤みを帯びた双眸。その顔だちは奇妙なほど中性的で、映る角度によっては可憐に。顔の角度次第では凛々しいとも思わせる造形だ。

一方で、身につけている装束は剌々しい重甲冑。

「……」

「……」

そんな悪魔をじっと凝視する。

悪魔の方も目を何度か瞬きさせて、瞼をこすってこちらを見つめ――

『あ――――っ!?』

レンと魅亞は、同時に互いを指さして声を上げていた。

波の将魔・魅亞。

五大災の一人にして、世にも珍しい竜と悪魔の混血種。

あらゆる負傷から即座に回復していく無類の組織修復力を持ち、さらにその身体は、受けた攻撃に対する耐性を得るという驚異の特性を持っている。

打つ手がない。

聖地カナンで決闘を強いられたレンとエリエスが撃破を諦め、最後の手段として冥界に無理やり転送させた相手だ。

「見つけた、見つけたぞレン！　よもやこんな場所で出会うとはな！」

歓喜の表情で叫ぶ魅亞。

「先の聖地での機転は見事……しかしここは冥界だ、あの時のような真似はできまい？

さあ今こそ再戦の時！」
「え？　ちょっと待った、いきなりソレかよ!?」
「問答無用！」
握り拳で殴りかかろうとする魅亞。
それを――
「いけません」
後ろに立つ青髪の少女の一声で、波の将魔の動きが止まった。
「案内の邪魔をしないでください。レン様は、私が案内している最中です」
「……なに？」
凄みのきいた声音とともに振り返る褐色の悪魔。
「ルル、誰にものを言っている」
「あなたこそ魔王様の客人に手を上げるつもりですか？」
五大災に睨まれながらも毅然と立ち向かう家政婦長。
「しかもあなたは一度敗北を喫した身。再戦を望むのならばそれなりの態度が必要です。言葉と態度を荒らげたところで、真の強者に至ることはできませんよ」
「……なんだと？」
「というより魅亞」

ふう、とわざとらしい溜息をついてルルが腕を組む仕草。
「あなた、話し相手がいないから構ってほしいだけでしょう？」
「～～～～～～～っ!?」
魅亞の褐色の頬があっという間に真っ赤に染まった。
「そ、そんなことはない！　オレは……オレはちょっと孤独が好きなだけだ！　馴れ合いなどもってのほか。言いかがりは――」
「とにかく。今は拳をひきなさい。ほら、エリーゼ様も見てらっしゃるのだから」
「……わかった」
意気消沈した様子で背を向ける褐色の大悪魔。肩を落として通路を戻っていく、その寂しげな背中を見送って。
「魅亞は、魔王宮のはぐれ者なのです」
肩をすくめたのはルルだった。
「世にも珍しい竜と悪魔の混血種。禁呪による誕生とはいえ生まれたのは冥界ですし悪魔の血も引いているのに、竜の血が入っているせいで同胞たちと今ひとつうち解けられない。部下たちからの信頼も厚いとは言えず、苦労しているのですよ」
「……どこも似たようなことがあるんだな」
悪魔たちの間でも出自を理由とした扱いが存在する。聖フィオラ旅学園で自分が受けた

待遇を思い浮かべ、レンは後ろ頭を掻いた。
「相手するのは懲り懲りだけどそういう事情なら――」
「わたしが話し相手になってもいいぞ」
「……キリシェが？」
「そういう事情ならばわたしの立場上、放っておくわけにはいくまい」
魅亞が去った方角を指さしたのは竜の姫。
「例外ではあるが、あいつも竜の血を引いているのなら同胞なのだろう。まあ任せておけ。軽く元気づけて戻ってくる」
「俺は構わないけど、道に迷わない？」
「問題ないぞ。匂いでたどるなり魅亞に聞くなり、合流の手段はいくらでもある」
魅亞を追ってキリシェが小走りに駆けていく。
その姿を見て、顔を見合わせるエリーゼとルル。
「いいかい、ルル？」
「はい。それでは先に――」
ルルが一歩足を踏みだそうとした矢先。
再び、気配。今度は魅亞がやってきた通路とは逆方向から足音が響いてきた。
しかも次は複数で。

「ああ忙しい忙しい。ねえベルドレッド、お花見の場所取りは覚えてる？」
「魅已が配下たちと先に向かっているはずである。魔獣どもの縄張りだから早急に我々も加勢して魔獣を手なずけよとのご命令だ」
自分たちの目の前を駆け足で横切っていく悪魔が二体。
黒金色の甲冑と同化した大型の悪魔。
もう一体はロングスカートを穿いた金髪の悪魔だ。こちらは人間の少女に似ているが、ウサギのような長い耳が頭から、そして狐型の尾がスカートから覗いている。
「あら、あの悪魔は」
くすっと意味深な笑みを浮かべてフィアが振り返る。
「フィア先輩知ってるの？」
「ええ。拳を交えた仲ですから」
どういう意味だろう？　そう疑問を浮かべたところで、またしても通路の奥から複数の足音が響いてきた。
「にゃーっ！　ご、ごご、ご主人っ、お花見用のお酒、言われたとおり倉庫から持ってきましたにゃ！」
「あらメリス、いいお酒を選んだじゃない。さすが私の使い魔ね」
「で、でもコレ魔王様の秘蔵酒にゃ？　空っぽにしたら怒られそう……」

「後で水でも詰めておけばバレないわ。さあメリス、酒樽を持っておいでなさい。あまり揺らすとお酒の品質が変わってしまうからそっと運んでね」

「お、重いにゃ……」

自分より大きな酒樽を運んでいくのは、黒のワンピースを着た赤毛の少女。よほど慌てているのか、こちらには目もくれずに走り去ってしまう。

その後ろから悠然と現れたのは。

「あらエリーゼ様？　それにレンちゃんお久しぶり。元気してた？」

「アシェンディア!?」

女豹さながらの黄金色の双眸に、真紅の髪をなびかせた妖艶な悪魔。

炎の将魔アシェンディア――人間世界にも数々の逸話を残している伝説の大悪魔が、目の前の通路からひょっこりと姿を現した。

〝世界を焼きつくす業火。お前に真の法術というものを教えてやろう〟

ガリア大炎山の戦い。

初めての死闘、初めての悪魔との戦いだったからこそ、あの時に受けた炎の痛みは今も身体の奥深くで覚えている。

「やーねー、そんな緊張した顔しちゃって」
艶のある唇に指先をそっと這わせてアシェンディアが怪しく笑う。
「エリーゼ様とルルがついてるんだもの。今日は魔王様への謁見でしょう？　客人であるあなたにイタズラなんて考えないわよ」
「……信じていいのか？」
「もちろん。今日は私もお花見なの。メリス、お酒運んでおいてね」
「は、はいにゃぁ！」
使い魔である少女が酒樽を抱えて通路を走り去っていく。
「んー。でもレンちゃん、精悍な表情するようになったじゃない？」
無造作に顔を覗きこんでくる大悪魔。
「な、何だよ……」
「あはは可愛い。ねえレンちゃん、私と一緒にお花見はどう？　ルル、レンちゃん借りてもいいかしら。どんな冒険をしてきたのか興味あるわ」
「ダメです」
「相変わらず堅い女ねぇ」
アシェンディアが大げさに頬を膨らませる仕草。
「でも残念だわ。せっかく古花咲夜が二百年に一度の狂い咲きを見せているのに。冥界の

空が桜の花びらで埋めつくされる絶世の光景、素晴らしいわよ。美味しいお酒もたくさん用意してるんだから」

「それなら私がご一緒しますわ」

「フィア先輩!?」

「まあまあレン。これも見識を広めるための勉強です」

「……勉強？」

「ええ。冥界に天使が足を踏み入れるなんて中々できることではありません。女神レスフレーゼ様に仕える者として、私には冥界を偵察する義務がありますの」

珍しくも真剣極まりない表情のフィア。

「それ本当？」

「もちろんですわ。ほら私の真剣な目を見てください」

「……本音は？」

「お酒が飲みたいからです」

「二秒も我慢できずに暴露した!?」

薄々と予想はついていたのだ。

アシェンディアの使い魔が運んできた酒樽を見た瞬間、フィアの目がもう完全に獲物を狙う肉食獣の目つきになっていた。

「じゃあ決まりね。エリーゼ様、お仲間を借りていくわよ」
「軽く杯を交わしたら戻ってきますわ」
ウィンク一つを残し、アシェンディアと並んで別方向へと歩いていってしまう大天使。
その姿がやがて霞の中へ溶けていくように見えなくなる。
「なあ、エリーゼいいのか？」
「……うーん」
無言で天井を見上げるエリーゼ。しきりに眉をひそめて何か考え事をしている様子だったが、突然にルルの手を放して声を張りあげた。
「ずーるーいー！　キリシェとフィアだけ勝手に遊びに行っちゃって。アタシも久しぶりの魔王宮なんだからいろいろ探検したいもん。今さら魔王に会ったってちっとも嬉しくないし。ってわけでレン後はよろしく！」
「えぇっ!?　ま、待てよエリーゼ、さすがに三人いなくなるのは――」
「ルルがいるから平気だよ」
「あ、逃げるな！」
慌てて手を伸ばしたが時すでに遅し。
あっという間にレンの手をすり抜けて、歩いてきた方の通路を逆走していってしまった。
旅団で残されたのは自分一人だけ。あとは魔王宮で出会ったばかりの家政婦長ルル、そ

れに黄金の夜明け（ヴィーナス・ライト）のダンとミスティだけだ。
「おいおい。いいのかボウズ？　嬢ちゃんたち悪魔に誘われていっちまったぞ」
「たぶん二人は心配ないけど、他にも心配があって……」
キリシェとフィアならば悪魔の本拠地でも心配いらないだろう。むしろ冷静に考えるなら、残された自分たちの方が不安だ。
……アシェンディアは襲ってこないと言ってたけど。
……他の五大災（ごだいさい）や魔王、それに配下の悪魔たちがどういう奴（やつ）かわからないし。
ガリア大炎山（えんざん）では次々とアシェンディアの配下に襲われ、聖地（せいち）カナンでも魅亞（ミア）から一方的に攻撃を受けたのは記憶に新しい。高位存在と呼ばれる竜、天使、悪魔の中で、悪魔がもっとも好戦的であるのは間違いないはずなのだ。
「悪魔たちへの牽制（けんせい）ですよ」
「え？」
「あの三人、よほどあなたを大事に想（おも）っているようですね」
家政婦長（ハウスキーパー）ルルがふっと楽しげな笑み。
「わかりませんか？　あなたが一度戦った因縁のあるアシェンディアと魅亞を、それぞれ竜姫と大天使（フィア）が様子見に行ったのです。そしてエリーゼ様は、残りの将魔と配下たちがその二人と衝突しないよう念を押すために向かわれたのでしょうね」

「……三人が？」
「ええ。もちろんレン様の心配どおり今の状況が不安というのは事実です。たとえば魅亞のように好戦的な悪魔が、腕試しにいきなりレン様を襲いにかかることもできてしまう。とはいえ――」
　ロングスカートの端をつまんで再びお辞儀するルル。
「ご安心ください。私にレン様を任せてくださったエリーゼ様のご期待、裏切るつもりはありません。五大災であってもレン様には指一本、触れさせませんから」
「……残り三体の大悪魔か」
「二体です」
「あれ、二体？　でも炎の将魔と波の将魔がいて残りは……」
　指を折って数える。
　数が合わない？　そのことをルルに確認するかどうか悩んだのも束の間。
「この先には魔王がいるということですね」
　おそらくは初めてだろう。この場にいる四人の最後尾に立つ白髪の少女が、初めて自分から声を発していた。
「団長、いよいよ魔王だそうです。きっと怖いです。どうしましょう」
「どうって……そ、そりゃあお前、心配すんな。この俺がいるだろうが！　魔王だろうが

何だろうが俺の正義の拳で一撃よ」

「足ふるえています」

「う、うっせぇ！　お前、さてはそれが言いたかっただけだろ!?」

怒って拳を振り上げるダンと、そそくさと逃げていくミスティ。

怖いのか余裕なのかも区別のつかない二人のやりとりを後目に、家政婦長の悪魔が通路を奥へと歩きだす。

「レン様、なかなか面白い旅団をお連れになりましたね」

「……そ、そうかな？」

「ええ。後ろのお二人についてはまだ魔王様に報告していないのですが、まあ謁見のついでで良いでしょう。もうすぐです」

2

うっすらと虚空を漂う黒い霧――

眩いシャンデリアから降りそそぐ光もまた黒霧によって阻まれることで、部屋のなかは常に薄暗く、そして肌寒さを覚える微かな冷気に満ちていた。

徒競走ができるほど広大な長方形の広間。

縦長に設計された部屋の中心には分厚い絨毯が敷かれ、来客を誘うように部屋の奥へと

まっすぐ延びている。
「こちらが魔王宮リーゼルシャット『降魔の蓋』でございます」
広間の中程で足を止めるルル。
「お待たせしました魔王様。地上からの客人をお連れしました」
「……」
レンたちが息すら忘れて見上げるなか、玉座に腰かけるソレがゆっくりと動いた。
――悪魔。
暗黒の吹き溜まりが集結したかのような暗色の体躯。
全身の体表は頭部から足先にいたるまで硬質の鎧と化していて、頭部からは長短それぞれ二対の角が生えている。
さらには玉座に収まりきらない巨大な漆黒の尾に、冷たい白の瞳。
まさしく……
玉座に腰かける悪魔はまさしく、人間が「悪魔」という単語において想像するであろう概念の具現そのものだった。
「やべぇぇっっ！　マジで本物の魔王じゃねえかっ!?」
声を裏返らせてダンが後ずさり。
「こ、怖くねぇよ!?　ま、まま任せておけミスティ。どんな恐ろしい野郎だろうが、俺の

家族（ファミリー）は俺が守っ……守っ……れるかな!?」

「足ふるえてます」

「俺だって必死なんだよ！」

白髪（はくはつ）の少女の盾として無理やり声を振りしぼるダン。

「……ずいぶんと賑（にぎ）やかな人間だな」

玉座の悪魔が、頬杖（ほおづえ）をついた姿勢でそう口にした。

こだまする重低音。おそらくは発声器官の仕組みからして人間とは違うのだろう。声の響き方が、羽虫が羽を振るわせた時の振動に近い。

「魔王様、お連れした本命はこちらですわ」

ルルの伸ばした手が背中にふれる。

「どうぞレン様」

「え……っと、進んでいいの？」

「はい。どうぞ玉座までお進みください。私はこちらに控えています」

背中を押され、レンは小刻みに足を前へと進めた。

〝見た目だけ凶悪なの。無駄にデカいし牙（きば）とか爪（つめ）とかあるし。地上に出てきたら間違いなく怪物扱いされるね〟

……エリーゼの嘘つき。

……これのどこが「見た目だけ」だよ。

玉座に腰かける悪魔を見上げて歩を進める。気づかれぬよう最小限の動きで、レンは手のひらに浮かんだ汗を上着の袖で拭いとった。

問答無用の圧力。

こうして一歩近づくたびに、魔王の眼光に射すくめられて足が止まりそうになる。

「人間よ。貴様のことはアシェンディアから報告を受けている」

頬杖をついた姿勢で、悪魔。

「余が魔王ヴェルサレムである。魔王、悪魔、ヴェルサレム。好きに呼べ。余と貴様との間に主従関係がない以上、呼称を強制する気はない。また媚びへつらう必要もない」

「……どうも」

「まずはよく来たというべきか。人間がこの地下世界を訪れるのは、そう簡単なことではあるまい？　裏返せばそれだけの目的があったということになるが」

魔王ヴェルサレムが曲がりくねった指先を突きつける。

その指し示した先は、レンの右手だった。

〝光彩異色の少女が手を伸ばす。その華奢な指先が自分の右手を取って、そのまま優しく引き寄せて――〟

〝女神の接吻〟

〝手の甲にふれる一瞬の温もりを感じた直後、手の甲に熾天色の光が宿った〟

天界の女神レスフレーゼから授与された法印。

魔王が指さしたのは紛れもなく、女神の唇が触れた箇所だった。

「かつての盟友エルラインの頼みにより、余は、女神と竜帝とで終焉の島を封じることとした。法印がそれを解除する唯一の鍵となることは知っていよう？」

「――――」

無言で頷く。

「貴様らが世界録と呼ぶ物がはたして存在するのか。存在していたとして、本当に終焉の島に隠されているのか。それは余にとっては些細なことだ。世界録に記されている事柄についても同じこと。知りたいと思うものではない」

「というと？」

「悪魔の頭領として危惧しているのは、むしろ終焉の島の開放そのものだ。終焉戦争の後、あの剣帝がわざわざ封印を願いでた場所。それを開ける行為に懸念を覚えるのは至極当然

であろう？」

「……同じことを天界の女神から聞いてます」

〝終焉戦争の場所には、もう誰にも入れないようにしてくれ。だけど……〟

〝一つだけ例外がある〟

〝もしもこの何十年、何百年先に、俺に代わって世界のすべてを託せるような人間が現れた時だけは、封印を解くための法印を託してやってほしい〟

エルラインが残した言葉。

閉じられた扉の先に何があるのか。エルライン亡き今は誰にもわからない。

「さて本題だ。法印所持者たる魔王の立場として、余は貴様を審判する権利を持つ。貴様が法印を欲するというのなら」

「……勝負か？」

竜帝カルラとの決闘経験上、魔王との決戦も覚悟はしていたことだ。そうレンが思いめぐらせていたところに。

「取引だ」

「え？」

「貴様は法印を欲する。その対価として余が望むモノを用意してもらおう。『対価と要求』こそ悪魔独自の審判。よもや女神のように回りくどい応答や、竜帝のような原始的な力の選別だとでも思ったか」

「……そうなの？」

「あー、まあ昔話で聞く話だな。家の財産すべてを宝石に替えて、それ全部と引き替えに、村を襲った敵国の王様への復讐を悪魔に交渉したとか」

うんうんと頷くのは後ろのダンだった。

「よくわかんねぇが、要するにボウズが何か欲しいならそれなりの物を用意しろってことだろ？　魔王サマの対価ってのがちっとばかし怖いけどな」

「そうだ。奥の人間の方がわかっているではないか」

低い笑い声をもらす魔王ヴェルサレムが、再びその爪先をこちらに向ける。

どんな難題を押しつけられるのか……

魔王の欲しがるような物だ。ただの財宝というわけではないだろう。たとえば地上に戻らなければ入手不可能な物も考えられる。

「わかった。とにかく言ってくれ」

「威勢は上々。ならば貴様がいま背中に結わえているその剣だ。霊剣ヴィエルジュを渡すがいい」

「……はい？」
「霊剣ヴィエルジュ、その剣で間違いあるまい」
「そ、そうじゃなくて！　ええと待って！　なんでこの剣なのさ？」
両手を振って背中の剣を必死に隠す。
「何も不思議ではない。あの剣帝エルラインが、余の姉である先代魔王エリーゼを破った剣となれば因縁深きもの。さらに冥界でも精霊具の研究を進めているところでな、その剣を手に入れれば精霊具の研究は飛躍的に前進する」
「だ、か、ら、違うんだって！　これは俺が……借り物だけど……使ってる大事な剣なんだって。これを渡したら俺が戦えなくなるし」
「悪魔の宝刀をくれてやろう。切れ味だけならば精霊剣をも凌駕するぞ」
「……だけど」
「ただし呪われた武器だから、一振りごとに寿命が十年縮むことを覚悟しろ」
「覚悟してたまるか!?」
大きく息を吸って深呼吸。心を落ちつかせて状況を整理した。法印は必ず手に入れなければならないが、かといって霊剣ヴィエルジュも渡せない。
「別の精霊具とかを見つけてきたら？」
「法印の価値と釣り合う精霊具がそうそう存在すると思うか？」

「……そ、そっか。なら別の物で頼むよ。できれば俺が何とかできる範囲で」
「ふむ」
顎に手をあてて魔王が黙考。
「ならば法印は渡すかわりに、余の配下になるというのはどうだ。ちょうど人間の部下を欲していたところだ。貴様には一生この魔王宮で働いてもらう」
「一生って長すぎる!?」
「貴様が頷きさえすれば今すぐ法印が手に入るぞ」
「頷けないから困ってんだよ……」
嫌な予感がしてきた。さすがは悪魔の首領。竜帝カルラも説得には手を焼いたが、この魔王はカルラとまた違った厄介な相手だ。
「もっと別の」
「では地上の楽園スピカ島を丸々一つ――」
「俺のじゃないし」
「ならば百年前に絶滅した幻の煉獄鳥の雛を三羽――」
「絶滅したって自分で言ってるじゃねえか！」
「冥界の砂丘を泳ぐ砂クジラ。砂から離れると死んでしまうから気をつけろ」
「……どう運べっていうのさ」

最後は声を張る力も残ってなかった。
これはダメだ。あと百回頼み事を聞いても達成できる気がしない。
「なあ、もう少し手加減してくれよ……」
「駄目だ」
即答する魔王。
「残念だったな人間。貴様には資格が無かったらしい。悪魔法印は諦めろ」
「そんな！」
「我が対価を満たすことのできぬ人間に法印はやらん」
「アンタねぇ……」
幼い。
だが妙に迫力のある声が、天井から聞こえてきた。
「さっさと法印よこせって言ってんのよ。この愚弟がっ！」
メキッと響きわたる鈍い音。
それは、天井から降ってきたエリーゼの踵落としが魔王の頭にめりこんだ音だった。
「ぐおぉぉぉぉっ!?　余の頭が陥没した!?」
「アンタねぇ、調子乗るのもいい加減にしなさいよ……」
「ね、ねねね姉ちゃん!?」

自分の半分にも満たない背丈の幼女を前に、魔王ヴェルサレムが玉座からずりおちた。
四つんばいの体勢で後ろに逃げようとしたところで。
「おい魔王」
その首筋を掴んで捕まえたのは竜の少女だった。
「さっさと法印を渡せ。でなければ魔王宮ごと消し炭にしてやる」
「キ、キリシェ!?　地上の竜姫がなぜここに！」
「なりゆき」
「姉ちゃんそれマズイって!?　おいルル、どういうことだこれは！　姉はともかく天銀竜の姫が冥界に同行しているなど聞いていないぞ！」
「ご報告が遅れました」
広間の中ほどに立つルルが、悪びれない口調でさらりと返事。
「……くっ、だが余は屈せぬぞ。たとえ姉と竜姫とに囲まれようと」
そこに近づく足音。周囲の目が一斉に集中するなか、ほんのりと顔を赤らめた金髪の大天使が、両手に酒瓶を持った姿で現れた。
「おまたせしましたわ。いやはや悪魔のお酒もバカにできませんわね。とっても素敵なお花見でした」
「天界の暴虐天使まで!?　ね、姉ちゃんどうして！」

「なりゆき、その二」
「魔王宮が壊滅するし!?」
頭を抱えて悲鳴を上げる悪魔の首領。
「あらレンってば。まだ法印を手に入れてないのですか？」
「それがさ、法印が欲しかったら取引だって話になったんだよ。それで結構な無理難題を押しつけられて弱ってて」
「まあそれはそれは。……聞き捨てなりませんわね？」
「貴様、たかだか魔王の分際で法印を出し渋るとは良い度胸だな？」
「アンタさー。自分がどういう立場なのか理解してないわけ？」
「ひぃぃぃぃっ!?」
人間なら一目で恐怖に震え上がるであろう外見の魔王が、可憐な少女たちに囲まれてガタガタと怯える光景。
「なあボウズ、どうなってんだこりゃ」
「俺には何とも……」
レンとダン、そしてミスティがぼんやりと互いの顔を見合わせるなか、たった一人ルルだけが真顔のまま魔王へと寄りそって。
「魔王様、いっそ素直に話されてしまってはいかがでしょう」

「……素直って？　あの、どういうこと？」
「はい、レン様。お恥ずかしい話になってしまうのですが」
三大姫に囲まれる魔王を指さす家政婦長。
「悪魔法印を宿した宝石、実は三十年ほど前に魔王様が無くしてしまわれまして」
「……え？　な、無くした!?」
「あとはお察しください」
無いものは譲ることはできない。
かと言ってそんなことを魔王の立場から告白するなどもってのほかで、姉であるエリーゼから何を言われるかもわからない。
「そっか。だから何とか法印を誤魔化そうとして無茶な要求を言ってきてたのか」
「……呆れて物が言えないな」
「……アンタさぁ」
「……興が冷めましたわ。アシェンディアと飲み直してきます」
深々と溜息をつくキリシェ、エリーゼ、フィア。
そんな少女たちと対照的に、黄金の夜明けの団長がなぜか満足そうに頷く姿が。
「いやいやわかるぜその気持ち。俺らの旅団じゃ珍しくないぜ？　俺も旅団の財布を何度なくしたかわからないし、妖精が秘境のど真ん中で秘境の地図なくしたり、獣人なんか手

に入れたお宝を落っことしたこともあったくらいだからな」
「だからお財布も地図もお宝もわたしが持つハメになったんです……」
言われてみれば。
レンも今になって気づいたが、ミスティが背負う荷物の方がダンよりも重そうだ。
「ご覧の有様です。団長、反省してください」
「はっはっは。いいじゃねえかミスティよ。冥界の魔王が無くし物をするんだぜ？　俺らが無くし物をしたって構いやしねぇよ」
「けれど今回の悪魔法印だけは、無くしたで済ませるわけにはいかないでしょう」
魔王の隣のルルが、真顔でこちらに視線をやった。
「そうですねレン様？」
「……ああ。さすがに今回は事情が事情だから」
悪魔法印がなければ、終焉戦争の決戦地である島に入れない。そして終焉の島に上陸できなければ世界録が手に入らないかもしれないのだ。
「法印、俺らも見つけるの手伝うから探そうよ」
「いえ。皆様はお客様です。お手を煩わせるわけにはいきません」
どこからともなく地図を取りだす家政婦長。
魔王宮の平面図です、と呟くや折りたたみ式の地図を両手に広げて。

「部下たち総出で探します。五大災とその使い魔にも手伝ってもらいましょう」
「だ、だが五大災に何と言われるか。また余の威厳が……」
「宝探しとでも言付けておきましょう。褒美に魔王宮の中庭をくれてやると言えば五大災から末席の部下まで喜びますよ」
「あの中庭を丸ごとだと⁉」
「心配いりません。どうせ飽きっぽい連中です」
地図に細かくメモを書きこみつつ、ルル。
「十年もしないうちに『もういらない』と放置するのが目に見えています。魅亞だけは中庭を自分の鍛錬場にして長居する可能性がありますが、アレも戦闘以外は残念な子ですからね。二十年くらい時間をおいて、アレはあげたのではなく貸したのだと言えばあっさり奪い返せるでしょう」
「……そうだろうか」
「ご安心を。それでは、速やかに言付けてまいります」
地図を手にして立ち上がるルル。
「私はこの場で失礼いたしますが、もうすぐ皆様のお部屋も用意できるでしょう。すぐに黒妖精が迎えに上がります。お部屋で、晩餐の時間までゆるりとおくつろぎください」
口早にそう残して、颯爽と場を後にする。

その後ろでは、最後まで非の打ち所がない彼女の立ち振る舞いに、ダンが感嘆の溜息をこぼしていた。

「いやぁ、上品な家政婦の姉ちゃんだな。俺の想像してた悪魔とだいぶ印象が違うんだが。ボウズはどうよ？」

「……同じく。それに優秀な参謀みたいな雰囲気もあるし」

「そりゃあ魔王宮の最古参の悪魔だもん」

頭の後ろに手を回しながら、エリーゼ。

「氷の将魔ルルフォニカは五大災の中でも特別なの。誰よりも昔から魔王宮に住んでて歴代魔王の相談役にもなってるからね。本人は家政婦長ですって言い張るけど」

「五大災!?」

「あれ、まだ聞いてなかったんだ？」

そう言いながらも、こちらが驚く様子にエリーゼは満足げな表情だ。

……そういえば五大災があと二体って。

……出てきてたのが炎の将魔と波の将魔だから、数が合わないとは思ってたけど。

氷の将魔がルル本人だからそれを除いていた。あの時の何気ない一言が彼女なりのヒントのつもりだったのだろう。

「意外とイタズラ好きなのかな……」

「イタズラ好きは悪魔の共通事項だよ」
「ああそっか。でもエリーゼさ、ずいぶんルルと仲いいんだな？」
「っていうと？」
「だって五大災って、元々は魔王候補だった大悪魔だろ」
〝五大災（ソイツら）って元魔王候補だったんだけど、魔王選抜でアタシが勝って配下にした〟
かつては冥界（めいかい）の覇（は）を競って戦った悪魔同士のはず。
その二人が……エリーゼがルルを見るなり抱きついたり、ルルもエリーゼの頭を撫（な）でてやるほどに、ああも仲良くなれるものなのだろうか。
「魔王戴冠の儀における慣習のようなものだ」
そう答えたのは、玉座に腰かけた魔王ヴェルサレムその人だった。
「五大災のうち四体は余の姉と魔王の座をかけて争ったが、氷の将魔（ルル）は違う。奴（やつ）は最初から姉こそが魔王にふさわしいと決めていた。そのうえで姉と戦ったのも最後の『独り立ち』の承認のためだったというわけだ」
「それでアタシは晴れて魔王になったってわけ」
「決まりなのか？」

「ううん、全然」
あっさりと首を横にふる先代魔王。
「でもアタシのさらに前の魔王にもそうしてたんだって。ルルってばアタシが生まれる前からずっと魔王宮の家政婦長だし」
「……色々と年季が違うな」
「アタシもルルには面倒見てもらったなぁ。まあそれはさておき」
ふっと口を閉じたエリーゼが身をひるがえす。
唇をつりあげた不敵な微笑みで。
「ねーねーフィア？　手に持ってるお酒の瓶一つちょうだい」
「はいどうぞ」
「ありがと。――――で。そこの愚弟！　偉そうに椅子に座ってないでアンタも法印探してきなさい！」
「ぬおぁっ!?」
エリーゼの投げた酒瓶が、再び魔王の頭を直撃した。

3

『ニンゲンー、ニンゲンー、餌の時間だぞー』

呼び鈴に応じて部屋の扉を開いた先には、宙を浮遊する妖精が待っていた。
黒妖精――透きとおった羽に黒の紋様が入った妖精だ。体長は成体で六十センチほど。大妖精には及ばないが、浮遊妖精のなかでは最大級の種と言われている。
……地上じゃ絶滅危惧種とまで言われてるのに。
……まさか地上から冥界に移住してたなんて大発見だよ。
魔王宮では四千体以上の黒妖精が、ルルの指揮のもと家政婦として働いているらしい。
黒妖精は安全な住処が約束され、悪魔側は便利な従者を手に入れた。理想的な共存関係というところだろう。
『餌の用意ができたぞー』
「……餌って？」
『晩餐とも言うぞー。アタイには違いがわからないぞー』
エプロン姿でうんうんと頷く黒妖精。
『ついてこいー』
「案内してくれるんだ？　ありがとな」
無人の通路を渡っていく黒妖精を追いかける。その途中でキリシェやフィアとも合流しながら、レンは魔王宮の内部を進んでいった。
魔王宮『朱怨の高楼』。

晩餐会場というイメージとは裏腹に、いかにも食欲を失いかねない青カビ色の絨毯が敷かれた大広間。中央に配置されたテーブルには目の眩む黄金のテーブルクロスが掛けられ、三十席以上の椅子が用意されていた。

「あ、レンが来た！　こっちこっち！」

テーブルの中央席に座るエリーゼが大きく手を振ってくる。

「まあエリーゼってば。そこは魔王ヴェルサレムの席では？」

「いいのいいの。魔王はご飯抜きで法印探ししてるもん。法印無くした張本人だから反省してもらわないとね」

バシバシと自分の隣の席を叩く魔王の姉。

「ねね、レン隣おいでよ。魔王の隣の席なんて、五大災の腹心の部下だって座れないよ。とっても贅沢な席なんだから」

「……俺、緊張に弱いからダメだってば」

「いけませんよエリーゼ様。レン様の席は隣ではなくこちらでございます」

そう言って静かに椅子を引く家政婦長の少女。

最古参の五大災『氷の将魔』ルルフォニカ――という正体を聞いてしまうとつい緊張してしまいたくなるが、当のルルは素知らぬ顔だ。

「せっかく冥界に来ていただいたのですから。レン様には魔王宮の悪魔たちとじっくり親

睦を深めてもらいたいと思います」

　中央のエリーゼから離れた位置に用意された席。そこには確かに「レン様」と書かれた席札が用意されている。

「俺ここか。それで、あと二人って……」

「あら？　誰かと思ったらレンちゃんが私の隣なのね。嬉しいわぁ」

「アシェンディア!?」

　ふらりと会場に現れた真紅の大悪魔。

「そう警戒されるのは心外ね。こう見えても私は美食家で通ってるんだから。冥界の料理、レンちゃんに教えてあげても良くてよ。どうせ気になってるんでしょ？」

「そ、それはまあ」

　冥界の晩餐と言われたレンがすぐに思いだしたものが、エリーゼの作った魔界カレーだ。あれを見るかぎり人間と悪魔の食文化が大幅に違うことは容易に想像がつく。

「……じゃあ頼むよ」

「そうこなくっちゃ。仲良くしましょ？」

　優雅な仕草で腰かけるアシェンディア。

　彼女が自分の右隣の席となると、残る左隣の席はもしかして魅亞？　そう思って覗いた席札には、レンが初めて聞く悪魔の名前があった。

「……『バオ』？　誰だろ。そんな名前の悪魔いたっけ」
「待てルル、これはどういうことだ！」
怒号が晩餐会場を振るわせる。
席札を指さして、会場の責任者であるルルへと詰め寄るのは魅亞だった。
「このオレをさしおいてアシェンディアとバオだと？　なぜだ。一度拳を交わした相手として、オレこそがレンの隣にふさわしいのではないのか!?」
「逆です。レン様と面識があるのなら、ここで新たに親睦を深める必要もないでしょう」
「ではなぜアシェンディアが？」
「彼女は冥界きっての料理通ですから。冥界の食事作法も完璧ですし、料理にも詳しい。レン様の相手に最適な選択です」
「くっ……」
「そう肩を落とさずに。魅亞、あなたは向こうの席ですよ」
ルルが指さしたのは自分と対角線上の席。離れた席に座る黄金の夜明けの二人の、対面にあたる席だった。
「……お、おいミスティ。悪魔の晩餐って何が出てくるんだ……とんでもないゲテモノが出てきたらどうするよ」
「問題ありません。わたしは食事要りませんので、団長に全部あげます」

「それが問題だっていうんだよ!?」
ミスティに泣きつく壮年の男の姿。
それを遠目から観察するようにジロジロと見つめる魅亞。
「あの二人か？」
「ええ。ああ見えて地上の冒険に関しては経験豊富なようです。話を聞くのも勉強になりますよ。口下手のあなたも、知人になったつもりで話しかけてみてください」
「だ、誰が口下手だ」
焦ったように背を向けて歩きだす魅亞。
「魅亞ちゃんてば相変わらずねえ。五大災たるもの気品は大事にしてほしいわぁ」
「……このバオっていうのは？」
「ああ、それなら」
右隣に座るアシェンディアが、その艶やかな唇をきゅっとつり上げた。
「もうレンちゃんの隣に座ってるじゃない」
「え……って、うわぁぁぁっっっっ!?」
あまりのことに椅子から落ちかける。自分の左隣。直前まで空席だったはずの椅子に、見たこともない悪魔が鎮座していたのだ。
『――――』

奇妙な白黒の仮面をつけた大柄な悪魔。
藁のような素材を編んだ外套で全身をすっぽりと覆っているため、その内側の身体がどうなっているかもわからない。
不気味？
いや、もはや不気味なのかどうかもわからない理解不能の存在だ。
『……オォッ……オォッ……』
仮面のスキマから漏れるのは声か、それとも呼吸音か。
この不思議な悪魔がバオ？
『――――』
「え？　あ、あの。ええと……どうも……」
『……オッ……オォ……』
「あらバオったら。レンちゃんのこと気に入ったのかしら」
レンを見下ろす悪魔を見てアシェンディアが可笑しそうに頬杖をつく。
「五大災『呪の将魔』バオ。最後の一人は魔王宮の外に出てるから、レンちゃんが会える五大災だとバオが最後ね」
「……呪の将魔」
「地上に出たことがないから人間には知られてないでしょ？」

黒妖精からワインボトルを受け取るアシェンディア。
乳白色の酒をグラスに注ぎながら。
「割と新入りさんよ。一つ前の魔王戴冠の儀って本当は私、魅亞、エリーゼ、ルル、不在の将魔の五人で行われるはずだったんだけど、それが突然、儀式の間に行ってみたら誰も知らない悪魔が待ってたのよね。アレにはちょっと驚いたわ」
「それがこの……」
「そ。後のバオってわけ。人間の前に姿を現すなんてエルラインの魔王宮襲撃以来かしら。もしかしたら世界録にバオとの戦いも書いてあったりしてね」
そして厨房から次々と現れる黒妖精。
レンをここに案内した黒妖精は家政婦姿だったが、この場を浮遊する黒妖精は可愛らしいコック帽と調理服を着用済みだ。
『餌だぞー』
『前菜とも言うぞー。アタイには違いがわからないけどなー』
小さな身体で、一体が一枚ずつ料理の載った皿を運んでくる。
『ミドラータ呪海の海の幸のサラダ。シェフの気まぐれソースでどうぞだぞー』
どう見ても黴にしか見えない斑点の浮いた真っ白な海藻に、蜘蛛のような姿の甲殻類がドレッシングで和えられた海藻サラダ。

「……盛りつけは人間の料理みたいなんだな。フォークとナイフもあるし」
「人間から取り入れた習慣よ。でも悪魔は個体差が大きいから、フォークを持てない個体も多い。だから誰も食べ方は気にしないわ。手づかみだろうが、お皿に口を近づけようが構わない。気楽でしょう？」
食前酒に口をつける炎の将魔（アシェンディア）。
「この晩餐（ばんさん）に作法があるとすれば、それは『出された物は残さず食べること』かしら。もちろんバオみたいに綺麗（きれい）に食べる必要はないけれど」
「うそ!?……待った、どうなってんの？」
一瞬で空になった前菜（オードブル）の皿。
サラダとして盛りつけられた海草も不思議な甲殻類もそうだが、味付けのドレッシングさえ一滴も残らず綺麗に消滅していたのだ。
「いつ食べたのさ。ていうか仮面つけててどうやって!?」
「それはバオに聞いてみなさいな」
『……オォッ……オッ……』
耳を澄ませても、聞こえてくるのは理解不能の呼吸音のみ。
とはいえアシェンディアはバオの思考を理解している節があるから、何か一定のリズムか法則があるのかもしれないが。

「でもまずは目の前の料理か……」
味付けは？
いや、それよりも人間が食べて平気かどうかも疑わしい。
「そんな恐る恐るフォークで突かずとも平気よ」
炎の大悪魔が愉快そうに肩をふるわせる。
「この海藻は冥界の魚たちも好物の海月藻。熱湯で茹でることで甘い香りを放つから海の果実とも言われてるわ。添えられているのは八足エビ。これは逆に淡泊な味わいだから海藻の味わいの引き立て役でしょうね。ドレッシングは……うん、これは地上の柑橘類の果汁を数滴入れてある。海の潮臭さを消すためね。海月藻の甘い香りを酸味で引き締める意味でもいい選択だわ」
まだ口をつけてもいないのに、一目で前菜の構成がわかってしまったらしい。
「ほらレンちゃん？」
「じゃ、じゃあ一口……」
海藻をフォークに巻きつけて口に運ぶ。
「どうかしら？」
「……おいしい。……って、ホントにおいしい!?」
口に入れたと同時に広がる強烈な潮の香り。

けれどアシェンディアの説明のとおり柑橘の果汁でしっかりと臭みが抜けて、濃厚な海の味わいだけが強調されている。

見た目が怖い八足エビにいたっては、地上で食べる海老と何一つ変わらない。むしろ、身が引き締まっている分、歯ごたえはこちらの方が上かもしれないと思えるほどだ。

ほのかに感じる隠し味は酢だろうか。サラダそのものを軽やかな味わいに仕立てて、まさに前菜にふさわしい。

『人面魚のスープだぞー』

続いて運ばれてきたのは、深皿に入った緑色のスープ。

『客人には特別に尾頭付きだぞー。アタイには尾頭の意味がわからないけどなー』

「うっ……これはまた不気味な一品を……」

「まだここからよ。出された食事は全部食べるのが作法だから、これくらいで音を上げたら後が持たないわ。ほら今日のコース」

「多っ!?　なんだよこれ、前菜からデザートまで二十皿もある！」

受け取ったコース表を見て思わず悲鳴。

「主菜だけで十皿もあるんだけど……」

「うろたえてる暇はないわよ？　ほら、もう次の皿が来た」

「だから早いって！」

みるみるテーブルを埋めつくしていく冥界料理を前に、レンは早くも悲鳴を上げた。

二時間後。

「もう無理……食べれない。動けない……」

せっせと食後の紅茶を用意する黒妖精たちをぼんやりと見つめながら、レンはテーブルに突っ伏していた。

「エルラインもそうだったけど、人間は本当に小食ねえ？」

食後のお茶菓子をつまむアシェンディア。

彼女の前には空になったワインボトルが積み重なって塔になっている。

「……ずるい。俺にだけ無理やり食べさせて、自分はお酒ばっかりかよ」

「それはあなたの仲間のフィアも同じでしょう。お酒が好きなのは天使も悪魔も似たもの同士。もっとも、好きだからといってお酒に強いとは限らないけれど」

アシェンディアが目配せ。

その先に映っていたのは、顔を真っ赤に染めて泥酔しきった魅亞の姿だった。

「……どうせ……オレは嫌われ者なんだ」

ぐすんと鼻を鳴らす褐色の悪魔。

「家族もいないし仲間もいない。配下にも煙たがられていることくらい……知ってる……

アシェンディアには沢山の配下がいて、ルルも黒妖精たちから慕われていて、バオにだって忠実な腹心がいるというのに……」

「おいおい、まあ待てや魅亞ちゃんよ」

しょんぼりと項垂れる。

その落ちこんだ肩を力一杯叩いたのは、黄金の夜明けを率いる男だった。

「いいかよく聞け。どうもお前さんは大事な物が足りてねぇ」

「……大事な物？」

「そうだ。魅亞ちゃんよ、強さだけで部下を威嚇したところで部下との絆は得られないぜ。必要なのは男気、そして心意気よ。アンタも心の底ではわかってんだろ？　そんなゴツい鎧を着たところで威厳てのは出てこないぜ？」

「……そ、それは！」

目を見開いて動揺を露わにする波の将魔。

――無類の回復力と耐久性を備えた最強の肉体。

――ならば身を守る鎧は不要のはず。

もちろんダンが魅亞の特性までを理解しているわけではあるまい。

だが歴戦の剣士の嗅覚は、魅亞の鎧に対する違和感をはっきりと嗅ぎつけていた。その鎧が、自分の身を守るものではないことに気づいたのだ。

「ゴツい鎧と剣を装備して威厳を出すっていうのは、まあ人間の王様も使う手だわ。だが俺にはわかるぜ。お前さんは葛藤してるってな。威厳も風格も、己の内からにじみ出てくるもんだ。鎧からは出てこねぇ。薄々わかってんだろ？」

「……うっ」

歯を食いしばる褐色の悪魔。

「だ、だがどうすれば……」

「まあ落ちつけ魅亞ちゃんよ、俺に任せておけ」

弱々しくふるえる肩を優しく叩くダン。

「俺の下でちぃっとばかし視野を広げてみろ。広大な世界を冒険する勇気と達成感、勝利を仲間と分かち合う喜び。それを体験すれば自然と器も大きくなる。風格もにじみ出るってもんよ。今すぐウチの旅団に入れば隊員番号五番、最高幹部として歓迎してやる」

「え？」

隣で妖精たちを眺めていた白髪の少女が、驚いたように振り返った。

「それは少し都合が……」

「どうしたミスティ。俺らは新しい家族はいつだって歓迎だぜ？」

「……いえ、何でもないです……ていうか悪魔まで勧誘しますか……」

そそくさと顔を背ける少女。

「最高幹部!?　ほ、本当か！」
　一方、興奮して立ち上がるのは魅亞だった。
「こんな俺でも入団を認めてくれるのか？」
「当たり前じゃねえか。同じ釜の飯を食った仲、それは単なる旅団の仲間じゃねえ。俺は仲間を家族と呼んでる」
「家族……」
「そうだ。それに隊員番号の五番も今だけの特別待遇だぜ？」
「……旅団が四人しかいないから。単に五番目になるだけ」
　後ろでこっそり呟くミスティ。
「わかった。では風格を出すため、お前の下で修練させてもらう」
「はっはっは。任せておけや。これでお前も俺らの家族よ。そうと決まれば乾杯だ。俺のことは団長でいいぜ」
「団長！」
　すっかり意気投合してお酒を注ぎあう二人。
「なにあれ」
「……魅亞ちゃん、本当に頭の残念な子」
『……オオッ？……』

炎の将魔（アシエンディア）と呪の将魔（バオ）の二人とともに、レンは顔を見合わせたのだった。

Record.4 ── 夜に囁く

1

青く輝く夜。

冥界の空を覆っていた業火の気流が南の地平へと沈み、かわって北から吹きこむのは、不気味なほど冷たい青の気流だった。

炎を好む魔物が灼熱の地へを身を隠し、冷気を好む魔物が跋扈する時間に――

「……夢みたいな感覚だよ」

客人用の部屋の窓から、レンは外の景色を眺めていた。

魔王宮リーゼルシャットは三方が崖に囲まれている。レンの部屋から見えるのは、底の見えない大渓谷だ。

崖の底は白霧に覆われて、そこから浮上してくるのは真っ黒い翼の悪魔たち。何をしているのか見当もつかないが、何十体という悪魔が屋敷と崖下とを行き来している。

……人間が街と街とを行き交うみたいなものかな？

……本当にここは悪魔たちの世界なんだな。

灰色の雲の中に見える雷光。

あれも地上の自然現象ではなく、大昔に魔王の座を争った大悪魔たちの戦いの余波が、今も消滅せずに残っているらしい。

「あとは悪魔法印が見つかるかどうか、か。魔王宮の中にあるといいけど」

今も黒妖精たちが総動員で屋敷を探索中のはず。これで見つからなかったら自分たちも法印探しを手伝うはめになる。

そんな光景を思い描いた矢先。

トン……

扉がノックされる音。呼び鈴があるのにそれを使わないということは、自分が寝ている場合にはそれを起こさないためという配慮だろうか。

「キリシェ？」

一人では眠れないというのが口癖の竜姫が、ここでも忍びこんできた？

「なんだよキリ――……あれ？」

「夜分遅くに申し訳ありません」

扉の向こうに立っていたのは家政婦長の悪魔ルル。この夜ふけにもかかわらず服装は家政婦のままだ。

「……どうしたんです？」
「大変お待たせしました」
一礼する青髪の少女。
「悪魔法印が見つかりましたので、そのご連絡にまいりました」
「えっ、どこに!?」
「魔王様の私室です。二百年ほど掃除をしていなかったらしく、その積もりに積もった埃の中に埋もれていたそうです」
「……無事に見つかって何より」
その場で脱力して膝をつきかけた。無くし物が魔王の私室から見つかるという報告はもちろんだが、その無くなった理由があまりに悲しすぎる。
「ということにしておいてください」
「ん？」
「部屋から見つかったのは本当ですが、無くしたのではなく魔王様が隠していただけです」
「……どういう意味？」
「その説明のために参りました」
通路へと手招きする氷の将魔ルルフォニカ。
「さあどうぞ偽英勇レン。魔王ヴェルサレム様がお待ちです」

謁見の間『降魔の蓋』――

初めて来た時と変わらぬ冷気と黒霧とに包まれた広間。その奥に、玉座に頬杖をついて自分を見下ろす悪魔の姿があった。

「来たか」

魔王ヴェルサレム。

右手に握っているのは円形にカットされた水晶。一点の濁りもない無色の宝石の中心に、紫色の光を放つ物体が透けて見える。

「……それは！」

「そう、これが魔王法印。終焉の島を開く鍵となる力だ」

ゆっくりと立ち上がる。

配下であるルルに向かって小さく目配せして、悪魔の首領が背を向けた。

「ついてこい。貴様が法印を欲するのであれば」

そして姿を消す。

玉座のさらに奥にある扉の向こうへと。

「魔王様もああ見えて苦労されているのです。エリーゼ様の前で及び腰なのも、先代魔王を敬おうという気持ちの表れ……本当はとても仲の良い姉弟なのです」

「ルル？」

「お願いがございます」

この少女が頭を下げる仕草を今日だけで何度見たことだろう。

けれど今は「違う」とはっきりわかる。家政婦長としての形式上の礼儀ではなく、その真っ赤な双眸には情熱にも似た感情が灯っていた。

「どうか魔王様におつきあいください。これは、あの方なりの決意の表れなのです」

2

吹きすさぶ夜の風。

渦巻く気流から叩きつけるように吹く突風が砂を巻き上げ、宙へと還っていく。

――幽玄なる決闘場。

舞台の中心には真っ白い鬼火。

足下の岩盤は、幾星霜を重ねたことによる風化と、過酷な戦いの余波によって蜘蛛の巣状にひび割れており、その隙間からは鬼火と同色の光がにじみ出ている。

「降魔の戦盤」

揺れる鬼火を背に、魔王ヴェルサレムが振り返る。

「魔王戴冠の儀に際し、魔王候補者たちが集う由緒正しき地だ。かつて余の姉エリーゼも

ここで五大災と戦い、そして魔王の座に就いた」
左手に杖。
そして右手に悪魔法印の封じられた宝石を握りしめた冥界の覇者。
「人間よ。戦で勝利を欲する時に、至高の戦術は何だと思う？」
その言葉の意味が――
魔王が言葉にこめた真意を、レンはすぐには理解できなかった。
「答えは『平和』だ」
こちらの返答を待たずに魔王ヴェルサレムは言葉を続けた。
「戦争をしかける為に偽りの平和を育んで敵を油断させる、これを越える策謀はない」
「……仮にそうだとして、何だっていうのさ」
「お前は今の時代が真に平和であると思うか？」
手にした水晶を高々と掲げた魔王が、法印を透かすように下から覗きこむ。
終焉戦争から三百年。
その間、天界にも竜の渓谷にも冥界にも数多くの人間が訪れたことだろう。だが三界の統率者たちは、誰にも法印を授けはしなかった。
授ける必要がなかったからだ。
終焉戦争はもはや過去のもの。世界を脅かすものは消え去った。

「余は魔王として、冥界から地上を観察し続けてきた」
「観察？」
「そう。なぜならば一つの不安を抱いていた。すなわち、この平和は意図的に作られた平和ではないかという不安をだ」
「……待った。今の時代の平和ってのは英勇の活躍で生まれたものだろ」
「貴様の主張はもっともだ」
言葉どおり魔王が首肯。
「余とて、あの男の功績に疑いを抱いているわけではない。余が言いたいのは、奴の勝ち取った平和が不自然に長すぎるのではないかということだ。奴が没して三百年。その間に奴の育んだ平和は終わり、既に仮初めの平和が取って代わっているのではないかと。余にはそう思えてならない。もっとも、生まれて百年どころか五十年にも満たぬ貴様にソレを感じとれというのも酷な話だが」
「……俺がその点で未熟なのは、アンタの言うとおりだと思うよ」
自分は人間だ。
十七年という年月など、魔王ヴェルサレムから見れば赤子同然。悪魔のように悠久なる時の経過に触れてきたわけではない。
世界の「平和」が取り替えられている——そう感じ取れる感性は、まさしく幾星霜を生

きてきた高位存在にしか持ち得ないものだろう。
「だけど、そう思ったキッカケは？」
「審門破壊。貴様も目にしたであろう」
「……沈黙機関のことか!?」
「地上側の審門が破壊される現象について余も観察を続けてきたが、十中八九、何者かの破壊行為によるものだろうな。天界でも同じ結論に至っているだろう」
仮初めの安寧。
審門の破壊は人目に触れることがなく、天界や冥界、竜の渓谷への攻撃でもない。だが目に見えない部分で世界は既に侵食されつつある。それが魔王の危惧なのだろう。
「……沈黙機関の正体には心当たりが？」
「無論。貴様も聞いてはいよう。三百年前にエルラインと終焉戦争を繰り広げた者たち。審門をああも徹底的に破壊できる者など他にいない」
魔王の予感は、バネッサ湿原に向かう街道で聞いたキリシェたちの予感とまさしく一致するものだった。
「でも、終焉戦争の残党が残っているとして、なんでこんな回りくどい真似を？　天界や冥界の審門を破壊なんてしなくても、三百年前と同じように直接攻める方が手っ取り早いんじゃないのか？」

「そう。だからこそ現在の平和は『仮初めの平和』だと余は考える。つまり奴らは何かを待っているのだ。三百年、歴史の水面下に身を潜めながらな。……だが、法印を手に入れて終焉の島に向かう者が現れたとなれば奴らも動くに違いない」

だからこそ、法印を求める者には審判が行われる。

「法印を与えるとしても、その重大な責務に怖じ気づいて逃げだされては困る。あるいは最悪、貴様が沈黙機関と呼ぶ者たちに法印を奪われるという事態だけは避けねばならぬ。それはわかるな？」

「……ああ」

「そして、これは私事だが」

言葉を句切った魔王が、その眼差しを頭上の雲へ。

「余の血族を率いるにふさわしい者かどうか。法印を揃えて終焉の島に向かう行為は予測不能の危険を孕む。それは姉とて例外ではない。法印を求める者に対し、余、直々に資格を確かめさせてもらう」

「……わかった」

降魔の戦盤と呼ばれる悪魔の聖地。

この決闘場に呼ばれた時から薄々覚悟はできていた。

昼間の騒動はすべて茶番。悪魔法印を無くしたという滑稽な虚偽さえも、他人の介入を

一切排除したこの舞台を作り上げる土台だったのだ。
「受けて立つよ。俺が勝てなきゃ悪魔法印は渡せないんだろ」
「そうだ。そして悪魔との交渉は交換条件がなくてはならぬ。余が負けたら悪魔法印を譲るのだから、貴様が負けた時にも余からの要求を一つ呑んでもらう」
「要求？　魔王宮の掃除とか？……でも、今度こそどんな条件でもやってやるよ。勝てばいいんだろ」
「よい返事だ」
大きく裂けた口の端をつり上げる魔王。
「条件を言ってくれ」
「うむ。では――」
漆黒の大悪魔が一歩前に進みでる。
そして、決闘場に響きわたる大声で宣言した。
「貴様が負けた時には、貴様には余の姉エリーゼの夫になってもらう！」
「……はい？」
「というわけだ。わかるな」
「……え？　いや、あの……？　え？　ど、どういう意味……」
「今度こそどんな条件でも呑む、そう言ったのは貴様だ」

「だから待てってば!?」

あまりに突然かつ意味不明な魔王の要求に、しばらく頭が真っ白になって完全に思考が停止してしまっていた。

「話が急展開過ぎるだろ……」

「つまりだ」

魔王が両手を広げて再び宣言。

「あの荒くれ暴力暴言至上主義の姉も、貴様のような人間に妻取られればさすがに少しは落ちついてお淑やかになるはず。余がこれ以上、先代魔王の存在に怯える必要がなくなるというわけだ。そう、これぞ至上の願い！」

「そーじゃなくて！　なんだよその夫って!?　エリーゼには言ってあるのかよ！」

「……先に言ったら八つ裂きにされるであろう？」

ビクッと小声になる魔王。

どうやら実際にその光景を想像してしまったらしい。

「今は姉には隠しておくべきだ」

「いやいや、後で言ったらもっと怒られるって……」

「魔王とて悩みはある！　冥界の平和の為にも余は負けられぬ！」

「完全に私欲じゃねえかよ!?」

「無論そのとおり。だがな」

嗤う魔王。

嘲笑でも冷笑でもなく。それはまさに、全ての悪魔の頂点に立つ者として尊厳に溢れた表情だった。

「その小癪な決意こそ、時に、世界を変革する何よりも強い起因となることを忘れるな。あの男はそうやって世界の運命を変えたのだ。天界と地上と冥界に君臨する姫たちを従え、終焉の災厄に挑んだのだからな」

〝無礼者。不浄の身で天界を穢した罪の重さ、私が教えてあげましょう〟

〝人間が。冥界を統べる妾に命令する気か？〟

〝早々に消えろ。わたしを誰だと思っている〟

「……それ、エルラインのことか？」

「そうだ。旅を始めた時もその後も、誰も奴の決意を信じようとはしなかった。同じ人間たちさえもだ」

誰にも理解されず、同志を得ることもできずに孤独な身で世界を旅した。

けれど彼は諦めなかった。その執念はやがて大天使に届き、魔王に至り、そして天銀

竜の姫さえも動かした。
「覚えておけ。あの男は一度たりとも己の目的に『正義』の盾をかざしたことはない。奴ほどに貪欲で利己的で、そしてそれに命を燃やして挑んだ者はいなかった」
「……」
「どうした。急に惚けた表情で」
「いや……アンタ、やっぱり本当はすごいんだろうなって」
雄弁に宿る確かな理。竜帝カルラとも女神レスフレーゼとも違う、永き時を生きる者の風格がそこにはあった。
「氷の将魔がアンタに従ってるの、なんかわかる気がするよ」
「伊達に貴様の何十倍と生きているわけではないということだ。そしてもう一つ。貴様に冥界の掟を教示してやろう」
手にした錫杖を振りかざす魔王ヴェルサレム。
しゃらん……と響く金属の音色。
杖の頭部に施された環と環が重なり奏でられる音が静まるのを待って。
「待たせた死戦の鴉」
降魔の戦盤の上空を旋回していた鳥が奇声を上げる。
それは、二首を持つ灰色の鴉だった。

「使い魔？」

「そうだ。余の審判にはうってつけの使い魔でな」

上空から急降下してくる使い魔めがけて魔王が水晶を放り投げる。レンが止める間もなく宙へと踊る宝石。

悪魔法印を宿したその石を、二首の怪鳥が嘴で受けとめた。

「呑みこんだ!?」

水晶を呑みこんだ怪鳥が無数の羽吹雪となって風に攫われる。レンが固唾を呑んで見つめる先で、その羽が一斉に蠢いた。

――増殖する魔獣。

羽だったものが蠢き、空を埋めつくす数の死戦の鴉へと姿を変えたのだ。

「手段は問わぬ。己の欲する物を手に入れよ」

「……それが冥界の掟だってのか？」

「そうだ。人間は、悪魔が好戦的で残虐な種族と解釈するようだが、それは正答とは言い難い。悪魔は欲深い。ゆえに我らの行動原理は常に『確実に手に入れること』。そのための手段の多くが力ずくの略奪であることは事実だがな」

奪っても、盗んでも、交換でも、あるいは交渉でもいい。

もっとも強欲な種族だからこそ、もっとも確実な入手方法を好むのだ。

「冥界では欲望の強さこそが全てを決する。さあ偽英勇、貴様の欲を知恵と力と手段とに変えて挑んでくるがいい」

魔王宮、賓客室『華炎』。

白を基調とした壁紙に、百本以上もの蝋燭を灯した豪奢なシャンデリア。床には葡萄酒色の絨毯が敷かれ、冥界に咲く稀少な香花が瑞々しく活けられている。

その部屋のソファーに寄りかかって。

「……ふぁ」

キリシェはもれかけたアクビを噛みつぶした。

「ちょうど寝ようと思ってたのに」

「まったくですわ。睡眠不足は美容の天敵ですのに」

隣のソファに腰かけるのはフィア。もう床につく直前だったのだろう。その姿は胸元が大きく開いた寝間着の格好だ。

「どういうことだエリーゼ？」

「いやぁ申し訳ない。ウチの弟ったら妙にやる気だしちゃったみたいなの。たまには魔王らしいことしたいって奮起したのかな」

テーブルを挟んだ対面に座るエリーゼ。
こちらはホットミルクの入ったティーカップを両手に握りしめている。
「ルル」
「お待たせしました。エリーゼ様のお気に入りの紅茶です」
ティーポットとカップをトレイに乗せて現れる家政婦長。
キリシェとフィアのそれぞれの手元にカップを置いて、芳香ただよう紅茶を手慣れた様子で注いでいく。
「ブラッドコールという冥界の樹の葉を乾燥させた貴重な茶葉です。竜と天使に振る舞うのは初めてですが、気に入っていただけるかと」
「ありがと。それにしても時代は変わるもんだね。三百年前はまだ人間が魔王に挑む時代だったのに、いまは魔王から人間を呼びだすだなんて。ねえルル？」
「はい。けれど私には、皆様がこの余興を黙って見ているというのが意外です。てっきり止めると思いましたのに」
悪魔法印を賭けた戦い。
魔王ヴェルサレム自らが、レンの資格を確かめるため一騎打ちを仕掛けた。
その気配を察したキリシェとフィアが様子を見に向かおうとしたところ、ルルに呼び止められたというのが今の状況だ。

「今回、戦いに『降魔の戦盤』を選んだのは魔王様のご判断です。あの場所は過去、次期魔王を選出する魔王戴冠の儀にしか使われておりません。つまり今回の戦いはそれに匹敵する重要な儀礼であると魔王様もお考えのはず。手を抜く気は無いでしょう。場合によってはレン様も無事では済みません」

　警告ともとれる氷の将魔の宣言。

　一方で、キリシェとフィアは余裕の表情で顔を見合わせて。

「好きにさせろ。レンの腕試しはカルラもしたことだ」

「かわいい子には旅をさせよと言いますわ」

「はい。でもレン様が負けた時は、魔王様の言うことを一つ聞くという勝負になっているようですが？」

　くすっ、と不敵な笑みを浮かべる氷の将魔ルルフォニカ。家政婦長の役に徹している彼女にしては珍しくも挑戦的な表情だ。

「構わん。どうせ一日配下になれとか、その程度に決まってる」

「悪魔の要求の一つや二つ安いものですわ」

　キリシェとフィアに動揺はない。二人ともあくまで淑やかな仕草でもって紅茶のカップを唇へと近づけて――

「レン様が負けたら、レン様はエリーゼ様の旦那様になるそうです」

『ぶっっ!?』

二人は、まったく同時に飲みかけのお茶を噴きだした。

「……どういうことだエリーゼ」

「……さすがの私も今のは聞き捨てなりませんわ」

目の前のテーブルを蹴り上げるや、旅団仲間である幼女へと詰め寄る二人。

『レンに手を出したら……』

「ちょっと待って、待ってってば!? アタシだって一言も聞いてないよ！ なんでレンがアタシの旦那さんになるの!?」

椅子から立ち上がるエリーゼが、恥ずかしげに声をふるわせた。

「ルル!?」

「魔王様の決定です。たとえ先代魔王という身分であろうとも、現魔王でないエリーゼ様に拒否権はありません」

しれっと答える家政婦長。

「レンが……あたしの旦那さんに?……そ、そんなことになっちゃったら……」

ほんやりと上を見つめるエリーゼ。

だがしばらくして、何かを想像したらしくポッと頬を赤らめて。

「……それも悪くないかも」

『エリーゼえええええっっっっ！』
「冗談だってば!?」
鬼気迫る表情で迫る二人に押されて、今度こそエリーゼが後ずさった。
「――さておき、そんな魔王様の余興が終わるまで時間もあるでしょう」
キリシェとフィアがこぼした紅茶を拭き終えて、家政婦長が背を向ける。
その足先が賓客室の扉側へ。
「皆様はごゆっくりおくつろぎ下さい。私は外の客人を接待してまいります」
棘の混じった言葉。
ほんのわずかに含ませた不穏な気配とその意味するところを悟り、キリシェ、フィア、エリーゼがルルへと振り返った。
「ルル、アタシらどうせ暇だから手伝うけど？」
「エリーゼ様は賓客です。客人の手を煩わせてしまっては家政婦長失格ですから」
「……そ。心配はしてないけど気をつけてね」
「ありがとうございます」
再びホットミルクに口をつけるエリーゼ。
かつての主である幼女に深々と一礼し、氷の将魔は魔王宮の通路を歩きだした。

しんと静まりかえる通路。
警備を担う魔獣たちの嗅覚から逃れ、魔王宮の住人でもある悪魔たちの目にも留まらず、一直線に「ある場所」へと進んでいく者の姿があった。
臭いも気配もない。
その姿さえ、まるでシャンデリアの光の中にとけこむように薄く朧気で……
「どちらへおいでですか？」
コツッ、と甲高い靴音を響かせて。
「客人であるあなたが真夜中に魔王宮を徘徊する理由、聞かせていただきたいですね」
家政婦長としての顔ではない。
今この場に立つのは五大災『氷の将魔』ルルフォニカ。最古参の将魔にして冥界の最大戦力に挙げられる大悪魔だ。
「もう一度聞きます。どちらへおいでですか？」
「……道に迷いました」
「そうですか。私はてっきり、審門のある中庭に向かっているところと思っていましたが。違いますかミスティ様？」
シャンデリアの輝きに照らされる白髪の少女。
「冥界の審門が砕けたと同時に冥界に侵入した旅団。疑われないとでも思いましたか？

それとも、疑われたところで白を切れば良いと踏んでいましたか？」

「……」

「冥界の審門を壊したのはあなたですね」

沈黙を保つ白髪の少女を、真っ向からルルは指さした。

――呪の将魔バオの呪い。

冥界の審門はすべて、最強の呪詛使いであるバオの呪いがかかっている。

審門に悪意をもって接近した時に発動する『咒文』、そして審門が破壊されたことを条件に発動する『憑拠』。

審門破壊の犯人にしか付着しない呪いがまとわりついている。

「絶対に剥がせない目印です。とはいえバオの呪いを二つとも浴びて平然としていられるのだから、その点は流石の耐性ですね」

「……ふしぎね」

昼間とまるで変わらぬ声で。

ミスティと名乗る少女が、小さく首をかしげる仕草。

「わたしの正体がわかっていたなら、どうしてすぐに襲ってこなかったのかしら」

「予想はできていましたが確証がありませんでした。確信するに足るだけの情報を引き出せるだけ引き出して、その結果です」

「わたしから？」
「あなたが潜伏していた旅団の人間からです」
晩餐会場で――
ダンたちの対面に波の将魔を配置したのも、すべてルルの策略だ。
「晩餐の折、魔王様には法印を探すという名目で部屋に待機していただきました。晩餐会で万が一にでもあなたが暴れた時、標的になっては一大事ですから。あとは私が聞き耳を立てて、魅亞と人間との会話を聞くだけ」
魅亞には今回の作戦は話していない。
だからこそルルは極めて自然な流れで情報を収集することができた。
「黄金の夜明けという旅団はとても珍しい。人間はダンという剣士だけ。あとはリンという獣人にシルクという大妖精だそうですね。人間以外の種族が他にもいるわけですから、あなたが潜むのにはとても都合のいい旅団でしょう」
「……」
「旅団に潜りこむというのも上手い手法でした。秘境を冒険する人間たちの旅団は、あなたが破壊活動をするためには格好の潜伏場所になる。ただし今回は焦りましたね？」
無言を保つミスティ。
それが肯定という答えであることを理解し、氷の将魔は言葉を続けた。

「あなたの使命はバネッサ湿原にある審門の破壊だった。そして湿原に着くなり遭難したフリをして一人で審門へと到着。審門の破壊を開始したが、ここで誤算がありました。行方不明になったあなたの後を追って、人間が審門の近くに来てしまったのです」

「……それが何の誤算だと？」

「本当の姿を見られてしまいそうになった。終焉戦争でわたしたちと戦ったあの光り輝く姿を目撃されそうになったのでしょう？　だからあなたは審門への攻撃を中断した。結果、審門はかろうじて全壊を免れた」

そしてさらに誤算は続いた。

「ダンという剣士に本当の姿を目撃される前に、あなたは人間の姿に戻ろうとした。その時に草むらにでも隠れたのでしょう？　けれど場を離れたわずかな間に、剣士の方が審門に近づいて冥界に転移してしまった」

結果、二人そろって冥界を探索することになった。

「以上、晩餐会場で人間が喋っていた内容から私が組み立てた推測です。あとは、レン様たちが冥界に来る時期と重なったのも狙い通りですか？　うまくタイミングを重ねることはできたでしょうからね」

覇都エルメキアで天界の審門が破壊されていたことも、エリーゼから話を聞いている。旅団「再来の騎士」の動きも監視していたことだろう。

「……」

「沈黙は結構ですが、そろそろ勝手な真似は謹んでもらいます。審門のある中庭に招待するつもりはありません。もしも無理に通ろうというのなら――」

生まれる冷気。

氷の将魔の足下が凍りつき、氷の蔓がみるみる通路を侵食していく。

「排除します」

「小賢しい悪魔が」

白髪の少女が、煩わしそうに視線をそらした。

「……己の幸運に感謝するといい。ここでわたしが退くのはお前との戦いを避けることが理由ではない。わたしたちがここで戦えば、団長を巻きこんでしまうから」

「なんですって？」

「黄金の夜明けには手を出すな。あの人間は……何も知らない」

吐き捨てるような口調。

それは、白髪の少女が見せた初めての感情らしい感情だった。

「黄金の夜明けという旅団は、あなたが潜伏に利用するだけの道具のはず。それを、なぜそうも気遣うのですか？」

「お前たち『招かれざる者』に話すことなどない」

身をひるがえす黄金の夜明け（ヴィーナス・ライト）の少女。
「いずれこの世界から消え去る身なのだから。最後の時間を惜しみなさい」
「三百年前と変わりませんね」
「立場を理解するといい。終焉（しゅうえん）を避ける術（すべ）はお前たちに残ってない。もうこの世界には、あの時のような人間の剣士はいないのだから。それに――」
深々と魔王宮を伝っていく声。
「わたしがここで退こうとも、審門の破壊は免（まぬが）れない」
それが大気の中にとけ込んで消えてしまった時にはもう、白髪の少女の姿は、氷の将魔（ルル）の前から忽然（こつぜん）と消えていた。

3

降魔（ごうま）の戦盤（せんばん）――
青の極光（オーロラ）が輝くなか、頭上を埋めつくすのは奇怪（きっかい）な声を上げる怪鳥だった。
「死戦の鴉（モリガン）……！」
古くは地上でも遭遇（そうぐう）事例のある魔獣だ。
二首をもつ不気味な鴉が木に留（とど）まっていたので、猟師がそれに弓を射た。
矢は狙（ねら）い違わず鴉を射貫（いぬ）いたが、次の瞬間、その鴉から抜け落ちた羽が無数の鴉となっ

て猟師に襲いかかった。そんな伝説が残っている。
「一対千の戦いは、まだ貴様にも経験がなかろう？」
厳かな口調で告げるのは魔王ヴェルサレム。
「埋めつくせ」
鴉が動いた。
頭上を埋めつくしていた鴉の群れが一転、旋回しながら急降下。自分の視界を埋めつくす勢いで降ってくる。
『カカッ』
『カカカカカカカカカッッッ』
『カカカカカカカカカカカカカカカカカッッッ』
……薄気味悪い。
……なんだ、この奇怪な鳴き声は。
鼓膜から浸透して頭の中へと入り込んでくる。
この鳴き声に何らかの力、あるいは呪詛が宿っているのか。それともあまりに不気味で大音量の鳴き声に自分が気圧されているだけなのか。
それはわからないが、この獣の声は、人間の精神をかき乱す。
……やばい！

背筋に冷たいものが走った瞬間に、レンは背を向けて一目散に駆けだした。死戦の鴉の群れから離れようと円形の決闘場の縁をなぞるように走る。

『走ル？　走ル？』

肩に飛びついてくる地ノ始原精霊。

『コッチ！』

精霊の指さす方へと迷わず足を踏みこむ。大地の祝福。地の底から足を押し返すような力を受けて、疾走に力強さが加わった。

――迫る羽音。

身をよじって真横へ跳ぶ。

直後に頬を擦っていく魔獣の嘴めがけ、レンは霊剣を振り下ろした。

だが。

「ぐっ!?」

硬い衝撃。

剣の切っ先が、飛翔する死戦の鴉の嘴によって受けとめられていたのだ。

死戦の鴉の大きさは地上の鴉と大差ない。なのに剣から伝わってくる硬く重たい反動は、巨大な岩をハンマーで叩いたかのような振動だった。

「死戦の鴉の嘴は強靱だ。アテが外れたな」

「いいや、ここからだ！」
レンの頭上に灯る光。
それがまたたく間に膨れあがり、翼を持つ火蜥蜴の姿を形成していく。
「火の始原精霊！」
『ワカッタ！』
霊剣ヴィエルジュの刀身に炎が宿る。
……斬れないなら。
……超高熱の剣で思いっきり撃ち落とす！
柄を両手で握りしめる。上段に構え、レンは剣を全力で振り下ろした。
『カッ!?』
地面に激突した死戦の鴉が灰色の羽へと戻っていく。
これで一体。だが宙にはまだ数えきれないほどの死戦の鴉たち。分身ではあるのだろうが、どれも倒すまでは一体の独立した魔獣に他ならない。
……水晶を呑みこんだ奴を見つけだす策は？
……片っ端から撃ち落とすなんて一昼夜かけても無理な数だってのに。
『ダメ！　冷タイノ！』
火の始原精霊が悲鳴を上げて縮こまる。

それが何を意味するかという状況の把握より先に、レンは決闘場の床へと身を投げ出していた。

――氷花。

岩盤の罅から這い出た氷の蔓。

さらに続いて地盤が割れ砕け、世にも美しい氷の花が次々と現れる。これが戦闘でなければあまりの美しさに見入っていたかもしれない。

ただし、氷花の内部に十体以上もの死戦の鴉が閉じこめられてさえいなければ、だ。

……死戦の鴉が抵抗さえできなかった。

……この氷花、咲くときに周りのモノを見境無く取りこむ性質か!?

元の羽へと戻っていく死戦の鴉たち。

火の始原精霊の導きがなければ、あの一瞬で氷の蔓に足を取られ、その直後に問答無用で氷花の内部に閉じこめられていただろう。

「よく反応したではないか」

しゃらんと錫杖の音を響かせる魔王。

その杖には、今まさに発動したであろう氷の法術が霜となって付着していた。

「氷の将魔ルルが好む法術だ。発動するまであらゆる法術探知に感知されないのが強みだが、精霊の霊知だけは誤魔化せんな」

「やけに静かだとは思ってたさ！」

いかに強力な魔獣とはいえ戦闘を使い魔だけに任せるだろうか。すべての悪魔の頂点に立つ魔王がそんな甘い相手であるはずがない。

そう疑念を思い浮かべた矢先にこれだ。

「大事な使い魔をそんな手荒く扱っていいのかよ」

「手荒い？　手荒いとは何だ？」

余裕の口ぶりで返す魔王。

むしろ褒め言葉であるとさえ感じさせる堂々とした佇まいでもって、漆黒の悪魔は己の握る錫杖を振り上げた。

「手荒いとはこういうことか？」

ぽこっ……

レンと魔王との中ほどに生まれた緑の球体。シャボン玉ほどしかない大きさのそれが、高速で回転しながら上空へと上昇していく。

そして――周りの死戦の鴉たちが、一斉にその球体から逃げるように遠のいた。

魔獣の群れが蜘蛛の子を散らすように逃げる。その光景で、何が起きようとしているのか推測するには十分すぎた。

「『降りそそぐ魔酊』」

頭上の球体が破裂して強烈な呪詛をまき散らし、さらに呪詛から生まれた飛沫が地面に落ちた途端、岩盤から白い煙が噴きだした。

呪いと酸の混成。それが緑の球体に詰められていた法術の正体だ。

「往け、使い魔たち」

魔王の勅令。一度は逃げた死戦の鴉が、再び地上への降下を開始した。

「こいつら雨に打たれながら!?」

霊剣ヴィエルジュを斜め上段から振り下ろす。

一直線に襲ってくる鴉をたたき落とし、返す太刀で別の一体を弾きかえす。さらに剣を水平に構える……のを躊躇い、レンは後方へと後ずさった。

迫る酸の雨。

決闘場の半分ほどを覆う雨雲が自分めがけて追ってくる。

その降雨範囲から逃れるために剣を引いて跳躍。だがその時には、酸の雨を突破した死戦の鴉が背後へと迫っていた。

「痛っ!?」

魔獣の嘴が脇腹を掠めていく。間一髪でわずかにでも身を逸らしていなければ、あの曲がりくねった嘴が身体を貫通していただろう。

――頭上の雨に気を取られれば前後左右から死戦の鴉が。

——逆に死戦の鴉に集中すれば、追ってくる雨雲に追いつかれて酸を浴びる。
決闘場の岩盤をも融解させる法術の酸だ。
一滴でも浴びれば皮膚を溶かし、骨まで侵食されるに違いない。
「……本当に使い魔の扱いが手荒いな」
「余の使い魔だ。その特性を活かす術は誰よりも心得ている」
自らが生みだした呪詛と酸を浴びながら平然と佇む漆黒の悪魔。
だが、主は無事でも使い魔はそうではない。
酸の雨の中を飛び交いながら次々と急降下してくるが、そのうちの何体かは雨を避けきれずに酸を受け、地へと墜ちて消滅していた。
「無限に使い捨てられる。これが死戦の鴉という魔獣の実に素晴らしい特性だ。法術との連携に使うもよし、敵もろとも道連れにするもよし、陽動、生け贄、時間稼ぎ、さらには余の盾としても優秀この上ない」
「……本体さえ無事ならだろ？」
「そうとも。水晶を呑みこんだ本体は目星がついたか？」
宙を埋めつくす鴉の群れ。
レンが倒した数よりも魔王の法術を浴びて消えた分身の方が圧倒的に多いが、その数は減るどころか増殖しているようにも見える。

……少なくとも滅ってはいない。
……無限っていう表現もあながち嘘じゃないってことだ。
「火の始原精霊、頑張れるか？」
『頑張ル』
「なら頼む。炎を巻き上げろ」
レンの声に、浮遊する精霊が頷いた。
火の始原精霊の生みだした炎が決闘場に上昇気流を作りだし、噴き上がる風が酸の雨と死戦の鴉とを押し返す。
「……どうだ？」
炎に煽られた鴉の群れが一気に消滅。
だが火柱が消えた後に、空から落ちてきたのは羽毛だけ。水晶を吐きだすような個体はいない。本体の死戦の鴉はいまも空を旋回し続ける群れの中に紛れている。
「そう上手くはいかぬものよ」
錫杖を打ち鳴らす魔王。
炎の気流が静まったのと同時に再び頭上へと集まってくる二首の鴉。何十体という編成を組んで豪雨のごとく頭上から降ってくる。
……どこだ。

……どこに水晶を呑みこんだ本体がいる？

先頭の群れめがけて走りだす。

鎗のように細く尖った嘴を突きだす群れへ、レンは自ら身を投じた。一体目、二体目をかいくぐり、身を屈めて後続をやり過ごす。さらにその後列にいる集団の嘴を肩、太股に受けながらも直撃だけは避けて前へと走り続けた。

「ここだ！」

群れの最後尾にいた怪鳥たちを数体まとめて薙ぎ払う。

「群れの中で最後尾に待機しているのが本体と読んだか？　これはこれは、だいぶ小利口な策に出たではないか」

レンの剣が払った死戦の鴉たち。

それがまとめて羽毛へと戻っていくのを愉快そうに眺める魔王。

「だが惜しかったな。そこにも本体は隠れておらぬ」

「わかってるさ」

啄まれた肩の傷口に手をあてて、レンは奥歯を噛みしめた。

どれだけ挑んでも無駄だと言わんばかりの魔王の余裕。本体は絶対に見つけられない。

そんな自信さえ覗える。

……たとえば本体だけが群れから離脱してる可能性は？

……いや、その可能性は低いはず。
そんな行動をすれば明らかに目立つし、万が一にもその瞬間が目撃されてしまえば本体の位置を自ら教えてしまうようなものだ。危険性が高すぎる。
「動きが止まっているではないか？　法印を欲しているのではなかったか？」
「欲しいさ」
霊剣ヴィエルジュを岩盤に突きたてる。
その柄に両手を添えて体重をかけながら、レンはゆっくりと頷いた。
……焦るな。
……あの挑発だって俺を焦らすためのものなんだから。

〝悪魔は欲深い。ゆえに我らの行動原理は常に『確実に手に入れること』〟

他ならぬ魔王ヴェルサレム自身の言葉だ。
では、法印を奪われないための確実な手段というのは何だ？
それは法印を呑みこんだ死戦の鴉の本体を自分から遠ざけること。レンも何一つ疑わずにそう考えていたが、ここに来て何かが引っかかる。
……魔王のあの余裕。

……絶対に俺が死戦の鴉の本体を見つけられないと思ってる？　本当にか？

襲ってくる群れの中に本体がいればいつかは剣が当たるだろう。

剣の届かない間合いに逃げていたとしても、精霊なら空中にいる個体も撃ち落とすことができる。さらにいえば魔王の法術でも大量に分身を巻き添えにしてしまっているのだ。あの中に本体がいれば一溜まりもなかっただろう。

なのに死戦の鴉は次から次へと襲ってくる。

法印を呑みこんだ本体を撃ち落とされないという自信があるのか。それとも。

「……ああ、なるほどね」

「ほう。何だその不敵な眼差しは？　死戦の鴉を倒す算段がついたか？」

「ようやくわかったよ」

岩盤から霊剣を引き抜く。

その切っ先を、レンは漆黒の悪魔へと突きつけた。

「悪魔法印は使い魔なんかに渡しちゃいない。アンタが持ってるんだろ？」

その一言で――

魔王の嘲笑に亀裂が入った。

「死戦の鴉の本体が群れの中に紛れているのは間違いない。本体が水晶を呑みこんだことも俺の目で確かに見た。だけど一つだけ確かめてないことがあるのを忘れてたよ。それが、

アンタが玉座で手にしてた水晶に、本当に悪魔法印が納められていたのかどうかってことだ。まんまと騙されたよ」

玉座で見た宝石はただの水晶で、悪魔法印など入っていなかったのだ。

宝石の内部に見えた薄紫の輝きはただの細工。だから死戦の鴉の本体が呑みこんだ宝石をレンが奪っても、その宝石には悪魔法印など最初から入っていない。

これこそが法印を奪われない確実な策になる。

「法印を呑みこんだ鴉なんて最初からいない。それが答えだ。エリーゼが宝石好きだし、魔王宮に余ってる宝石くらいあるだろうからな」

だからこそ魔王にはこれだけの余裕があったのだ。

「違うか？」

魔王は無言。

だがやがて、その肩が小刻みに震えだして。

「……くくっ！　く……っははははははははっ！　そうでなくてはな！」

手にしていた錫杖の頭部を、容赦なく足下の岩盤に叩きつけた。しゃらん、と最後の音色を響かせて砕けちる宝環。その砕けた切片から――

極小の紫水晶がこぼれおちた。

「悪魔の流儀、少しは理解したようではないか」

紫水晶（アメジスト）。水晶の中で最高位の色彩をもつとして崇（あが）められている宝石だ。
その宝石名の語源は『惑わされぬもの』。
「今度こそ本物だよな？」
「魔王の誇（ほこ）りにかけて誓うとも」
悪魔法印（ほういん）が込められた宝石を拾い上げる魔王ヴェルサレム。
「お前は知らねばならなかった。竜と悪魔と天使とを引き連れるには、その種族の流儀を理解しなければならぬことをな」
「……それが悪魔の審判？」
「半分と言ったところだな」
漆黒（しっこく）の悪魔が叮笑（おか）しそうに嗤（わら）ってみせる。
その肩に留まる一体の死戦（モリガン）の鴉。群れから一体だけ降りてきたあの鴉（からす）こそが、おそらく本体なのだろう。
「ここからは余も真の法術（ほうじゅつ）を披露するとしよう。死戦（モリガン）の鴉、お前も好きに飛べ」
頭部の砕けた錫杖（しゃくじょう）を構えてみせる。
「さあ決闘を再開――――……」
魔王の言葉は、完成することなく断ちきられた。
決闘場の中央で燃えさかる鬼火。その灯（ひ）が前触れなく掻（か）き消えたのだ。

「え？」
降魔の戦盤に起きた異変。
怪異とも言うべきその正体を察したのは、他ならぬ冥界の主だった。
「これは……」
決闘場の上空を見上げる魔王。その声が掠れていた。
「いかん！　離れよ死戦の鴉！」
肩の使い魔を咄嗟に手で払いのける魔王。
降りそそぐ光――
あるいは光という表現すら正しいものではないのかもしれない。レンの見たその輝きはあまりにも神々しく、威圧的で、そして無慈悲な力の執行そのものだった。
空にいた無数の死戦の鴉たちが光を浴びて消滅。
さらには肩に留まっていた使い魔を庇った魔王の右腕さえも、その光を浴びると同時にサラサラと崩れるように光の中へと消えていく。
雪が陽の光を浴びて消えるように。
……何だ？
……いま……何が……起きてるっていうんだ。
その光景を前に。

レンは、自分の全身が震えるのを止められなかった。
「やはり……」
失った右腕を庇いながら、決死の形相で頭上を仰ぐ魔王ヴェルサレム。
「終焉戦争で散った災厄ごときが。今さらこの地に何の用だ！」
目を覆いたくなるほどの眩さのなか――
光の奔流から二つの影が現れた。
吹き飛んだ紫水晶が空中で砕けちる。
現れた黒の円環を虚空で受けとめたのは、極めて人間に近い造型の「何か」だった。
『穢らわしき封印の鍵……』
空気を震わせることなく伝わる声。
あらゆる媒介を通さずに、直接、心の奥へと沁みていく神秘の波長。その声を、レンはなかば呆然と立ちつくしながら聴いていた。
『これで一つ。あと二つだったか？』
凛々しい面立ちをした亜麻色の髪の青年。
だが身に纏う天衣は眩しいまでの光に覆われ、その肉体も光を透過する半透明。人間の

身体組織とは次元を異にする霊的な美しさに満ちている。
『ディスカント、残る法印を揃えろ』
応えたのは獣の咆吼。
大いなる光の中から、三頭の冥獣にも迫る巨体の怪物がせり上がってくる。
……こいつらが終焉戦争の災厄？
……三百年前にエルラインが戦った相手なのか？
世界を巡る怪異。
太古の昔には神性都市シィエラミリスを襲った『光り輝く者』であり、三百年前に終焉戦争の元凶となった『災厄』、そして現代にて正体不明の『沈黙機関』と呼ばれるモノ。
その者たちを見上げて。
「……ふざけるな……」
それが、レンの放った第一声だった。
「法印を手に入れるって？　渡すものかよ、これはお前たちの物じゃない！」
邂逅の刻。
偽英勇の少年が、知られざる世界の頂点と出会った瞬間だった。

「悪いね。わざわざ案内してもらって」
「これも聖女の務めよ。……なんて言ってみるけど、私も公用で忙しくて来られない場所だから、いい機会だと思ってるわ」
カナン古寺院。
精霊信仰の建物としては現存する中では最古のものだろう。煉瓦を積み上げて造られた塀は崩れ落ち、敷地内も雑草が生い茂っている。
「エルメキアに向かう前に、彼もここに案内したんだってね」
「ええ。私の風の始原精霊と水の始原精霊が好きな場所だから、もしかしたらレンの精霊もそうかしらって思ったの」
わずかに漂う埃と黴の匂い。
エリエスが足を踏み入れた礼拝堂の内部は、ほんのりと冷たい空気に満ちていた。
寂びた聖域。
かつて色鮮やかなステンドグラスに彩られていた窓はただの空洞と化し、並んでいたで

あろう机も椅子も祭壇も、すべて時の流れとともに風化してしまっている。
その中でただ一つ。
——翼の生えた少女の像。
——掲げた右手に、何か果実のようなものを握りしめている。
広間に、埃をかぶった石像だけが安置されていた。
「精霊の姫と呼ばれて奉られていた精霊の像。少女に羽が生えた姿だから、天界の天使と区別するために、こっちの像を『真天使』と呼ぶ説もある……」
「私が教えたことしっかり覚えてるじゃない」
「すべての精霊を従える姫。転じて、世界の均衡そのものを司る存在と、そんな大げさなことを言う学者もいる……っていうのも覚えてるよ」
穴の空いた天井から零れる日射しに、シオンが眩しそうに目を細める。
それに対しエリエスは彼の前で腕組みして。
「話の続きをお願いしたいところね。沈黙機関について調べてると言ったあなたが、なぜこんな精霊信仰の礼拝堂に興味を持ったのかしら」
「ちょっと前、沈黙機関の正体について考えてみたことがあったんだ。覇都にあった天界の審門が破壊される前にね」
剣聖シオンは、数年前から沈黙機関の正体を気にかけていた。

世界中の秘境を冒険してきた旅団「精霊の調べ」として、沈黙機関が破壊したと思しき遺跡を誰よりも多く見てきたからだ。

「沈黙機関について、僕が注目した点は三つある」

翼の生えた少女の像を見つめながら、シオン。

「一つめ――まず明らかに自然災害や偶然の類じゃない。明確な意図をもって審門を破壊して回る何者かがいる。これは、覇都で僕たちが使った天界の審門が数時間で跡形もなく破壊されていたことで確信できた」

「ええ、あの時の覇都には、竜巻や雷みたいな自然災害はなかったわ」

審門が壊れるような天変地異は観測されていない。審門を襲って破壊した何者かがいるのは確実だろう。

「それを踏まえて二つめ――その審門の破壊者は人間でも徊獣でもない。沈黙機関の破壊行為が百年以上も続いているから、寿命的に人間のせいとは思えない。それに世界規模で審門が破壊されてることから徊獣のせいとも思えないんだ」

徊獣にはそれぞれ固有の生息地がある。

審門を破壊できるほど強力な力を有した徊獣は何種類か考えられるのだが、審門の破壊場所とそれらの生息地が一致しないのだ。

「三つめは？　最初の二つは私も予想できたけど、三番目の見当がつかないわ」

「結論から言うよ。沈黙機関の正体は、碑文の三賢者が『光り輝く者』と呼んでいた存在。つまり終焉戦争で剣帝エルラインと三大姫たちが戦った災厄そのものだ」

「……なんですって？」

碑文の三賢者については、エリエスもレンから聞いている。

太古の昔に古代召喚術を探求していたという神性都市シィエラミリスの住人。

彼らの都市を襲ったのが『光り輝く者』であり、その復讐の妄念に駆られ、彼らは覇都エルメキアと共に虚構精霊を授けたという。

「それはシオンの予想ってことかしら」

「いや。これは推測じゃなくて当然の帰結だよ。今までの二つの特徴を照らし合わせると、消去法でこの可能性しか残らないからね」

穏和な面持ちながらも力強い口調でシオンが断言。

「天界と冥界の審門を狙っているということは、審門というものが何なのかを当然に理解しているはず。天使と悪魔を同時に敵に回すことがどれだけ恐ろしいか、それを理解した上で審門を破壊するなんて行為、現代だと覇都の王立七十二階位特務騎士団くらいしか考えられなかった」

「……そういうことね」

内心、エリエスは手を打った。

シオンが結論に至るまでに辿った道筋が、自分にもようやく見えてきた。
「でも犯人は王立七十二階位特務騎士団じゃなかったのよね。つまり現代には沈黙機関の候補がいないことになるわ。となれば残りは過去――」
「そう。三百年前、まさに天使や悪魔たちと争ったモノがいたわけだ」
終焉戦争を引き起こした災厄。
三百年前にいたわけだから、百年以上も前から審門を破壊していることも説明がつく。
「種明かしをすると、この話をするのはエリエスで三人目なんだ」
「シオンの仲間以外に、ということかしら？」
「うん。竜帝カルラと女神レスフレーゼにね」

〝先ほどキリシェ姉様にお伝えした通りです。剣聖シオン――彼の者がこの地に現れて、そして私に告げた予言は恐らく間違っていない〟
〝剣聖シオン――妾が唯一、その法印を授けるにふさわしいと感じた人間じゃ〟

剣聖シオンは、旅団「再来の騎士」よりも早く竜帝と女神に会っていた。
すべては自身の予感を確かめるために。
そして結論へと至ったのだ。

「沈黙機関は、終焉戦争の災厄そのもの……」

無意識のうちに頬を伝っていた汗を指先でぬぐい取り、エリエスは低く押し殺した声でそう呟いた。

信じがたい。いや、信じたくないと言った方が本音だ。

世界を恐慌に陥れた災厄が、逆襲の機会を窺っている。そんな恐ろしいことが起きているのであれば、シオンが世界中に警告を発したのも当然だろう。

「今まで私が追ってきた精霊の怯えの正体も、その終焉戦争の災厄が甦ったから？　それでカナンまで来てくれたのかしら」

「もう少し深刻な話だよ。君の意見を聞きたかったんだ」

押し黙るシオン。

翼の生えた少女像に背を向けて。

「あくまで僕の推測だというつもりで聞いてほしい。沈黙機関の正体が、終焉戦争の災厄だとしよう。では、そんな災厄の正体は何だろうって考えたんだ。そして、これは昔から疑問に思ってたんだよ。沈黙機関っていう名前の由来――なぜ『沈黙』なんて言葉がついているのか」

「……ほとんど目撃談がないからでしょ？」

遺跡破壊の怪異。

発見された時には、破壊された審門の残骸だけが残っている。その犯人を誰も目撃していないから。そういう理由で名付けていた通り名だったはずだ。

「その理由もある。でもね、まったく目撃例がなかったわけでもない。僕たち人間が気づかなくても、その存在を感知している者たちは必ずいたはずなんだよ」

「……審門の管理者。天使や悪魔たちね！」

「そう。たとえば天界の審門を管理するのは愛天使たちの役目だ」

シオンが天界に向かった理由の一つ。

女神レスフレーゼとも親交のある彼ならば、審門を管理する愛天使からも話を聞くことは可能だろう。

「目撃したっていう報せはあったの？」

「あった。だけど目撃された沈黙機関の姿は千差万別らしくてね、もともと特定の姿なんて意味を持たないのかもしれない。なにしろ僕らと違って肉体さえ無い連中だから」

……肉体がない？。

その一言にエリエスは眉をひそめて表情を強ばらせた。思いあたる節が無かったからではない。むしろ心当たりが一つだけあったからだ。

「……続きをお願い」

「愛天使たちに聞いたら、そんな沈黙機関にも共通した特徴があることがわかったんだ。

沈黙機関は本当に喋らないんだよ。愛天使たちがどんなに脅しても叫んでも一言も喋らなかったらしい……でも、ふと思ったんだ。本当にそうなのかなって」

沈黙機関が明確な破壊衝動をもって審門を破壊しているのは確実。

それが愛天使たちに姿を見られても、本当に一言も喋っていないのか。なぜ『沈黙』を頑なに貫こうとするのか。

「声を発していなかったんじゃない。単に愛天使たちがソレを聞き取れなかっただけなんじゃないかってね。天使だけじゃなく人間も悪魔も竜もだ。誰一人として声を聞きとれる者がいないからこそ、沈黙機関と呼ばれるようになった。というのが僕の結論さ」

「……シオン、あなたが言いたいのはまさか……」

口にした声が、掠れていた。

エリエスもまた気づいてしまった。剣聖の言葉が何を意味するのか。

……いるわ。

……天使に聞こえない声を持つ存在に、思いあたるものが一つだけいる。

竜と天使と悪魔にも匹敵するであろう力を持つ存在。

終焉戦争より遙か過去から存在していることもわかっている。それは――

〝聖女と言われる前、私はずっと独りぼっちだった。私が精霊と話してるのを見て、周り

の大人はみんなソレを気味悪そうに見てた〟

〝私以外の誰にも聞こえない精霊の声〟

「そう。沈黙機関の正体は、精霊だよ」

剣聖シオンの至った結論。

それはエリエスがこの瞬間に至った推測と同じものだった。

「終焉戦争の災厄が精霊だとすれば、その声を愛天使たちが聞き取れなかったことに説明がつく。彼らが異名のとおり『沈黙』していたと錯覚しても無理はない」

「……嘘……でしょう？」

掠れた声を必死に振りしぼる。

緊張のあまり喉の奥の水分が蒸発し、渇ききった喉に痛みさえ覚える。これほどの衝撃を覚えた経験が過去にあっただろうか。

「あるいは『精霊に似て非なる者』」

翼を持つモノ。

翼の生えた少女像へと再び向きなおって、金髪の青年はそう続けた。

「精霊に限りなく近い何かがいる。そう、この翼の生えた少女像が精霊の姫と呼ばれていることがそれを示唆してる気がしてならないんだ」

Record.5 ― 傷なき獣

1

光り輝く衣をまとい、光に透ける半透明の肉体を持つ者たち。
いや、本当にその身体は「肉」と呼べる物体なのだろうか。頭上に居る存在をどんなに凝視しても確信が持てない。
さながら蜃気楼のように薄弱な質感。それはまるで……精霊？

〝たとえば悪魔は、転生のためにアタシ自身の組織の一部を培養して新たな肉体を用意したの。そうでないと記憶も能力も維持できないから。竜だって自分の身体は唯一無二だし、天使だって特殊な構成素子ではあるけれど、肉体を持った実体であることには変わらない〟

レンが想起したのは、世界録を探すための旅に出てまもなくのこと。

小精霊に話しかける自分に驚いたエリーゼの言葉だ。この世界で唯一、精霊だけが肉体というものを持たない存在であるのだと。

〝でも精霊だけは違うの。この世界でただ例外的に、肉体の軛から解きはなたれた純粋な霊的波動体なんだよね〟

光に透けた半透明な身体。

だがそれに比して、その者たちが放つ絶対的な存在感は、かつてレンが体感したあらゆる威圧感とも違う。

――大いなる神性。

見上げるだけで畏怖の感情を抱かずにはいられない。逆らえない。意思と無関係に本能から平伏せざるをえないような圧力を感じる。

『……』

光り輝く者は黙して答えない。

だがレンとて、もとより返事など期待していない。奪われた悪魔法印を取り返すために霊剣ヴィエルジュを握りしめて。

『……お前は何者だ？』

金髪の青年の姿をした者が、決闘場に立つ自分を見下ろした。
そして喋ったのだ。
『あの時の剣士と生き写し。そしてその霊剣も』
「……それがエルラインのことを言ってるなら、あいにく俺は赤の他人だ」
『知っている』
真顔のままぴくりとも表情を動かさない。
『お前の波動を見ればわかる。あの時の剣士と異なるからな。それに――』
悪魔法印を握った手を下ろす。
その指先が示したのは、レンの隣に寄りそう火の始原精霊と土の始原精霊だった。
『我が声を感知できるのであれば、なおさら別人以外の答えはあるまい』
「どういう意味だ？」
それに答えることなく。
『我はイシス』
昂然たる口調で、光り輝く者は名乗りを上げた。
『精霊の声を聞く者よ。我々の導きに応じて法印を明けわたせ』
「明け渡して、それでどうなるんだ？」
『この世界に巣くう許されざる者への「秩序」を執行する』

「許されざる者たち？」
『竜と天使と悪魔。これを残らず排除する』
「……三百年前の続きか？」
『そうだ』
イシスと名乗る沈黙機関からの返答は、率直だった。
聞き返すことさえ許さない。一言の反論も認めない。あまりにも不遜な言葉。
だから、それを受けてレンはゆっくりと頷いた。
「わかった」
『波動が猛々しく揺れている。肯定の意思ではあるまい？』
「ああ、最初からな！」
降りてこい――そのつもりで霊剣ヴィエルジュの切っ先を向けようとしたレンの、その眼前に巨大な獣が立ちふさがった。
『ディスカント、法印を奪え。私は魔王宮の審門を破壊する』
『承知』
鈍い霊光に覆われた怪物。砂漠を這い進む地竜をさらに押しつぶしたような奇怪な獣が、ゆっくりと首をもたげた。
『人間……貴様がエルラインの再来というのであれば……』

「怖じ気づいて逃げだしてくれるのか？」
『待ちわびたぞ』
耳まで裂けた口を大きく歪ませる獣。
『我が名はディスカント。傷なき獣にして嵐を告げる者。さあ人間よ、剣を取るがいい。終焉戦争の再現といこうではないか』

2

爆音。
巨大迷宮とも喩えられる魔王宮が大きく震える。爆心地から伝わる衝撃を受けて天蓋が、そして通路のステンドグラスが連鎖的に砕けちっていく。
その力の波動を感じとり――
「経路は魔王宮八階『ヒュドラ回廊』。降魔の戦盤に繋がってる唯一の裏口を破壊されて侵入されちゃったか……」
通路を足早に進みながら、エリーゼは奥歯を噛みしめた。
「時空の切れ目をこの短期間に見つけた挙げ句、あっさり鍵をこじ開ける。とんでもない奴が終焉戦争から復活してきたもんだね」
「バネッサ湿原の審門を破壊した者と同じでしょうか？」

すぐ後ろを走るフィア。
「たぶん別だけど、それを確かめるのは後だね」
通路を迷うことなく突きすすみ、たどり着いたのは黒霧の漂う大広間だった。
魔王謁見の広間。
「……ったく、魔王とレンの一騎打ちを見たかったのに。そうも言ってられなくなっちゃったか。ルル、状況は？」
「お待ちしておりましたエリーゼ様」
一足先に到着していた氷の将魔ルルフォニカが会釈。
その隣には呪の将魔バオの姿もある。
「ここから感じとるかぎり、魔王様の法力が著しく乱れています。敵の攻撃を浴びたものかと。レン様の状況は不明です」
「まあそうなるだろうね」
早足に魔王の玉座へと進み、さらに奥の扉へと手を伸ばす。
ジッ……
稲光を思わせる光が奔った。扉へと手をかけようとしたエリーゼの爪に絡みつき、鈍い音を立ててその指先から手首を激しく焼きつける。
「結界ですか？」

背後のフィアが目を細める。

「エリーゼさえ入れないというのは不思議な仕掛けですね」

「この先は魔王選抜の決闘場だからね。魔王戴冠の儀が始まったら誰も行き来はできないってわけ」

手の甲から上がる白煙を後目に、大きく肩をすくめてみせる。

この先にいるのは魔王とレン。おそらく既に「光り輝く者」と交戦中なのだろうが、助けたくてもこの結界に邪魔されてしまう。

「ルル、アシェンディアは？」

「本人から念話がありました。魔王宮の中庭で『光り輝く者』と交戦。三百年前に戦った相手と同一の存在で間違いないようです」

「狙いは法印と審門ってわけね」

魔王ヴェルサレムの悪魔法印に、レンの持つ女神法印、そしてキリシェが竜帝カルラから預かっている竜法印。

終焉の島の封印を解く三つの鍵がこの場に揃っている。

「あの者たちが審門を破壊している理由は、地上を孤立させるためでしょうか」

まばゆい金髪を指先で梳りながら、フィア。

「三百年前は、エルラインの指揮下で竜と天使と悪魔が集結して終焉戦争に勝利しました。

あの者たちはそれを恐れている。世界中の審門を破壊することで天使たちを天界に、悪魔たちを冥界に閉じこめて、地上にやってこられないようにする気でしょう」

「ずいぶんと小賢しくなったものだな」

溜息一つを残し、魔王の玉座に背を向けたのはキリシェだった。

「そこの氷の将魔」

「家政婦長です」

「どっちでもいい。今すぐわたしとフィアを中庭とやらに案内しろ。三百年前の残党というのなら、倒しきれなかったのはわたしの責任だ」

「いかがしましょうエリーゼ様？」

「いいよ。行ってきな」

玉座から、エリーゼは腹心の部下へと手を振ってみせた。

「申し訳ないねキリシェもフィアも。冥界の事情に巻きこんじゃって」

「構わん」

「旅団でしょうに」

氷の将魔に連れられて走りだす二人を見送る。

「おいでバオ」

仮面をかぶった大悪魔を手招き。

「出番だよ、アンタならこの結界だって解除できるでしょ？」

『……』

黙って前に進みでるバオ。

かつての魔王戴冠の儀において、この結界をすり抜けて突然に現れた六番目の魔王候補。

その正体は、混沌渦巻く呪詛の追究の果てに、自らが強大な呪いそのものと化した狂気の悪魔だ。

「とにかく急いで。結界破壊に体力使い切っちゃっても構わないから」

『……』

「うん。そこから先はアタシがやる。今度ばかりはレンが戦うのを見守るだけってわけにもいかない相手だからね」

火傷の残る指を握りしめて拳をつくる。

唇をまっすぐ引き締めて、エリーゼは扉を凝視し続けた。

「団長」

耳元に聞こえる囁き声。

「起きてください団長、団長ってば」

続いて肩を揺すられた。
眠気に負けそうな意識の中でぼんやりと目を開ける。窓向こうの青い極光（オーロラ）の光に照らされて、ベッド脇に佇（たたず）む少女の姿が浮かびあがっていた。
「……なんだミスティか」
「なんだじゃないです。起きてください」
「……あと五分……そしたら見張り交代するからよぉ……」
「野営じゃないので交代じゃありません」
「じゃあ何だよ」
「逃げましょう」
「ん？」
反射的に上半身を起き上がらせる。
思いがけぬ言葉に、まどろんでいた意識が一気に覚醒した。
「ここは危険です。脱出しましょう」
「どういうことだよミスティ。そりゃここは魔王の屋敷だから確かに怖い場所だけどよ、周りの奴（やつ）らみんな良い奴だったじゃねえか」
「……」
その一言に。

こちらを見つめる白髪の少女が大きく目を見開いた。
「……良い奴？　本当にそう思いますか」
泣きそうな表情で。
唇を噛みしめながら、白髪の少女は首を横に振ってみせた。
何度も、何度も、何度も、何度も。
「団長も、そう思ってしまう側なのですか……団長は知らないだけ……真実を伝えられないことは、なんて悲しいことなのでしょう」
「だからなに言ってんだ。らしくねぇぞミスティ。って、うおぉ!?」
爆発音。
とてつもなく巨大な衝撃が、夜の魔王宮を揺るがした。
「ど、どうしたんだよ。今のは爆発か!?」
「……イシス。もう始めたのね。人間や黒妖精たちを避難させてからのはずだったのに。それくらい焦っているということなの？」
何か独り言のようなものを呟くミスティ。
「逃げましょう。これからもっと大きな爆発が何度も起きるはず。この屋敷も無事ではすまないかもしれません」
「ミスティ」

そう告げる少女の両肩に手を乗せる。
懇願する彼女に向けて、ダンはゆっくりと口にした。
「なら、なおさら俺らだけ逃げるわけにはいかねえだろうが。ここは何処だ？　冥界のど真ん中だろうが。この屋敷がなかったら俺らは野垂れ死んでたところだぞ。俺らを救出してくれた奴らがいて、宿と飯を世話になって、魅亞っつぅ新しい家族ができたんだ。それを――」
「わたし、団長のことが好きです」
言いかけたダンの言葉が止まった。
どうしてもその先を紡ぐことができなかった。
「団長が好きで、獣人さんも大妖精さんも好きです」
肩に手をかけるダンの手に、さらにミスティが自らの手を添えるように重ねていた。
――涙をこらえるように。
――気丈に作られた笑顔で応えてみせて。
寡黙で表情に乏しいこの少女がまず見せることのない、強い感情。
大切な者を守りたいという決意の表れだった。
「黄金の夜明けは、わたしに居場所を与えてくれました。だから傷つく姿を見たくないんです。ごめんなさい。……後でたくさん怒ってください」

「ん？」

「起こしてごめんなさい。もう一度微睡みへ」

その一言を最後に、黄金の夜明けの剣士は意識を失った。

横たわる男を悠々と抱きかかえて。

『イシス、霊獣ディスカント、わたしは先に地上へ帰還します。魔王宮の悪魔と竜と天使を消滅させて。わかっているでしょうが、それ以外には手を出さないよう』

光り輝く少女は、人間の剣士と共に姿を消した。

3

「……終焉戦争の続き？」

『そう。三百年前のあの日、我は終焉の島でエルラインと戦った。貴様が奴の再来だというのなら、それが我と貴様の因果というわけだ』

霊獣ディスカント。

その獣を一言で喩えるならば『天から墜ちた竜』だろう。

逞しい六本の足で大地を這い進む四眼の竜。全長は三頭の冥獣にも引けを取らないが、それに比して体高は低く、獅子に似た頭部が地面に接するほどだ。

まるでこちらを覗きこむように。

『よもや早々に怖じ気づいたわけでもあるまい？』
「驕るなよ獣！」
魔王ヴェルサレムが立ち上がった。
沈黙機関イシスの光を浴びて右肩から先が消滅したことを意にも介さず、残る左腕で錫杖を高々と掲げてみせる。
――『四冥夢』――
ヴッ、と耳障りな音が耳をつんざく。
魔王の膨大な法力が決闘場に干渉し、空間を強引にねじ曲げていく。
「脱出不能の連鎖する空間自壊、いかに貴様とて逃れられんぞ」
『ほう。歴代魔王の秘術……継承していたか』
出現する黒の筐に囚われる霊獣ディスカント。
回避はおろか防御のための法術を展開する間もない。黒の筐の四隅が拉げ、内部に閉じこめた霊獣ごと音を立てて潰れていくのだ。
……強引な空間歪曲と空間断層を何重にも重ねた空間干渉系法術？
……これが魔王の本気の力なのか。
そもそも空間干渉系の法術自体、防御するのは不可能に近い。さらにこの法術は魔王が脱出不可能と断言する術だ。人間の身では千年の修行を経ても習得することは適うまい。

高位存在と謳われる悪魔の、まさに本領というべき力だろう。
「旧世界の愚者めが」
くしゃくしゃに潰れた小筐が千切れて消えていくのを見下ろす魔王。
その横顔を見上げながら、レンは怖ず怖ずと口にした。
「……肩は大丈夫なのか？」
「人間とは構造から違う。単に身体の一部が欠損したというだけだ。もっとも、先の光のせいで法力の流れが狂っているのは否めんが」
ヴェルサレムが吐息をつく。
肩を庇いながらの動きだが、傷口である切断面からは出血のようなものはない。
「さて急がなくてはな。悪魔法印を奪い返さなくては」
「あのイシスって奴か」
「イシス？」
問い返す魔王の反応に、かえって慌てたのはレンだった。
「え？　いや、だからさっきの人間みたいな外見の沈黙機関だよ。自分でイシスって名乗ってたじゃん！　あのでかい獣も自分のことディスカントって……」
「名乗っていた？　それは本当か」
訝しげな顔つきながらも、何かを察したように目を細める魔王。

「終焉戦争の時代から余は奴らの声など聞いたことがない。余の姉もそうだ。奴らが会話できるのかどうかさえ不確かだったが、お前には声が聞こえたというのか？」

「……聞こえないって。そんな冗談だろ。あんなにハッキリ喋ってたのに」

『無駄だ』

ぞっとするほど近くから伝わってくる獣の声。

それは、杖をつく魔王のすぐ後ろからだった。

『我らの声は悪魔に届かぬ。精霊の声が届かぬようにな』

「ヴェルサレム、後ろだ！」

「なに？」

ふり向いた魔王が、表情を歪めて跳び退いた。

『魔王を名乗る者が後退か？』

ヴェルサレムの眼前――目と鼻の先に悠然と佇立していた獣。

無傷。

歴代魔王の秘術の一つに対し、この獣が何か反応した様子はなかった。完全に無防備な状態で攻撃を受けたはずなのに。

「回復したってのか⁉」

「いや、今のは組成修復の概念ごと破壊する禁術だ。魅亞でさえ受ければ容易には回復できぬ。だが考えられるとすれば、よもやこの獣の正体は……」

杖を構える魔王がゆっくりと後ずさる。

「なるほど。あの忌まわしき『無敵の獣』か」

その表情が険しさを増した。

「無敵の獣？」

「余の姉のさらに先代にあたる魔王から受けた警鐘がある。光り輝く雄々しき獣。どんな仕掛けかはわからんが一切の攻撃が通じない。悪魔の法術も天使の武器も、竜が殴っても息吹を浴びせても傷一つ与えられないとな」

「そんなバカな⁉」

「拘束法術さえ無効化する。逃げる以外に、この獣への策は無かったと……」

あるいは外見だけでその予感はあったのだろう。

だからこそ魔王は、不意打ちに近い形で法術を浴びせかけたのだ。この獣の正体を突き止めるために。

「喚叫べ、死戦の鴉」

魔王の肩に止まった魔獣が、その二首を持ち上げた。

左の首からは泣き叫ぶような女性の悲鳴。
右の首からは絶叫する男の断末魔。
二つの声が交互に重なり、溶けあい、降魔の戦盤にこだまする。
「死霊の呼び声だ。死戦の鴉の分身を倒せば倒すほどに、集める鬼火の数が増す。分身をことごとく消し去ったのは迂闊だったな」
ぼっ、と音を立てて生まれる紫色の鬼火。
それが霊獣ディスカントの翼を灼き、手足を焦がし、その全身を包みこんだ。
……悪魔の力が効かないなら魔獣の力で干渉する。
……もしもこれが効かないなら、冥界の王でさえ歯が立たないことになる。
固唾を呑んで炎の奥を見つめる。
『何の遊びだ？』
燃え続ける鬼火の奥で蠢く巨体。
「だめだヴェルサレム！　こいつには魔獣の攻撃も通じない！」
光が瞬いた。
頭上から現れた時と同じ光が放出されるや、霊獣を包む鬼火が掻き消える。
「正真正銘の無敵だというのか……！」
「離れろ」

魔王と入れ替わる形で前へ出る。
霊獣ディスカントは不動。魔王の法術に耐えて魔獣の力にも耐えたのだ。その耐久力には絶対の自信があるのだろう。
……だけど俺の剣だって特別だ。
……英勇の剣なら。
精霊の力を宿した精霊具。かつてエルラインが先代魔王エリーゼ、そして大天使フィアとの戦いで勝利をもたらした剣だ。これならば。
『霊剣ヴィエルジュならば我に通じる。そう期待しているのか？』
「……お前!?」
無防備な霊獣の肩へと霊剣を叩きつける。
そこには何の感触も無かった。
剣が霊獣を切り裂くこともなければ鱗に切っ先が跳ね返されることもなく、さらに剣と鱗とがぶつかりあう衝撃さえもなかった。
『名乗ったであろう。我、傷なき獣であると』
獣が動いた。
六本足の巨体が凄まじい速度で岩盤を蹴り、地面を滑るようにして迫ってくる。
「……速っ！」

瞬きさえも許さぬ速度で襲いくる霊獣ディスカント。
視界を埋めつくすほどに迫った獣の牙を前に、レンもまた即座に岩盤を蹴って後方へと跳んだ。
『コッチ！』
土ノ始原精霊の導きにより触れられる大地の脈動。
足裏から伝わる鼓動に合わせて地を蹴ることで、その脚力は飛躍的に上昇する。
『エルラインとの違い。己の弱さを精霊に縋り穴埋めするか』
空振りした牙を顎に収める霊獣ディスカント。
低い姿勢をさらに屈め、六つの足で力をためる仕草。
『半実体化したことで我もまた大地に縛られる。なるほど、土ノ始原精霊に乞えば我の動きに追いつくことも可能になるだろう。だがな』
獣が嗤った。
『それで我と戦えるなどと思い上がるなよ？』
跳躍。空飛ぶ鳥のごとき軽やかさで決闘場の塀よりも高く跳び上がった獣が、六つの足から光り輝く爪を露出させる。
……霊剣ヴィエルジュさえ通じない。
……だけど、それに精霊の力を上乗せすれば。

「火の始原精霊――」
『ダメッ！』
『ヤメテ、チガウノ！』
「お前ら!?」
振り返ったそこに、レンは信じられないものを見た。
足にしがみついて首を横にふる土の始原精霊。
宙に留まり、悲しげに曇った瞳でこちらを見つめてくる火の始原精霊。
――精霊は、この獣と戦うことはできない。
瞳がそう語りかけてくる。
二体とも弱々しくうつむくのみで決して動こうとしてくれない。
「どうして……」
『我らと精霊との縁は、世界創造の時まで遡る。お前が割り込む余地はない』
「なにっ!?」
レンの頭上へと襲いかかる獣。
その落下位置から脱出し、ディスカントが着地した瞬間を狙って再び霊剣で斬りつける。

だがその剣には火の始原精霊（サラマンダー）の炎が付与されていない状態だ。
精霊に協力を拒絶される。霊剣の攻撃が通じないこと以上に、それはレンにとって小さからぬ衝撃だった。
「……どういうことだ」
何かが違う。
今まで自分が得てきた知識では説明のつかないことが、目の前で起きつつある。
神性都市シィエラミリスの古代召喚術を敵視していた『光り輝く者』。
終焉戦争（しゅうえん）の元凶となった『災厄』。
冥界（めいかい）と天界の審門を破壊していく『沈黙機関』。
目の前の獣がソレと関係していることは想像がつく。
……だけど精霊との縁？　精霊が攻撃できない？
……俺はそれを知らなかった。やっぱりまだ何かあるっていうのか。
覇都（はと）エルメキアの時から感じていた疑問。
それが確信へと至（いた）った瞬間だった。
〝あんたらはまだ大事な何かを隠してる〟
〝終焉戦争だってそうさ。今の話だけで説明できるなら、キリシェが最初から教えてくれ

ておかしくない〃

碑文の三賢者の話を聞いて何かが腑に落ちなかった。

キリシェの言うとおりだ。

まだ自分は真実には至っていない。終焉戦争の全容もまた、終焉の島に行かないかぎり理解できない。その意味をあらためて痛感した気分だ。

「……終焉の島には、お前たちの秘密も隠されているのか？」

『立場を理解しろ。お前があの島にたどり着くことはない』

傷なき獣と名乗った怪物が高らかに告げる。

『悪魔の法術も魔獣の力も、貴様の剣も我に届かぬことは理解していよう。霊剣も精霊も、貴様の持つすべてが無力と化す』

「でもお前は、終焉戦争でエルラインに敗れたはずだ」

エルラインが一度は終焉戦争を鎮めたという史実がそう告げている。この獣にも弱点は必ずあるはずなのだ。

そして自分を見て「待ちわびた」という発言の心理を読むならば――

「お前はエルラインに報復したい。その代替として俺を選んだ。そういうことか？」

『報復？　それは違うな』

霊獣の翼に光が灯る。

蛍光のように淡く、そして陽炎のようにゆらめく光。これ以上ないほどに儚く感じられる光量だが、その光を見た途端に背筋がぞっと怖気だった。

『我は、我が過去の汚点を浄化するために来たのだ。我が「無敵の暗示」を破った剣士と再び相まみえることでな』

「いかん、その光に触れるな！」

魔王が叫えたと同時、圧縮された光が閃光として射出された。

ジッ。

上着をかすめていった光が決闘場の岩壁へと突きささる。

岩には何一つ変化はないが、魔王が咄嗟に叫んだほどだ。生身で受けていればどんな状況に陥ったのか想像もつかない。

一方で、獣が睨みつけたのは警告を発した魔王ではなく、その足下にいる小人だった。

『土の始原精霊。なぜこの人間に与する？』

「……」

『お前の力がなければ、この人間が光を避けることはできなかった』

『……ダッテ……』

窘める口調で迫る霊獣ディスカント。

それに対して、火の始原精霊（サラマンダー）に抱きついて身を寄せ合う土の始原精霊（ノーム）。

『お前たちは――』

「相手を取り違えるんじゃねえよ」

霊獣の言葉をさえぎる。精霊たちに意識を割いたディスカントの懐へと潜りこみ、レンは無防備な胴体めがけて斬りつけた。

だが手応えはない。

剣の切っ先が獣に触れた途端に、まるで見えない綿の壁に受けとめられたかのように威力も速度も零になってしまう。

「いかん、離れよ！」

衝撃。

霊獣の尾に横殴りにされた衝撃に視界がブレた。空中を枯葉のように舞いながら受け身も取れずに岩盤へと叩きつけられる寸前、身体がふわりと宙に停止した。

「危機一髪といったところか」

「ああ……ありがとな。助けてもらわなきゃ今ので意識飛んでた」

切った唇を拭う。

全身がバラバラに砕けたと本気で覚悟する衝撃だったが、身体はかろうじて動く。

――魔王による風の法術。

吹き荒れる旋風がレンを覆い、霊獣の一撃を緩和したのだ。
「ヴェルサレム。あんた『無敵の暗示』って言われて何を思い浮かべる？」
「……なに？」
「あの獣が自分でそう言ったんだよ。その暗示とやらに守られてるってな」
「自己強化」
漆黒の悪魔の答えは速やかだった。
「女神が自分自身に祝福をかけるのと理屈は同じだ。言霊を用いて自分自身に語りかけて、法術を自分に作用させる。人間は法術という形で防御結界を自分に張るが、我々になれば法術という形をとる必要もない。ただ念じるだけで加護が生じる」
「自分自身を呪いや法術から守れって？」
「そうだ。だが、もし奴がそれを『無敵の暗示』と言ったのならば……」
魔王が言葉を呑みこむ。
「……なんと傲慢な。そんな加護が可能だというのか!?」
この霊獣は、あらゆる攻撃が効かないと自分自身に言い聞かせることで、現実に無敵の加護を具現化させている？
「いや、やはりあり得ん。そんなことは――」
『存在の格が違うと知れ』

霊獣の前脚が、決闘場の岩盤へとめり込んだ。

『我が無敵の暗示は世界の法則として作用する。世界の原初より存在する我が言霊の重み、お前たちの天秤で量れると思うな』

「さあどうかな」

全身の激痛に耐えてレンは決闘場をかけた。

『無駄なあがきを』

「同じことを三百年前にも言ったんだろ」

傷なき獣。ディスカントは自らをそう称したが、それは誤りのはずなのだ。

「だけどお前は敗れたはずだ。無敵の暗示を破壊されて」

『一度はそうだ。我は霊的波動体と暗示の両方に傷を負った』

光り輝く怪物が臆することもなく告げる。

その四つの眼の中心――すなわち額の部分に、いまだ癒えぬ剣の傷痕。

『我が加護の修復はとうに終えている。もはや何者にも我が無敵の加護は犯せまい。ゆえに待ち望んだぞ。英勇の再来だというお前を蹴散らし、我が加護が絶対であると証明する時を』

「なら、もう一度破壊すればいい」

自己暗示が作用しているかぎり霊獣は無敵。

だが自己暗示そのものは決して無敵ではない。

……奴の暗示を剥がすことさえできれば。

……勝機があるとすればソレだけだ。エルラインと同じことが俺にできれば。

決闘場の端で身を寄せ合う精霊たち。

火の始原精霊の炎の精霊剣、そして土の始原精霊による鉱巨人の助けは望めないだろう。

だが大地の鼓動は今も感じる。加勢することはできないけれど自分の身を案じてくれている。それはわかる。

「ふっ」

息を吐きだして地を蹴った。

再び襲ってくる尾を飛びこえて霊獣の背後へ。その翼の付け根めがけ、全力で霊剣ヴィエルジュを振り下ろす。

『斬り続けて破壊衝撃を蓄積すれば暗示が砕けると思ったか？』

「……お見通しってわけかよ」

『かつて同じことを七曜の天使が試していた。考えることは変わらぬな』

霊獣が翼を羽ばたかせる。

大気から生じる鋭利な鎌鼬。不可視の風の刃が背後を通りぬけた途端、背中から脇腹にかけて熱い痛みが迸った。

「痛うっ!?」

またたく間に赤く染まっていく上着。

『墜ちるがいい』

大いなる獣の発した言霊が局所的な重力場を作りだす。為すすべ無くディスカントの背中から滑りおち、レンは真下に墜落した。

『所詮は――』

「ならば一撃必殺。刹那にして最大の破壊衝撃を与えてやろう」

『なに?』

「ここは我が屋敷。我が領分であることを忘れたか」

手にした杖を握りしめる魔王。限界まで力をこめた握力に握りつぶされた錫杖が、澄みきった音を立ててへし折れた。

それが魔王宮起動の儀。

「『魔城輪廻』。砲撃せよ」

宮殿が地鳴りを従えて動きだす。

屋敷の屋根、庭園、壁、あらゆる箇所に秘されていた法術円環が起動。歴代魔王が溜め続けてきた法力を、魔王宮の砲門から一斉射出する。

暗色の閃光。

幾千、幾万にもおよぶ光の砲撃が霊獣ディスカントへと降りそそいだ。
「……こんな仕掛けまであるのかよ」
「奥の手だ。魔王宮の現支配者、つまり余のみが発動できる。だがもしも……」
緊張を孕んだ口調で続ける大悪魔。
「これで倒せないというのなら、この冥界に奴を倒す手段は存在しない」
『ようやく理解したか？』
獣の声。
今も射出され続けている暗色の閃光が、より強大で神々しい光に打ち消された。
『我は傷なき獣。無敵の加護を受ける者なり』
「これさえも通じぬというのか！」
ほとんど悲鳴に近い口調で魔王が吐き捨てる。
「だがどういうことだ。これで倒せぬというのなら、エルラインはどうやってこの怪物を退けたと――――」
言葉なかばで宙を舞う魔王の体躯。
霊獣の脚の一振りで決闘場の塀に叩きつけられ、その身体がさらに岩盤に落下して嫌な音を響かせる。
『退化だな』

感情をこめぬ観察者の口調で獣はそう言った。
うつぶせに倒れた褐色の悪魔を見下ろして。
『人間も悪魔も星霜を経て弱くなった。古より不変を貫く我との違いだ』
「……弱くなっただと？」
『この世界にエルラインはもういない』
無敵の自己暗示を突破できる剣士はいないのだと。
世界の原初より生きる獣は、そう宣言した。
『証明されたようだな。我が暗示に敵はない』
魔王の法術、死戦の鴉の力、魔王宮の砲撃、さらにはレンの霊剣ヴィエルジュも通じず、土の始原精霊と火の始原精霊さえ動けない。
『女神法印を渡してもらおうか』
「……断る」
鎌鼬を受けた背中と脇腹からは、今も真っ赤な血がしたたり落ちている。霊獣の尾を受けて塀に身を打ち、重力場に呑まれて岩盤に叩きつけられた。
そんなレンの姿を見下ろすディスカント。
『理解していないな。我が言葉は絶対であると』
霊獣の翼に再び光が灯る。

魔王ヴェルサレムが一目見て危険だと断言した輝きだ。光が発射される前にその射出圏外へ。そのつもりで構えたところでレンの背筋に激痛が走った。

開く傷口。

止まりかけた背中の血が、全身に力をこめたことで再びあふれ出したのだ。

「ぐ……っ……」

痛みが思考を乱し、霊獣が撃ち出す閃光への反応が一手遅れる。

それが決定的な隙となった。視界を覆いつくす獣の光がレンの右肩と右膝へと絡みつく。

「この光は？」

収束して消えていった光。肩も肘も、痛みも無ければ高熱のような刺激も感じない。わずかな違和感さえも与えぬまま――

『剣を捨てよ』

カラン、と音を立てて岩盤へと落下する霊剣ヴィエルジュ。

……え？

……なんだ……なんで俺は剣を手放した？

意識に関係なく、レンは自分の剣を手放していた。

『手と膝とを地につけよ』

右手と右足が動いた。

ディスカントの命ずるままに右膝が折れ、右手が岩盤に吸い付いたように離れない。
左足は立ったまま。左腕も無事。
獣の光を浴びた部位だけがディスカントの命令に逆らえない。
「そういうことかよ……！」
自分自身を無敵と信じて疑わない暗示。
そして他者さえも強制的な暗示によって支配する力。
――不遜極まりし獣。
史上のあらゆる王よりも傲慢で尊大で猛々しい。それがこの霊獣ディスカントなのだ。
続けて撃ち出された閃光の第二波。
それが届く直前、灰色の影がレンと光との間に割って入った。
『……鴉か！』
「貴様の光は三百年前にも見ている。その光を遮る術、用意せぬわけがなかろう」
死戦の鴉の分身たちが影となってレンを光から遠ざける。
そこに駆け込むのは漆黒の大悪魔だ。
「荒治療だ。悪魔の洗脳を貴様にかける」
「痛っ!?」
悪魔の法術円環が自分の右手と右足に浮かびあがり、何万本という針に刺されたような

鋭い痛みに見舞われた。
「跳べ！」
言われるまま魔王とともに後方へ。動く。つまりディスカントの支配下にあった身体の自由が戻っている？
「こうした支配干渉で二つ以上の術がかかった場合、互いの術が相殺しあう。余と奴の支配権がどちらも譲らず、結果としてどちらも消えたわけだ」
「だから洗脳が解けたのか」
「そう。だが奴の閃光はただの洗脳ではない。あの正体は『否定の光』……」
レンの見ている目の前で。
魔王ヴェルサレムが地にくずおれた。
「人間に対しては屈服を強制し、死戦の鴉の分身を消滅させ、そして悪魔にとってあの光は何よりも苛烈な……『浄火』となる……」
「ヴェルサレム!?」
「……わずかにあの光、掠っていたようだ」
魔王の左足が、煙を上げて消滅していた。
そして。
「この場は……余の責任だ、余が時間を稼ぐ……」

――逃げろ。

それが冥界を束ねる王からの一言だった。

「奴の襲撃はルルたちが気づいているはずだ。バオならばこの場の結界も開放できよう。すぐに脱出できるよう身構えろ」

「……何を!?」

「法印さえ奪われなければいい。悪魔法印を奪われて動けぬ魔王と、女神法印を奪われていないお前。どちらに価値があるか考えろ」

「……」

「幸い、余にはまだ――」

「わかった」

言葉が終わるのを待たずにレンは駆けだした。

光り輝く獣へ。

「アンタの言いたいこともわかる。だけど違う。ただ逃げるだけじゃ悪魔法印を取り返せない。何よりも、俺、こいつに負けたくないから」

「貴様、血迷ったか!?」

「死戦の鴉、そこのうるさい主人を任せたぜ」
倒れた魔王のそばから離れようとしない使い魔。
「やめろレン。貴様一人では……」
「俺一人じゃ勝てない？　それだけが理由なら、俺が逃げる理由には程遠いよ」
地に落ちていた剣を拾い上げる。
霊獣ディスカントが最初ではない。精霊に師事してもなお届かない相手がいることも、自分は嫌というほど痛感してきた。
今もそう。
戦うことが結果として時間稼ぎになるのは構わない。だが、最初から逃げる算段で戦うことだけは絶対にだめだ。勝つつもりで挑まなければ――
何のためにキリシェ、フィア、エリーゼ、そして精霊たちから学んできたのか。
……みんなの期待に応えたかった。
……そうだよ。力の差なんてもう嫌ってくらい痛感してるだろ？
騎士王との決戦。
あの戦いで誓ったものが嘘になる。
「いくぜ獣」
『愚かな』

輝く獣は、レンが全力で振るった剣を避けようとさえしなかった。
わずかな手応えもなく霊獣の体表で剣が停止。どんなに力を入れても、鱗に刃が触れたまま一ミリも突きささろうとしない。
『なぜ理解しようとしない』
拒絶の言葉とともに振るわれた前脚。両側から迫る二本の脚の一つを避けたところで、もう一本の脚が頭部をかすめた。
――脳震盪。
頭蓋の外から脳へと至る衝撃に意識が消えかける。一瞬の後に意識を戻したレンを襲ったのは、立つこともままならない頭痛と目眩と吐き気だった。
「……っ……」
両膝が折れて地にひざまずく。
そこへ迫る獣の牙。その挙動をレンが感知できたのは足音や気配ではなく、この強大な獣が全身から発する威圧感ゆえだ。
獣でありながら気配を隠さない。
不遜であり続けること。それが霊獣ディスカントの強さの礎なのだから。
「まだだっ！」
頬の内側ごと奥歯を噛みしめる。

鋭い痛みによって意識が覚醒。血の塊を吐きだして立ち上がり、再び駆ける。
「……正気かっ!?」
倒れたままの魔王が叫んだ。
何度も試したはずだ。精霊は後ろで見守るだけの無力な存在であり、霊剣さえも霊獣ディスカントの前では力を失う。それは何度も確かめた。なのに――
『なぜ抗う？』
「……お前……が、目の前に……いるからだ、ろうが！」
目眩と頭痛とに苛まれ言葉すら明瞭さを失っている。
だが少年の足は止まらない。
その姿は、もはや執念という言葉でさえも喩えるのに不十分だった。
『なぜ走れるというのだ』
「近づかないと剣が届かない」
『ッ！』
霊獣の四つの眼が一気に見ひらかれた。
レンが知らない過去。それは三百年前、この少年生き写しの姿をした剣士が放った言葉とまるで同じものだった。
『……我が暗示の欠損は修復されている』

威嚇する蛇のように首を上げるディスカント。
『大いなる太古より生きる我に、現代に生を受けただけの人間が及ぶ道理はない』
「そうさ」
少年は剣を振りあげた。
息を切らし肩を上下しながらも、襲いかかる霊獣の脚を逆に切りつける。
「それがお前に負けたくない一番の理由だ」
鈍い音。
血煙をあげて吹き飛ばされたのはレンの方だった。
霊獣には傷一つない。それは当然のことだろう。無敵の暗示に守られているかぎりディスカントは無敵。なのに――
『まだ立ち上がるか』
ディスカントは歯を剥きだしに威嚇の姿勢をとっていた。
剣を支えに立ち上がるレンの姿を前に、大いなる不遜の巨獣は察していた。まだ戦いは終わっていない。この人間は何かがおかしい。
あの時と同じ。
何度打ち払っても立ち上がり、不敵な笑みを浮かべて挑んできた人間の剣士と。
『なぜ畏れぬ。我は悠久の時を生き、苛烈なる古代を知る獣なり。この安穏とした現代に

生を受けただけのお前とは存在の格が違うのだ。なぜ我を畏れぬ……』

「……」

『なぜ立ち上がり、我に刃向かい続ける。それを可能とする意思は何処から来る』

射竦める眼光。

沈黙を許さない獣の言の葉を受けとめて。

「お前に怯える理由がない」

レンは、わずかにそれだけを口にした。

「お前より強い奴を知ってるからな」

『それがエルラインだと？　精霊の加護を失ったお前は奴と比較されることさえ適わぬ』

「いいや。そんな過去の話はしちゃいない」

『……なに？』

霊剣ヴィエルジュを水平に持ち上げる。名もなき精霊の加護を受けた武器を携えて、レンはゆっくりと目を閉じた。

「世界録の旅。その中で沢山の物を見て、色んな奴と出会った」

息を吸い、そして吐きだす。

記憶を思い起こしながら。

「俺が今まで出会ってきたのがキリシェにフィアにエリーゼ、それに天使や竜や悪魔たち

だけだったら、たぶん、俺はお前に降参してた」

『……どういうことだ』

身を屈めたまま、霊獣。

『それ以外に何かいるというのか』

「いる」

『精霊とでも言うつもりか』

「違う」

『……』

「思いつかないよな。そうだよ、それが俺たちの決定的な差だ。そして俺が、お前に意地でも負けたくない一番大きな理由だ」

水平に構えた霊剣ヴィエルジュ。

「お前は自分を無敵だなんて言うけれど、俺はそれを違うと言いきれる。だからこそ何度でも立ち上がるんだよ。お前を恐れる必要がないからな」

……自分の目で見てきた。

……だからこそわかるんだ。

本当の強者たち。無敵を自称するこの獣すら、必ずや想像もつかない方法で退けてしまうであろう者が現代にいることを。

『何が言いたい』

「俺が言いたいのはたった一つだ。三百年前の英勇エルラインはきっと凄いよ。その時代から生きてるお前もそうさ。だけどな……」

断言できる。

久遠の時を生きる存在たちが見過ごしてきた真理がある、と。

……悪魔も人間も退化した？

……そんなこと平然と言えるから、俺はお前に負けたくないんだよ。

強者とはエルラインだけではない。

過去、現在、未来。いついかなる時代であろうとも、運命は常に、世界の行く末を託すに足る者を生みだすものなのだ。

人は、それを英雄と呼ぶ。

……現代の人間が、世界の原初を知る霊獣に及ぶ道理はない？

……いいや違うね。

〝ここから先は気迫だけでは進めない。君自身の強い決意が必要になる〟

〝竜と悪魔と天使と、精霊をも引き連れて。お前は何処へ行こうというのだ〟

剣聖シオン、そして騎士王ゼルブライト。

霊獣ディスカントは傲慢な自己暗示によって自らを最強の存在たらしめているが、そん

な仕掛けの一切を排した現在の英雄たちがいる。
少年は、世界を冒険してそれを知った。
「太古を誇るだけの獣が、現在を生きる人間を舐めるんじゃねえ！」
『驕るな人間！』
……何度も何度も負けてきたさ。
……俺はそうやって進んできた。それしかなかったから。
だが不遜の獣は違う。自分が無敵であることに執着するあまり、過去にエルラインに敗北した苦い過去を消し去ることしか考えてない。
「自分の敗北も受け入れられない。そんな奴に負ける理由なんてないんだよ！」
蒼海を想わせる精霊剣を振りあげる。
たとえ精霊の助けを得ることができなくても霊剣ヴィエルジュの力がなくても、この獣にだけは負けられない。
一人の剣士として勝利する。それだけを誓って。
――破砕音。
レンの振りきった剣の切っ先が、目に見えぬ「何か」を斬った。

『……何をした！……』

よろめく不遜の獣。

その周囲を覆っていた空間が大きくたわんだ。世界干渉の言霊によって構成された無敵の暗示が砕け、空間があるべき姿へと修復されていく。

『認めぬ。我は――』

「そうやって傲慢に世界を語るからお前は変われない」

満身創痍の少年が、剣を足下に刺して杖とする。

「来いよ霊獣。お前がどれだけ『無敵』を騙ろうと、俺はその境地を越えていく！」

Record.6 ―― 今を生きる英雄たち

1

ディスカントの自己暗示。
それは単なる心的効果に留まらず、現実の世界に無敵の加護を具現化させる力だ。
この『いかなる敵も霊獣（ディスカント）を打ち破ることはできない』という加護の下で法術、武術を問わずあらゆる干渉を無効化する。
だがディスカントは無意識のうちに葛藤していた。
〝なぜ立ち上がる〟
人間の剣士による太刀は無効化した。一度や二度ではなく三度、それが無限回におよぶ攻撃でも無効化できることには確信があった。
だが、それはディスカントも同じだった。
どれだけ攻撃してもこの人間を倒せない。
霊獣を畏れるどころか、決して敗北を認めることなく何度でも立ち上がってくる剣士。

その姿を前に、気づいてしまったのだ。

遙か格下であるはずの人間と引き分けることしかできない霊獣は、もしや、自分自身で思っているよりも弱いのではないのか？　と。

それが、ディスカントの自己暗示に亀裂が入った瞬間だ。

すなわち『いかなる敵も霊獣を打ち破ることはできない』という一見すれば必勝の加護がありながらも、他方で『その霊獣も敵を打ち破ることができない』という逆説が成立する。そのことに気づいてしまったのだ。

かつて剣帝と呼ばれた男を相手にした時と同様に。

……たった一人の人間さえ倒せない。

……遙か格下の存在であるはずの人間と引き分けることしかできない霊獣。

自分が弱いことを知った時――

大いなる霊獣から、『自尊』という強さの根源が剥がれおちたのだ。

『我を傲慢だと？　だがな、我が暗示に傷をつけただけで勝利を確信したというならば、それこそ傲慢だというものだ』

「そんな気はさらさらねぇよ。ようやく五分だ。ようやくな」

終焉戦争を生き残り、沈黙機関として暗躍していた一体だ。無敵の鎧を剥いだところで

肝心の本体が弱いわけがない。

……本当にここからだ。炎の精霊剣が使えないのに変わりはない。

……一人の剣士としてコイツに勝てるかどうか。

霊剣を両手で握りしめる。

「往くぞ」

疾走る少年と、それを迎え撃つかたちで迫る獣。

両者が同時に距離を詰める。

大きく前脚を振りあげるディスカントに対し、レンは岩盤に身をすりつけて滑りこんだ。

ディスカントの六本脚の隙間をくぐるかたちで滑　走。

その懐へと潜りこむ。鱗に包まれながらも無防備な獣の腹部へと、レンは全力で霊剣ヴィエルジュを振るい上げた。

――硬い感触。

予想外の衝撃を受けたのは、剣の柄を握るレンの両手だった。

「硬い!?」

霊獣ディスカントが纏う「鎧」は確かに破壊した。

無敵の暗示に守られている時のように、こちらの攻撃が無効化された感覚はない。自分の剣撃は、確実にこの獣に届いている。

だが、それを抜きにしても霊獣の外皮はあまりに硬すぎた。

『理解したようだな』

こちらを見下ろす霊獣ディスカント。

『人の子であるお前に、我を傷つけること能わん』

ガリア大炎山で、レンはこの霊剣ヴィエルジュで炎の将魔を撃破した。

だがどれほど強力な力を宿していようと、肝心の精霊の力が働かなければ霊剣といえどただの頑丈な剣でしかない。

『たとえ我が暗示の綻びを突破しようとも、存在の「格」が違うと知れ』

霊獣の翼に光が灯る。

蛍光のように淡く、そして陽炎のようにゆらめく光。

「さっきの光かっ!?」

あの光を浴びた瞬間に否応なく身体の自由を支配される。先は魔王ヴェルサレムの機転によって拘束から逃れたが、二度同じ対応を許す相手ではない。

光が一際大きく膨れあがる。

その刹那、レンもまた跳んでいた。

石畳のつなぎ目に足先を引っかけて、そこを軸に身体を捻って旋回。肩が地面に擦れるほどの低姿勢で霊光をすり抜ける。

『まだ抗うか』

身を低く構える霊獣。

「抗うためじゃない。お前に勝つためだ」

彼我の間わずか十メートル足らず。

既にディスカントの間合いに踏みこんでいる決死の瞬間、レンが想起していたものは、覇都で相まみえた最強の剣士との戦闘だった。

……ゼルブライトは……鋼の剣でもあれだけの破壊力を振るってた。

……今の俺に、あの一撃に代わる何かができれば。

「土の始原精霊、火の始原精霊」

自分のはるか後方。

不安げなまなざしで見つめてくる精霊二体へと、レンは小さく頷いた。

「お前たちが動けない事情があるのはわかった。無理は言わない。一緒に戦ってくれとも言わない。そのかわり――――見守っててくれ」

『ッ！』

『ワカッタ！』

ぱっと表情を明るくする精霊二体。

その言葉に後押しされて、霊獣の懐へと潜りこむ。

『まだわからぬか。剣一つで何ができる』

「お前に無敵の暗示は残ってない。それなら」

世界創造の時代より生きながらえし賢者にして、終焉戦争で英勇と相まみえた獣。

その四つの眼光に睨まれながらも。

「お前を倒すことだって不可能じゃないはずだ！」

輝く剣を両手に握りしめる。

『貴様っ!?』

霊獣が眼をみひらいた。察したのだ。自分の狙い。非力な人間にも、この大いなる霊獣を打ち破る可能性が一つだけ残っている。

「エルラインにつけられた傷がある。最初にそう言ったのはお前だぜ」

獣の傷。

かつてエルラインに無敵の暗示を破られた敗北の証がここにある。

――額の傷。

純白に輝く体表のなか、唯一、漆黒に刻まれた剣の痕。

たとえどんなに強固な体表に守られようと傷痕だけは別。その部位だけは今も脆いはずなのだ。人間の膂力で振るう剣でも通用するかもしれない。

「届けっ！」

霊獣が反応するよりも先。
自らの膂力に自重を乗せて、剣を霊獣の頭部へと振り下ろす。そして。
『……っ……！』
重い手応え。
レンの目の前で、無敵を称する巨大な獣が初めてよろめいた。
「届いた!?」
「まだだ、それでは手緩いっ！」
魔王ヴェルサレムの怒号がこだまする。
魔王の意地か。あるいは右腕と左足とを消滅させられるという屈辱への怒りの表れか。
満身創痍ながらも割れた杖で身体を支え、冥界の盟主が立ち上がっていた。
「常闇の宝珠たち」
霊獣ディスカントを取り囲むように顕現する七つの暗黒球。
「爆ぜろ！」
ヴェルサレムの宣言とともに暗黒球が破裂。
巨大な球体が無数の刃となって霊獣の全身へと突きささるや、表皮を破って体の奥深くへと浸透し、身体の中で煉獄の炎となって全身を灼き焦がす。
……決まった？

今まで届かなかった剣、そして魔王の法術がようやく直撃した。
身体中から黒い煤を上げて身悶える霊獣を見上げ――
『小賢しい！』
手負いの獣が怒りの咆吼を上げたのは、その時だった。
完全なる霊的存在――その咆吼によって生まれたものは音ではなく、不可視の波動をともなった破壊の衝撃波だった。
『貴様らが我を凌駕する未来など、無い！』
降魔の戦盤の土台であった石畳。
かつての魔王戴冠の儀にも耐えぬいた法力の結晶石が、霊獣ディスカントの波動を浴びてまたたく間に崩壊し、砂塵となって消し飛んでいく。
『失せよ！』
「っ、……はっ……！」
防御も間に合わない。不可視の波動を全身に打ちつけられ、レンと魔王はそれぞれ決闘場の石壁へと叩きつけられていた。
「――――っ」
背中に受けた衝撃と激痛とに意識が一瞬断ちきられる。
砂塵の舞う視界のなかレンが目にしたものは、全身を煉獄の炎で灼かれながらも、倒れ

た魔王へと飛びかかる霊獣の姿だった。
『見覚えがあろう。死戦の鴉の死霊の火。お前が我に仕掛けたものだ。獣の属性であれば、魔獣の力とて――』
霊獣の頭上に生まれる死霊の鬼火。それが、無数の光線となって魔王の全身へと降りそそいだ。
『再現は容易い』
超高熱の白刃。閃光が何百本と降りそそぎ、魔王の全身を刺し貫く。
「ヴェルサレム!?」
レンの叫びに対する返事はなかった。
石畳に縫いつけられるように倒れる魔王。片手と片足を失い、降りそそぐ閃光に全身を灼かれ、もはや意識が残っているのかもわからない。
「……くそ！」
激痛を訴える全身を叱咤し、剣を支えに立ち上がる。
だが間に合わない。
レンが駆けだすよりも先に、霊獣ディスカントは再び力の発動へと至っていた。
『終焉なり』
霊獣から放射される鬼火。

それが無数の閃光となって魔王へと迫り。

――冥府の凶星、天から墜ちよ――

降りそそぐ閃光が、そのさらに上空から墜落する魔星に押しつぶされた。

……空が墜ちてきた。

喩えるならばソレがもっとも適切だっただろう。

上空を覆っていた灰色の雲と大気と極光とがまたたく間に凝固。超重量の魔星と化して決闘場へと墜落したのだ。

『ッ！』

墜落した魔星が霊獣の翼を押しつぶし、全身を大きく拉げさせる。

「騒がしいと思えば終焉戦争の獣か」

コツッ……

魔王戴冠の決闘場に、硬い靴音が小さくこだまする。

「妾は寛大だ」

冷たく混沌とした漆黒の障気。

それが魔王ヴェルサレムを覆うように渦を巻き、みるみるうちに収束していく。

「妾の屋敷に土足で踏み入ったことには目を瞑ろう。大事な降魔の戦盤を荒らしたことも、まあ見逃してやらんこともない。だがな……」

黒の障気をまとう長身の少女。

「妾の愚弟、そして妾の旅団の仲間を襲った、その厚かましき所業は例外だ」

傷ついた魔王を抱き起こす、妖艶なる美貌の悪魔がそこにいた。

褐色の肌に、光の加減で黒にも茶にも映る長髪。強い意志を宿した瞳は赤褐色に輝き、魔王を抱えながらじっと自分を見つめている。

……あの面影？

……俺は……彼女を知ってる？

容姿はまるで別人。結わえていた髪がほどけ、その衣装も黒の障気にあてられて禍々しいものに変化しているが……目の前にいる彼女は……

『魔皇姫エリゼリス？』

「ふん。獣が、その表情からすると妾の顔は覚えていたか」

霊獣の怒号を微笑でかわす悪魔の少女。

そして。

「レン走れ！　妾の美貌に見とれるのは後にしろ！」

「……エリーゼ!?」

「なんちゃって？　驚いた？」

くすっ、と無邪気にウィンクする彼女。

少しだけ照れくさそうにはにかむ微苦笑が、何よりも明確にレンの予感が正しいものと教えてくれていた。

――エリーゼ。

この妖艶な悪魔こそが彼女本来の姿であると。

だからこそ、仲間に告げられるままレンは霊獣へと駆けだした。

「たとえ霊剣が効かぬ相手であろうとも一人の剣士として霊獣に挑む。その気概は好し。だが一人で背負う必要はないぞ。お前には仲間がついている」

『哀れな。その身で何を吼えるエリゼリス』

瀕死の弟を抱き寄せる姉。その姿を睨みつける獣。

大いなる霊獣は即座に察していた。かつての魔皇姫の姿であっても、その姿そのものが禁呪による一時的なものに過ぎないと。

彼女の額には既に大粒の汗が浮きでている。

もとより虚構精霊との戦いで消耗しきった身体だ。ようやく動けるまでに復調したとはいえ、禁呪を連続で発動するのは負担が重すぎる。

にもかかわらず――

『我らの声を解さぬ悪魔の盟主よ。じきにその姿も限界だろう』
「ん？　いま何か吼えたか？」
魔皇姫に、動じたそぶりは欠片も無かった。
「あいにくと妾に貴様の声は届かぬ。何を吼えようと粗野な遠吠えと大差ない」
『虚勢を……三百年前の戦いでお前は力と肉体とを失った。転生した今のお前は名もなき悪魔の一体に過ぎぬ！』
「牙を剥きだしにしたその威嚇。傲慢な獣よ、それは自身の力への過信ゆえか？」
魔星に動きを封じられた獣を見下ろす先代魔王。
そして。
「いや……お前だけではないな。かつて本当に傲慢であったのは妾たちの方だったのかもしれぬ。妾もフィアもキリシェも、己の力に絶対の自信を抱いていた。そして同じく、エルラインの強さにも絶対の信頼を置いていた。だからこそ」
実弟を左手で抱きかかえながら。
黒髪をなびかせるエリーゼが、残った右手をこちらに向かって差しだした。
「あの時には、こんなことは考えもしなかった」
黒の障気が風に舞う。
レンが駆ける降魔の戦盤。その中心へと、エリーゼから放出された黒の障気が収束し、

織り上がるように凝固していく。
顕現したのは、一本の長大な黒鎗だった。
――冥鎗マリアブレイズ。
法術を反射する『反の虚構精霊』をも強引に打ち破った至宝。
エリーゼ自らの法力によって具現化させた結晶だからこそ、その鎗にもまた魔皇姫エリゼリス・ディ・マリアブレイズの名を冠する。
「さあレン、アタシからとっておきの贈り物だよ」
エリーゼの微笑。
「受け取って」
『まさかっっっ!?』
霊獣が発する、最初で最後の怯え。
だが気づくのが遅すぎた。
三百年前にエルライン剣帝旅団と相まみえていたからこそ、その強さを知っているからこそ、この尊大なる獣もまた気づけなかったのだ。
旅団『再来の騎士』とは――
エルライン剣帝旅団の模造ではなく、その新生であることに。

……そうだろうレン？
……妾たちもまた三百年前から変わることができた。その証を見せてくれ。

魔王が人間に武器を託す。
――創世から現代にいたるまで例がない。
そんな奇蹟の瞬間を現実にした少年が、波動の渦巻く中心へと身を投じる。
「霊獣、お前は無敵だった頃の過去から抜け出せなかった」
疾走ながら。
冥鎗マリアブレイズを地から引き抜き、空へと掲げる。
霊剣と同じくまるで重さを感じない法術の結晶。その先端へ、黒の障気が渦を巻きながら収束していく。
そして。
「だからこそ」
『この――――っ』
「今を進む俺たちの勝ちだ」
硬く澄みきった音。
レンの振るった黒鎗の一撃が、今度こそ霊獣ディスカントの額を打ち貫いた。

2

極彩色の植物が花咲く中庭。
冥界で絶滅の危機に瀕した植物たち。魔王宮で保護された稀少植物たちの楽園と言っても過言ではないだろう。
樹海にも匹敵するその広大な庭園で――
「エリーゼ様から念話です。降魔の戦盤に侵入した獣は退散したと」
「……だそうだぞ？」
氷の将魔ルルフォニカの報告に、キリシェは口の端をつりあげた。
挑戦的な口調と不敵な微笑み。
それは隣で拳を構えるフィアにでもなければ、炎を滾らせる炎の将魔にでもない。
「といっても、お前もそれは察知しているだろうがな」
『――――』
相対するのは、全身が光に透けた霊的波動体。
面立ちこそ金髪の人間に似ているが、その半透明の全身や光り輝く装束、湛えている威圧感も、すべて人間など比較にならない高次の存在だ。
「あとはお前が奪った悪魔法印を奪い返せば片が付くわけだ」

『――――――』

「無言か。あるいは何か喋っていたとしてもロクなことではないだろうが」

三百年前から変わらない。

この精霊によく似た存在は何一つ言葉を発しない。どのみち喋っていたとしても、精霊の声が聞こえないキリシェたちが言葉の意味を知ることは永久にないだろう。

……もしかしたらレンなら。

……こいつが何を喋っているのかわかるのか？

ただ一つ理解できていることは、この光り輝くモノが明確な敵意をもって自分たちを襲撃してくるということだ。過去も現在も変わらずに。

「アシェンディア、腕はどうですか？」

「別に。しばらくすれば元通りだし」

左肘から先が消滅したアシェンディア。

沈黙機関イシスの『浄火』によって障気と法術と肉体とを同時に消滅させられたことによる損傷だが、その光を受けた彼女に動揺はなく、それを尋ねたルルフォニカも、あくまで事務的な問いであるかのような淡々としたものだ。

誰もが理解している。

この敵はそういう相手なのだ。

精霊とまるで同質の霊的波動体であることから、存在の「位」で見るならば竜も天使も悪魔も、この敵の前では「格下」に等しい。

さらには精霊など比較にならないほど攻撃的なその気性。戦闘の選択肢を誤れば、この顔ぶれでさえ全滅する危険性がある。

「お気を付けなさい。あの光、先代魔王様に致命傷を与えたものと同質です。あなたまで転生が必要になりますよ」

「問題ないわ。おかげで熱くなれそうだから」

紅蓮の腕を振りあげる真紅の悪魔。

炎の化身と言われる由縁――アシェンディアの滾らせる激昂が膨れあがるほどに、その炎と法術とが限界無く強大になっていく。

追い詰めるほどに凶悪になっていく。それがこの炎の将魔なのだ。

「次で仕留めます。キリシェ様、フィア様もご用意を」

氷の将魔ルルフォニカが前へと進みでる。

彼女が指を打ち鳴らそうとする刹那。

『――――』

燦々と輝きを放つソレが、一瞬にして消滅した。

「……消えた？」

「法印の奪取が最優先だったようですね。三つの法印のうち一つを奪った時点で、私たちが終焉の島に向かうことはできないと判断したと」

握っていた拳をひらいてフィアが嘆息。

「あの者たちの狙いとして考えられるのは二つです。一つは終焉の島に上陸して世界録を消滅させること、そしてもう一つが終焉戦争で彼が戦った『アレ』を復活させること。ただし後者は本当に可能なのか未確定です。なにしろあの時に……」

「言うな。わかってる」

何かを訴えるようなフィアのまなざしに、キリシェは弱々しく首を横にふった。

「確証はない。自分の目で確かめるほかないだろう？」

「ええ。そのためには終焉の島にたどり着くことが絶対条件です。あの者たちより先に島に上陸し、何があっても世界録を守りきる。そうでなければ」

「……災厄の再来は避けられない、か」

そっと目を閉じて。

キリシェは、光り輝く者の立ち去った中庭にしばし立ちつくしていた。

3

「むぅ……危うく転生の儀が必要になるところであった」

玉座で安堵の息をつく魔王ヴェルサレム。
霊獣ディスカントとの戦闘で身体のほぼ半分を失いながらも、椅子に腰かける姿はあくまで魔王らしい威厳を保っている。
「さて皆の者。中庭の審門を守り通したことは大儀であった。屋敷の被害も最小限であると報告を受けている。問題は奪われた悪魔法印についてだが……あ痛っ!?」
「なぁにが大儀よ、この愚弟！」
椅子の後ろから飛びだすエリーゼ。
レンが見た妖艶な魔皇姫の姿から一転、今は見慣れた幼女の姿に戻っている。
「悪魔法印を奪われたのはア、ン、タでしょうが！」
「……面目ない」
弱々しく項垂れる魔王の姿をしばらく見つめ。
エリーゼが、そっと顔を背けて呟いた。
「……心配かけて……もっと強くなんなさいよ……」
「ん？　姉ちゃん今なにか言った？」
「うるさい黙れ！」
再び弟を蹴りつける褐色の幼女。
その光景を見上げ、フィアが落ちついた様子で前に進みでる。

「レン、傷の具合はどうですか」
「……俺？　ああ、もうだいぶ良くなったよ。フィア先輩のおかげで傷もひとまず塞がったみたいだし」
フィアの治癒法術で出血は止まった。
だが本当は……霊獣から受けた傷は塞がったものの、鈍い痛みが鎮まるどころか身体の奥で今も疼き続けている。
「まだ顔色がよくありません。今日はとにかく休んでは？」
「うん。だけど気になってさ」
穏やかな面持ちで見つめてくる大天使に、レンは精一杯の気丈を装って頷いた。
「霊獣は追い払ったけど、イシスって奴から悪魔法印を取り返さなくちゃいけないから。どうすればいいのかなって」
「……難しいですわ。すぐには方法が思いつきません」
溜息で応えるフィア。
「状況を整理しましょう。終焉の島を閉ざす結界を越えるには法印が三つ必要です。そのうち女神法印をレンが、竜法印をキリシェが持っている。そして悪魔法印をイシスと名乗る沈黙機関に奪取された状況です」
自分たちの旅を妨害するだけなら法印は一つ奪えば十分。

だが沈黙機関イシスと霊獣ディスカントは、法印を全て奪うつもりで襲撃してきた。それを踏まえるならば――

「フィア先輩。沈黙機関が三つの法印を狙ってるってことは、あいつらも終焉の島に上陸することが目的だって考えていいんだよな」

「私もそう予想していますわ。ゆえに覚悟しなくてはいけないのが法印の奪い合いですね。沈黙機関は必ずまた仕掛けてくるはず。その駆け引きで有利なのは――」

「あいつらの方だろ」

フィアの言葉を待たずしてレンは続けた。

「冥界の魔王宮でさえ襲撃されたんだから、たぶん俺たちがどこに隠れても沈黙機関は居場所を突き止めて襲ってくる。だけどその逆に、俺たちから沈黙機関に反撃に出ることができないから……」

「ええ。あの者たちが世界の何処に潜んでいるのか、私たちには見当がつきません」

一方的に奇襲を受けるのは自分たちの方なのだ。

いつどこで襲撃してくるかわからない終焉戦争の災厄たち。それを撃退して悪魔法印を奪い返すのは、どれほど困難を極めることだろう。

……なら、他に方法はないのか？

……悪魔法印を奪われたままでも、終焉戦争の決戦地に上陸できる方法は？

「なあエリーゼ？　たとえばだけど」
「んー。悪魔法印なしで終焉の島に行く方法でしょ。難しいね」
自分の意を察したエリーゼが玉座の前で腕組み。
「ルル、そんなわけで何か良い方法ない？　エルラインに頼まれて悪魔法印を作った時、ルルも一緒に手伝ったんだよね」
「はい。ですが、法印なしであの結界を突破する方法となると……」
陰を落とした表情で答える家政婦長。
「終焉の島を開放する鍵……もともと魔王様が作られたものだから時間をかければ……いえ、でもあの『嵐』を越える手段が見つからない。人間であるレン様では……となれば審門の転移機能を使って？　いえ、でもやはり……」
ルルが眉間に皺を寄せて目をつむる。
魔王の側近であり最古の五大災でもある彼女がここまで言葉を詰まらせる姿が、状況の難しさを何よりも明確に物語っていた。
「あ、あのさ。やっぱり法印二つじゃ無理かな？　島の封印を突破するの」
「難しいでしょうね」
顔を上げたルルが苦笑い。
「法印を二つ所有したレン様が、悪魔法印なしで島の封印に触れるとなると」

「……うん。そうすると？」
「全身が二百個くらいに分解されて海の藻屑になります」
「想像以上に悲惨すぎるだろそれは!?」
ルルが苦笑するのも納得だ。
「たとえ私であっても同じことです。ゆえに一番の正攻法は『奪われたものを奪い返す』ことでしょうね。イシスと名乗ったという相手から」
魔王宮が沈黙に包まれる。
そう、誰もがわかっているのだ。
終焉戦争の決戦地にたどり着く最善手は、法印を奪い返すこと。
「みんなで考えないか？　天界の女神とかカルラにも知恵をもらってさ。法印を取り返す手段でも、他の案でも何でもいいんだ。とにかく終焉の島に行く方法を……！」
「私に一晩の猶予を下さい」
組んでいた腕をほどき、自身の胸元に手をあてるルル。
「終焉の島の封印について検討してみます。今日はここまでにいたしましょう……皆様、特にレン様は疲労が激しいでしょうから」
「俺？　ありがとう。でもさっき言ったとおり少しは平気だよ」
戦いの痛みと緊張が、今も鎮まらずに意識を覚醒させている。

部屋に戻ったところで眠れる気がしない。
「エリーゼ、あいつらって終焉の島で何を企んでるのかな」
「あいつらが島に入りたがってる目的？　んー、一つ確実だろうなって思うのは世界録を狙ってることだよね。あとは……こればっかりはアタシの方が聞きたいよ」
肩をすくめるエリーゼ。
「どうせロクなことじゃないでしょっていうのが本音だけどね」
「……そうだよな」
精霊の声が届かない悪魔は知りようもない。
だが自分だけは、あの場で確かにイシスの宣告を聞いていた。
この世界から竜と天使と悪魔とを排除するという宣告。だが、その目的を持ったうえで終焉戦争の決戦地に向かう理由は何だ？
「レンどうしたの？」
無言のままの自分を見て首をかしげるエリーゼ。
「何か気がかり？」
「いや大丈夫だよ、考えをまとめてただけ。沢山のことがあったからさ」
不安を悟られないよう笑顔を作ってみせる。
終焉戦争の災厄が掲げる目的は、おそらく三百年前から変わっていない。

そして法印の奪取という危険を冒してまで襲ってきたということは、終焉の島に、あの者たちが目的を達成するのに必要な何かがあるからと考えるのが自然だろう。

……もしかして。

……それが世界録だっていうのか？

終焉戦争の災厄までもが世界録を狙っている。

世界録の入手が狙いか、あるいは世界録の消滅が狙いなのか。

そのどちらかは知るよしもないが――

「フィア先輩」

隣に立つ彼女にふり向く。

「まだ少し気が早いのかもしれないんだけど、終焉の島……最後の目的地になるかもしれないんだよな」

「そうですね。法印を手に入れられれば」

しっとりとした口調で頷く金髪の大天使。

「世界録を見つけるという、私たちの旅団としての目的も果たされることかと思います。沈黙機関との最後の戦いも待っているでしょうが、これまでの旅の一つの終着点であることは間違いないでしょうね」

「旅の終着点か……」

全身に残る傷の痛みを堪えしのぶ。
包帯を巻き直した霊剣の柄に手をそえて、レンは唇を噛みしめた。
「たどり着くさ。すべての真実と世界録がそこにあるんだから」

Interval

ソレは、世のすべてから独立した空虚な空間だった。
そこに至るための扉もなければ出口もない閉鎖世界。都市の喧噪や人の気配、そういったものが欠落……いや切り捨てられているというべきか。
秘奥領域『隠者の小部屋』。
世界最大の軍事都市・覇都エルメキアの城内に隠されたこの場所は、三人の賢者たちの思索の部屋だ。研究の邪魔となる者は立ち入れず、また思考を乱す雑情報もすべて切り捨てられた世界。
「いつ来てもここは味気ないな」
漆黒の空間を見わたして、王立七十二階位特務騎士団の第二位『外法騎士』カサディンはつまらなさそうに口にした。
「賢者を名乗るならば書物くらいは置いたらどうだ？」
その言いぐさに。
『図書館のような書棚と蔵書をかね？』

『必要なかろう。なにせ欲しい知識はすべて覚えてしまっておるからの』
『私たちは研究者なの。本に書かれているような過去の知識は必要ないわ。どんな本にも書かれていない未知の探究こそ本懐だと思わない？』
レスディンと名乗る、知性を湛えた男の声。
ギスレムと名乗る、嗄れた老人の声。
そして蜷と名乗る、妖艶な女性の声。
三者三様の声が響くその先には、未知の言語が刻まれた黒の石碑があった。
碑文の三賢者――遙か古代に隆盛を極めた神性都市シィエラミリスの住人にして、古代召喚術の研究者たち。
もっともカサディンの前にそびえる石碑は研究者たち自身ではなく、その思念を極めて忠実に再現し、それを古代召喚術によって召喚する失われた技術だが。
『そしておめでとう。いよいよ序列二位に昇格か』
「……覇都王家の動きまで偵察済みか？」
『偵察とは言葉が悪い。儂らはとても熱心に世界を観察しているだけじゃよ』
『説明の手間も省けるでしょう？』
「ではその説明とやら、私がここに来た理由も省いて構わないな？」
艶笑を含ませた蜷の声音に、カサディンもまた挑発的な口調で返す。

「貴様らのことだ。冥界での動きも察知してるはず」
『法印奪取の件かね？』
そう答える研究者の声には、いつにない決意の感情がにじみ出ていた。
『なるほど、しかし予想の範疇ではあるが計画を早める必要があるな。法印が沈黙機関の手に渡った以上、猶予はあるまい』
『終焉の島の場所を授けるとしよう』
『王立七十二階位特務騎士団、あなたたちが世界録を手にしなさい』
「言われるまでもない」
感情を映さぬ氷のまなざしでカサディンが首肯。
「だが沈黙機関はどうする？　お前たちの話が本当ならば、アレから法印を奪うのは手を焼くぞ」
『何も問題はない』
『言ったであろう。そのための虚構精霊だ』
『これで私たちの悲願も達成される。本当に楽しみね』
三枚の碑文から生まれる声が小さくふるえる。
まるで本物の人間が肩を揺らして嗤っているかのように。
「というわけだ」

振り返る序列二位。
嗤う賢者たちではなく、カサディンの視線は背後に控える青年へと注がれていた。
「『光り輝く者』の殲滅。動いてもらう」
「はい」
素直に頷く白髪の青年。
その隣に虚構精霊を従えて、ゼルブライトに代わる新たな序列一位『邪剣上』王蛾は、空っぽの微笑でそう口にした。
「楽しみです」

星の灯。
白砂でできた砂丘の上で、ダンの目に映ったのは夜空を埋めつくす星の瞬きだった。
……夜？
……だけどここはどこだ？　俺は……ついさっきまで魔王宮に……
「地上です」
仰向けに倒れた自分の頬に、少女の手が優しく触れた。
冷たくも温かくもない不思議な感触。

「バネッサ湿原から少し座標が逸れてしまいましたが問題ありません。朝になったら獣人さんと大妖精さんを迎えにいきましょう」
「待てよ……おい、冥界のあいつらは!?」
背中に砂粒をつけたまま大慌てで起き上がった。
冥界で出会った顔ぶれがいない。突然に魔王宮で大きな爆発音が聞こえて、そこから脱出してきたのは自分たち二人だけ？
それに、どうやって冥界からここまで脱出してきたのかもまるで記憶にない。
「ミスティ、あいつらは――」
「団長」
「……っ」
ミスティにしがみつかれ、ダンは否応なくその場に立ちつくした。
「お願いです。もう時間がないから」
じっとこちらを見上げてくる白髪の少女。
「わたしが一緒にいられる最後の時間を、団長とリンさんとシルクさんと一緒に過ごさせてほしいんです」
「……ミスティ、そりゃお前どういう意味だ」
「黄金の夜明けに迷惑はかけません」

気丈な微笑で応じる少女。

「この世界に居座る『よそ者』を排除して、わたしたちは本来の役目に戻るだけ。それが世界の正しい姿だから」

「沈黙機関の正体が、精霊……」

「というのが僕の今のところの推測だね」

静まる礼拝堂にこだまする剣聖の声。

翼の生えた少女像に指先で触れるシオンが、その双眸をわずかに細めて。

「僕がカナンに来た理由は、この像をもう一回見たかったから。僕らの知る精霊と大きく違うこの少女像が、なぜ精霊の姫だなんて呼ばれていたのかなってさ」

「……レンには、大昔の人間が神格化したんじゃないかって話をしたわ」

精霊の姫は実在が確認できていない。

現代では、過去の古代詠唱士が神格化されて崇拝されるに至ったのではないかと言われていると。そう話した記憶がある。

けれどシオンの話を聞いた今なら、それは違うと言いきれる。

……思考が澄んでいくのを感じる。

……まるで曇っていた鏡を磨いて綺麗にしていくみたいに。

「私としたことが恥ずかしいわね」

息を吐きだして、エリエスは大げさに首を振ってみせた。

「精霊信仰の布教に追われて、こんな当たり前の事実に目を向けることも忘れていたわ」

「思いあたることがあったかい？」

「ええ。この世界に住む精霊は、私たちが知ってるモノだけじゃない。シオンが言いたいのはそういうことでしょ？」

エリエスは竜姫、大天使、先代魔王と何度となく接している。

しかしそれを精霊が嫌がった素振りはない。

「もしも終焉戦争の災厄の正体が精霊だとしたら、風の始原精霊や水の始原精霊が三大姫を見た時に攻撃しないとおかしいことになるわ。それに三大姫たちだってレンが精霊を連れるのを見過ごすはずがないもの」

「その通り。そして、これに関してもう一つ気になる存在があるんだ」

人差し指を遙か西の方角へと向けるシオン。

「精霊であって精霊でないもの。僕たちはソレを覇都で目撃している」

「虚構精霊ね」

「そう。あの虚構精霊を見た時に、沈黙機関に対するこれまでの仮説が組み上がったんだ。

そこでエリエスに意見を聞きたかった。精霊の多様性――僕らの知っている精霊とは別に、終焉戦争の災厄となりうる精霊が存在するという説について」

「……可能性はあると思うわ」

口元に手をあてて黙考。

「だとすれば、判明しているかぎり精霊の区分は三つよ。風の始原精霊や水の始原精霊のような精霊。それに虚構精霊。最後が、終焉戦争を引き起こした災厄よ」

精霊――虚構精霊に怯えることがわかっている。

虚構精霊――終焉戦争の災厄に復讐する道具として造られた。

終焉戦争の災厄――精霊に似た「何か」と思われるもの。

「……でも、だとしたらこの像は何なのかしら」

エリエスの指先が触れたものは、埃をかぶった「精霊の姫」の像だった。

精霊信仰の中でも一番古い聖典に名前が記されている。なぜこの少女が、全ての精霊の頂点に立つ存在と崇められてきたのだろうか。

実在するのであれば、自分やレンがその声を聞いてもおかしくないのに。

「もう一度、全てを調べ直そうと思うんだ。まずは覇都で虚構精霊の研究資料をどうにか

して手に入れたい。そして次に」

少女像をまっすぐ見つめ、剣聖は言葉を続けた。

「神性都市シィエラミリスを見つける。古代召喚術の知識が現代にわずかでも伝わっているんだから、あの都だって世界のどこかに遺跡として残っているはず。そこに沈黙機関の正体と目的を解き明かす何かが眠っているはずなんだ」

「そんな幻の都を!? 本当に遺跡が残っているのかどうかもわからないんでしょ？」

「それが真実に至る道ならば、躊躇する理由にはならないよ」

一切の棘を感じさせない優しい微笑。

それが過剰な自信から来るものではないことを、エリエスは知っている。

この男はそういう者なのだ。

気の赴くまま歩いて、世界を旅して、知りたいことがあったら調べてみる。

ただ己の意思で歩むがままに歩むだけで人々から讃えられ、剣聖と敬われ、世界の危機であった終焉戦争の真相さえも解き明かそうとしている。

それは何という天恵だろう。

……英雄たちの狂騒に加わろうと藻掻くのがレンだとしたら。

……このシオンは、きっと……

生まれながらの英雄。

まさに英勇となるべき天命を授かった剣士なのだろう。そしてそんな彼だからこそ、惹きつけられるのは人間だけではない。

「見てみたいんだ。すべての神秘を解き明かした後の世界に、いったいどんな光景が待っているのかを」

『シオン、嬉シソウ？』

『シオン嬉シイ、ワタシモ嬉シイ』

青年の周囲に現れる二体の守護精霊。

威光の徴――光脈の守護精霊。

福音の徴――唱歌の守護精霊。

そしてそれだけではない。彼の背中に取りつけられた二本の精霊剣も、それに呼応してキラキラと光を放ちだしたのだ。

二体の守護精霊と、二本の精霊剣の所持者。

四体もの精霊に愛された現代の最高位剣士が、『真実』に向けて動きだす。

Epilogue　わたしと、行くか？

青く輝く夜。
冥界の空を覆っていた真紅の気流が地平に沈み、冷たい青の気流が北の永久氷土から吹きこむ時間。
眼下の岩がみるみる霜に覆われていく様子を見下ろしながら。
「……エルラインはこの寒さも野宿で過ごしたのかな。たった一人で冥界に来て、襲ってくる悪魔や魔獣と戦いながら魔王宮を見つけて」
レンは、窓枠に手を乗せた姿勢で呟いた。
〝覚えておけ。あの男は一度たりとも己の目的に正義という盾をかざしたことはない。奴ほどに貪欲で利己的で、そしてそれに命を燃やして挑んだ者はいなかった〟
死にものぐるいだったに違いない。どんなに強い人間であっても、こんな過酷な秘境をさまようことを辛いと感じないわけがない。

……いや天界も竜の渓谷もそうか。

……ずっと一人で戦ってきた剣士だったんだよな。

人間には理解されず。竜と天使と悪魔からは目の敵にされていただろう。それでも彼は世界を代表して『光り輝く者』たちに挑み、終焉戦争を鎮めたのだ。

「そして世界録を遺した、か……」

口から零れた言葉と吐息。

冷たいガラスに触れて、白く淡い霧となる。

「もうすぐだよ。もうすぐアンタが書き残したものを見つけられると思うんだ」

三百年前に同じ冥界を見ていたであろう剣士へ。

「なんか変な感じだけど、感謝……って言えばいいのかな。アンタがキリシェやフィア先輩やエリーゼと旅をしてたから、俺もその三人と出会うことができたんだと思う」

思い返す自分の足跡。

ここまで辿ってきた道は、決して自分だけの道ではなかった。

「だからこそ、なおさら世界録を見つけたいって思うんだ。アンタの残した最後の手記を見つけることが、俺からアンタへの恩返しになるのならさ」

最初は竜の渓谷だった。そして天界から冥界へ。

大きな実感はないけれど、かつての英勇が旅した道のりを一つ一つ辿ることができてい

る。そんな気がする。

……トン。

扉が控えめにノックされたのは、その時だった。

「……わたしだ」

「キリシェ？」

通路の明かりに照らされて浮かびあがる人影。

青めいた銀髪の少女が、扉を開けた目の前にじっと立っていた。

この夜ふけに何だろう。そう思ってかけようとした言葉を、レンはすぐに喉の奥へと押しやった。

「……」

様子が違う。

服も普段の旅装束だし、何よりその表情が張りつめていた。

――一人だけいなかった彼女。

魔王宮の中庭で。

沈黙機関イシスが立ち去った後も、キリシェは一人だけそこに残ることを選んだ。

だから魔王の広間にレンやエリーゼに魔王、家政婦長ルル、そしてフィアが集まっているなかで彼女だけは姿がなかったのだ。

考え事があるから、と。
「なにさキリシェ。そんな物思いの顔して」
「……話、いいか？」
「話？　ああ別に大丈夫だけど」
部屋の中にとぼとぼと入ってくるキリシェ。
椅子ではなくベッドに腰かける姿は彼女らしくもあるが、普段の凛とした声も今は弱々しく、座っている姿も肩が落ちこんで見える。
「……霊獣との戦いは、エリーゼから聞いた」
「ん？　ああ、それなら傷もフィア先輩に治してもらったから平気だけど」
「傷の大小じゃない」
緑玉色の双眸が、ゆれていた。
弱々しい自嘲の笑みとともに。
「……巻きこんでしまったな」
たった一言、竜の少女はそう言った。
「お前も気づいていると思うが、悪魔法印を奪った相手もお前を襲った獣も、終焉戦争の災禍の残り火だ。例の沈黙機関とやらの正体だった」
拳を握りしめ、肩を小さくふるわせて。

「アイツらがなぜ竜種、それに天使や悪魔に敵意を抱いているのか。その理由はわたしも知らない。どれだけ古くから闘争を続けてきたのか、何か過去に恨みを買う真似をしたのか。そもそも奴らの素性さえわたしは知らない……だが……」

……お前には、こんな穢い世界を見せたくなかった。

わたしが見せたかった光景はもっと別のもののはずだった――掠れた声を振りしぼり、少女が下唇を噛みしめる。

そして。

「……悪かった」

キリシェが頭を下げた。

「世界録を探す旅にお前を誘ったのは……こんな、三百年前からの醜い憎悪に巻きこみたかったからじゃない。わたしはただ――」

「何も変わらないさ」

その言葉を遮ってレンは答えた。

「なんだ。もしかして、そんなことで悩んで中庭に引っ込んでたのか？」

「そ、そんなこととは何だ!?　大事なことだぞ！」

ぱっと顔を上げて声を張りあげるキリシェ。
ゆれる瞳。
海よりも深く鮮やかな緑色を映すその双眸をまっすぐ見据えて。
「最初からだろ。世界録を見つけるっていうのは、たくさんの旅団と競争するってこと。そんなの最初からわかってたことだし」
「だが奴らは……」
「大したことじゃないって。ちょっとばかし旅団以外の奴らが参加してきただけだし」
世界録を巡る英雄たちの狂騒に変わりはない。
沈黙機関がいなくても、自分たちが法印を揃えて終焉の島に向かうという旅路は何一つ変わらなかったに違いないのだから。
「『わたしと行くか？』、そう言ってくれたのは誰だっけ」
「……そ、それはだな……」
ほんのりと顔を赤らめる竜の少女。
わずかに和らいだその表情に、レンは小さくはにかんだ。
「今さら言うの恥ずかしいけど、俺、本当に嬉しかったんだぜ。誘ってくれた時。誰かと旅団を組むのなんて夢みたいなことだと思ってたから」
外の世界を見たいと願い続けてきた。

英雄たちの冒険譚に胸を踊らせて、憧れていた。それがエルラインの足跡を辿る冒険であるのなら何をためらうことがあるだろう。

「竜帝とケンカして、女神と出会って、魔王と一緒に戦ったなんて……夢みたいだろ？今もこれから先も、この旅に後悔だけは絶対にないと思う」

「……本当か？」

「本当だよ。極端な話、悪魔法印だって気にしなくていいと俺は思うんだ。奪われたものは取り返す。それが難しくたって、みんなで知恵を絞れば終焉の島に行く方法だってきっとある。島に行く方法の議論なんて些細なことだよ。一番大事なことは――」

「大事なことは？」

「世界録を見つけること」

じっとこちらを見上げる彼女の肩に手をかけて。

「世界録、見つけよう。誰よりも先に俺たちで」

「……」

「だろ？」

「……も、もちろんだ！」

惚けた表情で何度も何度も頷くキリシェに、レンもまた力強く頷き返したのだった。

あとがき

今を生きる英雄たちの挑戦が、始まる――

本書を手にとっていただきありがとうございます、細音です。

おかげさまで『世界の終わりの世界録』5巻も無事に刊行することができました。

今回の秘境は「冥界」。この『世界録』の世界で、数ある秘境の中でも特に危険で広大な場所として知られている地下世界です。5巻では魔王宮での出来事が中心でしたが、魔王ヴェルサレムと五大災それぞれが冥界に自分だけの因縁の場所をもっていて、また機会があれば再登場させたいくらい設定の詰まった場所です。

そして今回のメインである偽英勇VS魔王、さらに沈黙機関ディスカント戦。

精霊の助けが得られないという初めての状況に陥った偽英勇が、何を拠り所にするのか。この5巻の中で、覇都エルメキア編の決戦を思いだしてもらえるような……そんな戦いになっていれば幸いです。

さて、ここで5巻の御礼を。

本の完成にご尽力くださった担当N様。5巻の原稿チェックに加え、『プロジェクト・

アンコール』もとにかくお世話になりました。
エリーゼの格好いい&可愛いカバーイラストを描いてくださったふゆの春秋先生。最後の三大姫にふさわしい迫力の表紙でした！　感謝！
そして、この本を手にとってくださった全ての方へ。
5巻を手にとってくださって本当にありがとうございます。このたびメディアミックスも多方向に展開することができましたので、そんな『世界録』の新企画も、よろしければお付き合いくださいませ。

プロジェクトアンコールについて――
●コラボCD『少年騎士と3人の少女の英雄詩』
『世界の終わりの世界録』1巻を丸ごと楽曲として演奏して頂きました。
作曲はドラゴンガーディアン様で、こちらは9月にリリース済。
大炎山を駆け上がるシーンから始まる緊迫感が、オーケストラシンフォニックメタルで見事に再現されていて格好良いです。
●コミック版『世界の終わりの世界録』
10月売りの月刊コミックアライブ（毎月27日発売）でいよいよ連載開始です。
作画は雨水龍先生。一つ一つの作画が綺麗で、特にフィアやキリシェの活き活きした

表情と愛らしい仕草は必見です。
連載初回はカラー原稿もありますので、ぜひご覧ください。

●ドラマCD『青の妖精と銀世界の騎士』
2015年10月23日発売。
今回のドラマCDにあたって書き下ろした完全オリジナル脚本を、素敵な声優の皆様に演じていただきました。ちょうど小説5巻と同時のタイミングでの発売になるので、ぜひ小説5巻と一緒に聴いてもらえれば！
脚本も、レンと三大姫のコミカルな旅をメインにしつつ、小説1巻の本編の裏話にあたるエピソードとして面白く出来たのではないかと思います。

最後に予告を。
『世界録』第6巻は、2016年2月刊行予定です。
レンたちの旅の佳境で待ち受ける者、再会する者、託す者――
あらゆる感情と戦いとが渾然一体となる「終焉の島、そして世界録」編。物語の一つの山場にふさわしいお話にできると思います。
どうかご期待ください！

細音啓

世界の終わりの世界録（アンコール）

プロジェクト・アンコール 大展開中!

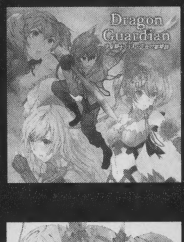
Project Encore

Comic

コミック版

2015年10月27日発売号より
月刊コミックアライブで
連載開始!
（作:雨水龍先生）

Image CD



イメージCD

メタル・プロジェクト
Dragon Guardianとコラボ!
ゲストボーカル:
原田ひとみ、青葉りんご、野宮あゆみ
『少年騎士と3人の少女の英雄詩』
好評発売中!

Drama CD

ドラマCD

細音啓先生の書き下ろし脚本!
発売元:
シーサイド・コミュニケーションズ
『青の妖精と銀世界の騎士』
好評発売中!

Rh/ Nel Ar. KyelS éle kiss I-Coru.

MF文庫
J

世界の終わりの世界録（アンコール）
5：降魔の大皇

発行	2015年10月31日　初版第一刷発行
著者	細音啓
発行者	三坂泰二
発行所	株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 0570-002-001（カスタマーサポート） 年末年始を除く 平日10:00～18:00まで
印刷・製本	株式会社廣済堂

©Kei Sazane 2015
Printed in Japan　ISBN 978-4-04-067942-6 C0193
http://www.kadokawa.co.jp/

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内の利用であっても一切認められておりません。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁・落丁本は、送料小社負担にて、お取替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取替えできません。）
電話：049-259-1100（9:00～17:00／土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041　埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1

【 ファンレター、作品のご感想をお待ちしています 】
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-12
株式会社KADOKAWA　MF文庫J編集部気付「細音啓先生」係「ふゆの春秋先生」係

二次元コードまたはURLより本書に関するアンケートにご協力ください。

http://mfe.jp/eqw/

●一部対応していない端末もございます。
●お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待受をプレゼント!
●サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。
●中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。

第12回 MF文庫J ライトノベル新人賞 募集要項

★MF文庫Jにふさわしい、フレッシュなエンターテインメント作品を大募集！ ★〆切は年4回！
★他社でデビュー経験がなければ誰でも応募 OK！ ★応募者全員に評価シートを返送します！

最優秀賞 正賞の楯と副賞100万円
優秀賞 正賞の楯と副賞50万円
佳作 正賞の楯と副賞10万円

★賞の概要
10代の読者が心から楽しめる、オリジナリティ溢れるフレッシュなエンターテインメント作品を募集します。応募者全員に評価シートを返送します。年4回の〆切を設け、それぞれの〆切ごとに佳作を選出します。選出された佳作の中から、通期で『最優秀賞』、『優秀賞』を選出します。

★審査員
さがら総先生、志瑞祐先生、三浦勇雄先生、MF文庫J編集部

★〆切
本年度のそれぞれの予備審査のメ切は、2015年6月末（第一期予備審査）、9月末（第二期予備審査）、12月末（第三期予備審査）、2016年3月末（第四期予備審査）とします。※それぞれ当日消印有効

★応募規定と応募時の封入物
未発表のオリジナル作品に限ります。日本語の縦書きで、1ページ40文字×34行の書式で80～150枚。原稿は必ずワープロまたはパソコンでA4横使用の紙に出力（感熱紙への印刷、両面印刷は不可）し、ページ番号を振って右上をWクリップなどで綴じること。手書き、データ（フロッピーなど）での応募は不可とします。

■封入物 ❶原稿（応募作品）❷別紙A タイトル、ペンネーム、本名、年齢、郵便番号、住所、電話番号、メールアドレス、略歴、他賞への応募歴（多数の場合は主なもの）を記入 ❸別紙B 作品の梗概（1000文字程度、タイトルを記入のうえ本文と同じ書式で必ず1枚にまとめてください） 以上、3点。
※書式等詳細はMF文庫J webサイトにてご確認ください。

★注意事項
※各期予備審査の進行に応じて、MF文庫J webサイトにて一次通過者の発表を行います。
※作品受理通知は、追跡可能な送付サービスが普及しましたので、実施しておりません。
※複数作品の応募は可としますが、1作品ずつ別送してください。
※非営利に運営されているwebサイトで掲載された作品も、本新人賞に応募できます。応募の際は、応募シートの他賞への応募履歴の欄に、掲載されているサイト名と作品のタイトル、URLをご記入ください。
※webサイトに掲載された作品が本新人賞を受賞した場合、掲載の取り下げをお願いする場合があります。ご了承ください。
※中学生以下の方は必ず保護者の同意を得てから、個人情報をご提供ください。
※なお、応募規定を守っていない作品は審査対象から外れますのでご注意ください。
※入賞作品については、株式会社KADOKAWAが出版権を持ちます。以後の作品の二次使用については、株式会社KADOKAWAとの出版契約に従っていただきます。
※応募作の返却はいたしません。審査についてのお問い合わせにはお答えできません。
※新人賞に関するお問い合わせは、カスタマーサポートへ
☎0570-002-001（月～金 10:00～18:00）
※ご提供いただいた個人情報は、賞選考に関わる業務以外には使用いたしません。

★応募資格 不問。ただし、他社で小説家としてデビュー経験のない新人に限ります。

★選考のスケジュール
第一期予備審査 2015年 6月30日までの応募分 選考発表／2015年 10月25日
第二期予備審査 2015年 9月30日までの応募分 選考発表／2016年 1月25日
第三期予備審査 2015年12月31日までの応募分 選考発表／2016年 4月25日
第四期予備審査 2016年 3月31日までの応募分 選考発表／2016年 7月25日
第12回MF文庫Jライトノベル新人賞 最優秀賞 選考発表／2016年 8月25日

★評価シートの送付
全応募作に対し、評価シートを送付します。
※返送用の切手、封筒、宛名シールなどは必要ありません。全て弊社で用意します。

★結果発表 MF文庫J挟み込みのチラシ及びホームページ上にて発表。

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-12
株式会社KADOKAWA MF文庫J編集部気付 ライトノベル新人賞係